筑波大学博士（国際日本研究）学位請求論文

日中文学における異類
―「蛇性」の表象をめぐって―

陳　婉瑜

2020 年度

目次

凡例

序章 1
　第１節　研究背景と研究方法 1
　第２節　日中の「異類」定義概観 2
　第３節　本論文の構成 4
第一章　蛇をめぐる日中の言説 6
　第１節　日中における蛇のイメージ 6
　第２節　異類婚姻譚の類型 17
　第３節　異類婚姻譚に関する先行研究 21
第二章　蛇にまつわる日中異類婚姻譚の翻案と改作―
「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の婬」をめぐって..... 26
　第１節　「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の婬」の関連とあらすじ 26
　第２節　主人公たちの表象とその意味 37
　第３節　蛇のイメージ 60
第三章　２０世紀後半の文学作品における「蛇女」のイメージ 72
　第１節　日中文芸における蛇女表象 72
　第２ 節　蛇女の表象の意味と役割..... 86
第四章　女性作家が描く異類婚姻譚 109
　第１節《青蛇》における発話権を持つ語り手..... 112
　第２節『蛇鏡』における蛇鏡の象徴と影響..... 124
　第３節『蛇を踏む』における蛇女との関係性..... 131
　第４節『異類婚姻譚』における夫婦関係..... 141
終章 150
参考文献 157

凡　　例

1. 本博士学位請求論文は、以下「本論文」という。

2. 本論文における日本語と中国語の文献の表し方：
　①中国語の著書は《　》、論文は〈　〉、日本語の著書は『　』、論文は「　」を用いる。
　②辞典の見出し語は、【　】で表す。

3. 本論文における引用の表し方：
　①日本語の書名・題目はすべてもとの表記に従った。
　②中国語原文から引用する場合、原文のまま、中国語の簡体字・繁体字に従った。
　③引用文の省略は(中略)を用いる。
　④年号は西暦を用いる。

4. 参考文献において、中国語の文献における著者の名前は、すべて常用漢字に統一した。論文の題目、本の題目、出版社などの情報は、もとの表記簡体字・繁体字に従った。

5. 特に明記しないかぎり中国語文献からの筆者訳はすべて筆者による。

序章

本論文は、日本と中国の文学作品における人間の男性と蛇との異類婚姻譚をめぐる比較研究である。日本と中国の蛇にまつわる異類婚姻譚における蛇の表象、役割、人間との関係性に着目し、これらの物語の関連性、共通点、相違点の検討を通して、これらの物語の発展と変容における特徴を分析・考察する。

これまでの研究では、異類婚姻譚を論じるときに、主に神話や伝説をめぐる研究が多く、古典から現代文学に至る蛇の表象とその意味に着目する研究は少ない。本論文では、異なる歴史的・文化的背景の中で生み出された日本と中国の文学作品において、「蛇女」の表象がどのように変容したのかに焦点をあてる。日中の文化の中の蛇のイメージをふまえた文学作品における「蛇女」の表象が、家父長制度、女性解放の思想、ジェンダー規範などといった社会や思想の変遷に伴い、どのように変化していくのか、その結果、「蛇」とされる女性たちと登場人物の力関係、コミュニケーションのあり方や発話権がどうなるのかを明らかにすることが、本論文の目的である。

第 1 節　研究背景と研究方法

修士論文では、川上弘美の作品に表現されている日常的世界と異界の問題に着眼し、両方の越境性とポスト少女のセクシュアリティ及びポスト恋愛の不可能性を取り上げ、川上文学における身体性を研究課題として探求したが、その時から川上文学の中の「異類」というテーマに興味を持ち始めた。日本と中国の文学において、異類婚姻譚というテーマはよく出てくるものだが、物語が成立した当時の時代背景や社会環境を考えると、婚姻の自由がなかった時代には物語に心情や希望を託したのだとも考えられる。しかしながら、現代文学においても異類と異類との婚姻を扱う物語は常に登場する。そこにどのような意味があるのか、という問題意識が、本論文執筆の背景である。

本研究は、日本と中国語圏（中国・台湾）のテクスト狩猟及び調査・分析によって進められるものである。それぞれの地域の図書館などで、事例を収集するとともに、先行研究を整理し、まとめていく。異類の種類は様々であるが、本研究においては「蛇」に焦点を当てることで、考察の拡散を防ぐ。分析・考察はジェンダー論の視点を取り入れた比較文学の手法で行うが、民俗学など知見も適宜参照し、考察を深める。

第 2 節　日中の「異類」定義概観

まずは、本研究において取り扱う「異類」の定義について概観したい。「異類」の定義を確認しておきたい。

日本国語大辞典は【異類】の意味を「(1) 種類の異なったもの。また、普通と違う異様なもの。(2) 人間以外の動物。鳥、獣など。[1]」とし、中日辞典には【异类】解釈を「(1) 〈旧〉他民族・異民族。(2) (人類と)種を異にするもの。動植物・神・妖怪をさす。[2]」とし、現代日漢大詞典は【異類】を「(1)种类不同(的东西)(2)种族不同(的生物)(3) <佛>人类以外的动物[3]」と記されている。

上述の解説をまとめると、「異類」というのは二つの意味を持つようである。一つは類型の違うもので、種類や種族の異なることを指す。もう一つは特に「人間ではない」もので、動物や妖怪などを指す。「異類婚姻譚」とは伝説、民話、昔話などに人と異類の婚姻譚という意味である。

---

[1]日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 2000『日本国語大辞典　第二版　第一巻』小学館、P.1399
[2]北京・商務印書館，小学館共同編集 2016『中日辞典　第 3 版』小学館、P.1869
[3]宋文軍・姜晩成編 1987『現代日漢大詞典』北京商務印書館、東京小学館、P.113

また、民俗学辞典では「異類求婚譚」の解釈を次のように述べている。

異類との婚姻を物語る昔話には、異類が男性の場合と女性の場合とがある。後者には鶴女房・蛤女房などがあり、動物報恩譚の形式のものが多い。前者の代表的なものは蛇聟入り・猿聟入りおよび河童聟入りであるが、これはさらに四つの型に分類することができる。[一]苧環型または立聴型。[二]鴻(鷲)の卵型。[三]水乞型。[四]蛙(蟹)報恩型。[4]

そこで、日本では「異類婚姻譚」を論じる場合、その「異類」を動物とつなげるイメージが強いと言える。妖怪、幽霊・神様が登場する場合は怪談や幽霊譚に分類されている。異類の動物は、人間に姿を変えて現れることを通して人間と関わりを持つことができる。動物は、人間に「変化」することによって人間に受け入れられやすくなると考えられる。その一方、中国では異類を論じる時、人間以外のもの、という意味が含まれるが、特に動物のイメージはない。中国六朝時代と唐代の異類婚姻譚の中に、異類を神、仙、鬼、妖に分類し、人間化した動物を上述のどれかのカテゴリーに属す傾向がある。唐朝における科挙対策、宗教信仰、社会風景などの原因から時代背景は文学作品に対する影響され、このような「非日常的」な異類との婚恋関係は先秦時代の伝説から始まり、六朝時代の志怪小説に引き継がれ、現代の文学作品にも影響を及ぼすと見られる。

日本と中国の作品を比較してみると、同じ漢字文化圏ではあっても、異類婚姻譚にはニュアンスの違うところがあると考えられる。この日中の相違はどこから来るのだろうか。カトリン・アマンの見解によると、日本文学における多くの変身譚においては「異類」と「異界」という二つの概念が重要だと次のように指摘する。「異類」とは、禽獣、変化などの人間でないものを指し、特に異類婚姻譚、つまり人間と動物の性関係および結婚を巡る物語に関連する。「異界」は日常的世界から離れた別世界、化物、妖怪と憑物および異類、幽霊、鬼などの世界を言い、特に怪談と関連する。[5]

[4]民俗学研究所編 1951『民俗学辞典』東京堂出版、P.44
[5]アマン・カトリン 2000『歪む身体現代女性作家の変身譚』専修大学出版局、P.11

アマンの指摘を踏まえて、例えば川上弘美の作品を見てみると、「異類」に関する作品はデビュー作の『神様』から、『蛇を踏む』、『パレード』、『龍宮』、『センセイの鞄』などの作品の中にいくつかの短編があり、そこで熊、蛇、天狗、また他界の人が登場人物として現れる。それらの物語は、異種が人間に変化するもの、異種が変容せず、人間が異種に変容するものに分けられ、いずれの場合も、人間と異種の間につながりがある。このように、日中の異類婚姻譚の相違は、両者の「異類」や「異界」についての概念の相違を背景にしていると考えられる。本研究では、先行研究をさらに調査することでこの相違を明らかにした上で、それぞれの作品分析を進めたい。

第 3 節　本論文の構成

本論文の構成は、以下の通りである。

「日中文学における異類―「蛇性」の表象をめぐって」

序章

第一章　蛇をめぐる日中の言説

第二章　蛇にまつわる日中異類婚姻譚の翻案と改作―「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の婬」をめぐって

第三章　２０世紀後半の文学作品における「蛇女」のイメージ

第四章　女性作家が描く異類婚姻譚

終章

参考文献

序章では、本論文の目的、先行研究と論文構成について述べる。

第一章では、蛇をめぐる日中の言説において、異類婚姻譚の歴史の流れと類型を考察して、先行研究の論文を取り入れて、それらの特徴性と共通性を分析する。

第二章は蛇にまつわる日中異類婚姻譚の翻案と改作から、馮夢竜「白娘子永鎮雷峰塔」(1624 年)と上田秋成「蛇性の婬」(1776 年)を取り上げ、それらの物語の中での異類と人間との関係性の分析から、女性たちが異類として描かれる意味や役割を考察するものである。二作の関連性と共通点、相違点の検討を通して、これらの物語の発展と変容における特徴を考えたいと思う。

第三章では２０世紀後半の文学作品における「蛇女」のイメージの考察を行う。1970 年代、80 年代に発表された日本と中国の現代文学作品から、蛇との人間の男性との異類婚姻を扱った作品中上健次『蛇淫』(1976 年)、水上勉『白蛇抄』(1982 年)、ラウ・イーチョン(劉以鬯)の『蛇』(1978 年)を取り上げて分析する。

第四章では、女性作家が描く異類婚姻譚について考える。女性作家が描き出す「蛇のイメージ」を比べる。日本では川上弘美『蛇を踏む』(1996 年)、坂東真砂子『蛇鏡』(1994 年)、本谷有希子『異類婚姻譚』(2016 年)、中国圏では李碧華《青蛇》(1993 年)などを取り上げ、異類婚姻譚の変奏ともいえるこれらの作品について、支配者と被支配者の関係性、権力関係、性差や性役割の問題などの問題を考察していきたい。

終章では、各章の論点をまとめる。

第一章　蛇をめぐる日中の言説

第一章では、日本と中国における蛇の言説について概観する。神話や伝説の中の蛇のイメージの概観を行うとともに、蛇をめぐる物語の中でも本論文において重要である異類婚姻譚に焦点をあて、その類型と先行研究をまとめたい。

第１節　日中における蛇のイメージ

まずは、日本と中国において蛇がどのような意味を持つ生き物として捉えられてきたのかを概観したい。説文解字の釈義では它はへびの象形文字であり、它と蛇を同字として扱う。《大辭典》によると、中国語では【蛇】という字の意味は次のように解釈している。

1. 動物學名詞。蛇類。本作它。
2. 星名。〈左傳・襄二八年〉蛇乘龍。注：蛇，玄武之宿，虛危之星。
3. 姓。‘春秋’時‘齊’公族‘蛇丘氏’之後，‘姚萇’皇后有‘蛇氏’。[6]

筆者訳：
1. 動物学の名詞。蛇類。本来は「它」という意味。
2. 星の名前。
3. 姓の意味。春秋時代齊の公族蛇丘氏の後裔に姚萇皇后の姓は蛇である。

また、日本の語源辞典によると、【蛇】と【龍】の解釈は次のように述べてられている。

> 爬虫類の動物。ヘビの元の形はヘミで、有害の蛇を指した。今ではヘビは総称だが、まむしをハメ、ハミ、ハビ、ハンビというところがあり、ヘミは、毒虫であった。[7]

[6]三民書局編纂委員會 1985《大辭典》三民書局、P.4213
[7]堀井令以知 1989『語源大辞典』東京堂、P.224

語源:有鱗目ヘビ科の爬虫類の総称。体は円筒形で縄のように細長く小鱗で覆われている。不吉なもの、執念深いものとして忌み嫌われる。ヘビは『大言海』にいうようにヘミの転で、その語源はハヘムシ(延虫)の約としている。ほかにフセムシ(伏虫)の反、ハヒムシ(這虫)の義、ハヒ(匍)の義、ハム(食)の義、ヘミ(経身)の転、ハヒウネリムシ(這蜿蜒虫)の義など、言い方はきわめておおい。最後のハヒウネリムシ説はこじつけであるが、それより前の説はそれぞれに意義はあるものの、いずれの説も一つに決定しがたい。このような調子で意義づけするならむしろ生態上からいって、蛇は非活動時期を除き、だいたい三週間から六週間くらいを周期として脱皮を行うから、ヘミ(蛇)はヘミ(変身)だとも言えてくる。[8]

また、【龍】の解釈と語源は次のように述べている。

語源: 中国で神聖視された想像上の動物。蛇のような体で大きな二本の角と牙のある口、長い口髭をもち、四本の足がある。時に空に昇って雲をおこし雷雨をつかさどるとされている。リュウ(龍)は呉音および慣用音であり、漢音ではリョウという。中国では、鳳・麟・亀とともに四霊の一つとされ吉祥の動物とされた。日本ではしばしば蛇と同一のものとされた。龍宮が海中にあるとされたように龍は水と密接な関係を持ち、されに日本の水神の表徴とされる蛇信仰と結びついた結果、龍神信仰が生じた。[9]

中国の昔話において、蛇は常に神聖なる存在だと考えられてきた。たとえば、六朝時代では地理書である《山海経》(前 4 世紀-3 世紀頃)は、女媧と伏羲は人類の祖先と見なされる。

《山海経》は大きく「山経」と「海経」の二部分に分けられる。それぞれ地理書の体裁をとり、川の水源や山と山との間の距離を記録する一方、そこに生息する不思議な人間や鳥獣の情報や、神々に関する情報を収めている。神々の祭祀の事や、吉兆・凶兆に関する記述も多く、神話・伝説の豊庫とも言える特徴を具える。[10]

---

[8]吉田金彦 2001『語源辞典　動物編』東京リスマチック、P.218
[9]吉田金彦、前掲書、P.262-263
[10]竹田晃・黒田真美子編 2007『中国古典小説選 1 穆天子伝・漢武故事・神異経・山海経他〈漢・魏〉』明治書院、P.52

《山海経》の作者が不詳ということは古くからの定説となり、「戦国から前漢代にかけて複数の巫祝によって編まれた神話性の強い原始的地理書である[11]」と考えられる。

《山海経》の名が初めて文献に現れるのは前漢の司馬遷の『史記』の中であり、以下のように述べられている。

> 大宛傳の賛に、故言九州山川、尚書近之矣。至禹本紀、山海經所有怪物、余不敢言之也。〈故に九州の山川を言ふは、尚書之に近し。禹本紀・山海経に有する所の怪物に至たては、余敢へて之を言はざるなり。〉[12]

後漢の劉向、劉歆父子の校定を経て世に出された。現存する注釈は東晋の学者の郭璞注以降はすべて明代のものである。《山海経》の内容は「山経」、「海内経」、「海外経」、「大荒経」などの十八編で構成される。また、《楚辞》においても「女媧」が登場されている。矢田尚子は《楚辞》の由来を次のように述べている。中国では南の《楚辞》と北の《詩経》が後世の文学作品に影響を与えている。

> 「楚辞」とは、本来、中国の戦国時代(前四〇三-前二二一)に、長江中流域の楚の国で生まれたとされる韻文様式の文学ジャンルのことである。現在では一般的に、楚辞作品を集めた書物としての『楚辞』は、戦国時代後期から後漢(二五-二二〇)にかけて作られたとされる楚辞作品、すなわち「離騒」「九歌」「天問」「九章」「遠遊」「卜居」「漁父」「九弁」「招魂」、「大招」、「惜誓」、「招隠士」、「七諫」、「哀時命」、「九懐」、「九歎」「九思」の一七作品、後漢の王逸という人物が注をつけて著した『楚辞章句』十七巻がもとになっている。[13]

以下の引用文は《楚辞》で「女蝸」が記述するところである。

> 「女媧有體，孰制匠之？」〈女媧體有り。孰か之する〉[14]

---

[11]松浦史子 2012『漢魏六朝における『山海経』の受容とその展開 ：神話の時空と文学・図像』汲古書院、P.5
[12]松田稔 1995『『山海經』の基礎的研究』笠間書院、P.4
[13]矢田尚子 2018 『楚辞「離騒」を読む ： 悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐって』東北大学出版会、P.1
[14]松田稔、前掲書、P.148

《山海経》の大荒西經において、「女蝸」が描き出されている場面がある。

有神十人，名曰女媧之腸，化為神。[15]
神十人有り。名を女の蝸の腸と日る。化して神と為る。[16]

また、《山海経》の海外北経に人面蛇身の「燭陰」という神も登場する。

鍾山之神名曰燭陰。視為晝、瞑為夜、吹為冬、呼為夏。不飲不食不息，息為風。身長千里。在無臀之東。其為物人面蛇身、赤色，居鐘山下。

鍾山の神は名を燭陰と曰ふ。視れば昼と為り、瞑れば夜と為り、吹けば冬と為り、呼べば夏と為り、飲まず食はず息せず、息すれば風を為る。身長千里。無臀の東に在り。其の物たる人面蛇身、赤色なり。鍾山の下に居る。[17]

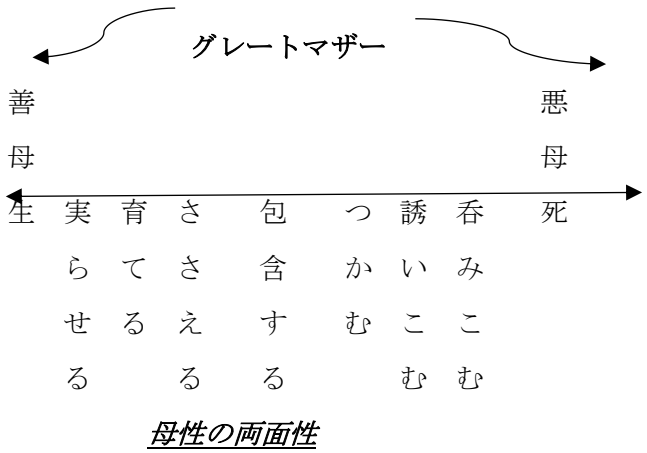
そこで、中国におけるトーテミズムの根拠について、松本信廣は「霊魂動物の思想、動物崇拝の習俗、半人半獣の神々の信仰[18]」という三つのことがトーテミズムの間接の影響と思われ、広く上代支那に行われたと述べている。

以上のように、中国の古典の中では「蛇」を神格化していると解釈できる。一方、日本の神話にも蛇が登場する。『古事記』(712 年) や『日本書紀』(720 年) では、八岐大蛇や肥長比売のエピソードが語られ、伊邪那岐命が伊邪那美命を地上に連れ戻すために黄泉の国に行った際、伊邪那岐命は腐った妻に蛇の姿の雷神がまとわりつく様を見て逃げ出す。笹間良彦は日本の昔話において、蛇とかかわり合いは記紀の八岐大蛇退治神話(ペルセウス・アンドロメダ型神話)を始めとして三輪山伝説・賀茂神話などのほかに緒方三郎伝説やその類型が数多くあり、蛇との交婚譚や蛇を祖神とする話はすこぶる多い[19]と指摘し、龍蛇の細長い身がうねりつつ移動するさまは空間的時間の経過と事物の変化の起伏を示し、蛇に対する妖しい神秘感と怖れからくる迫力に呪力霊力を認めざるを

[15]袁珂 1995《山海經校注》里仁書局、P.389
[16]松田稔、前掲書、P.199
[17]松田稔、前掲書、P.223
[18]松本信廣 1922「支那古姓とトーテミズム(下)」『史学』一巻、一・二號、 P.271
[19]笹間良彦 1991『蛇物語―その神秘と伝説―』第一書房、P.25

得ないことから神格化された固定観念を生じた[20]と述べている。

そこからみれば、日本では蛇には他界への通行する要素が含まれ、生と死のイメージが併存すると考えられる。また、阿部真司は『蛇神伝承論序説』で、日本神話の始原的原理は女性原理であり、各世界を治める神々の中で伊邪那岐命を除き、ほかの四神(伊邪那美命、天照大神、天孫、神武天皇)には蛇神の属性が備わっていると述べ、『記』『紀』神話で、「女陰(ほと)」ということを大地母神の存在と重ねる。「ムロ」はこの世界から他の世界つまり他界への遮断装置であり、「女陰」が男女の通路と接点でそこを通過するか否かは一つの生命の誕生を促すという分岐点である。「ムロ」と「女陰」が生命の更新と再生を意味する。蛇神が常に「ムロ」と「女陰」と一緒に存在することは蛇が他界への通過能力があり、マムシにみられる死をもたらす呪能があり、冬おこもりを通過し、再生、自然の豊饒をもたらす[21]と述べている。大地母神、豊饒神が蛇神と結びつくことは、蛇がもたらす不死と再生の観念から容易に考えられ、高天原にある伊邪那美命のイメージは「生む」神としての蛇神である[22]、という指摘は、河合隼雄の「グレートマザー(太母)」を想起させるものでもある。河合は母性の根源において生と死の両面性をもち、大地母神の像は生み出すという生殖力をもつ、また死者を受け入れる死の女神でもあったと指摘し、グレートマザー(太母)という単語を使って、次の図のように示している。[23]



[20]笹間良彦、前掲書、P.18
[21]阿部真司 1981『蛇神伝承論序説』伝統と現代社、P. 15
[22]阿部真司、前掲書、P.9-12
[23]河合隼雄 1977『昔話の深層』福音館書店、P.31-33

吉野裕子は、蛇の生態による日本の神話、信仰、民俗への影響と古代日本人の精神と行動に大きな役割を果たしたと仮定した。考察した結果では、古来日本人は人生行事の折目節目や祭りの時、蛇のトグロを造形するが、これは神迎えといわれる。そのカリヤの内部は蛇の胎内、または人工疑似母胎として見立てられ、人はそこに籠り、そこから出ることをもって、蛇の脱皮を擬き、あるいは新生の呪術としたのである[24]と主張する。蛇の「脱皮」の生態から女祖先神として捉えられる主因は脱皮による出産と永生に繋がることである。まず、「スデル」とは「巣出る」で、生まれること、「スデ水」とは「産湯」で、脱皮が出産に擬かれることを示す。また、蛇は脱皮があるから若返り永生し、人間は脱皮がないから早死する[25]と論じている。

また、日本や台湾では、蛇の外形が男根に相似しており、毒蛇の強烈な生命力とその毒で敵を一撃の下に倒す強さや「脱皮」による生命の更新が蛇信仰を生んだ[26]とも吉野は指摘する。それに、笹間良彦は「人面蛇身は繁栄力の表徴であり、ナーガ神の本質である[27]」と蛇類尊敬の思想を論じている。

台湾では、その原住民の高砂族に蛇信仰が顕著で、毒蛇の「百歩蛇」が信仰の対象である。吉野によると、太陽・百歩蛇・頭目家(酋長)の間には密接な関係があり、頭目家の祖先は蛇で、この蛇は太陽の子であった、というような伝承が数多く見られる[28]という。陳國鈞の《台湾原住民社会始祖伝説》では、次のように神話と伝説の差異を解釈しながら、排灣(パイワン)族の始祖伝説における「蛇」の誕生を太陽卵生、蛇卵生と蛇化生という三種類[29]にまとめている。

世界各地民族社會裏，大多流行著一些神話 Myths，傳說 Legends，民譚 Folk-tales，以及寓言 Apologus 等等，按這些東西都是屬於民間口傳的故事範圍，其中以神話與傳說的性質較為接近。所謂神話，一般說來是要說明有關宇宙、生死、人類、動物、種族、

[24]吉野裕子 1999『蛇―日本の蛇信仰』講談社、P.75
[25]吉野裕子、前掲書、P.284-285
[26]吉野裕子、前掲書、P.14
[27]笹間良彦 1975『龍 ： 神秘と伝説の全容』刀剣春秋新聞社、P.78
[28]吉野裕子 2007『吉野裕子全集　5』人文書院、P.26-29
[29]陳國鈞 1964《臺灣土著社會始祖傳說》幼獅文化、P.118

男女、宗教儀式，古舊風俗，以及其他有神秘性事物。所謂傳說，乃是敘述某件為眾人所共信事物的始末。[30]

筆者訳:世界各地の民族社会において、神話、伝説、民話、寓話などが流行しているが、これらは民間口述の物語に属し、その中では神話と伝説の性質はより近いものである。神話とは一般的に宇宙、生死、人類、動物、種族、男女、宗教儀式、伝統風俗または神秘な物事を記したものである。伝説とはすべての人々が信仰しているある物事の始末を叙述することである。

排湾族(パイワン)における蛇の意義と重要性は、他の文献でも説明されている。胡台麗は排湾族の歴史を排湾語で説明し、百歩蛇のことを「その最も真実であるものだ」と次の引用部分を釈義している。

胡台麗在《排灣文化的詮釋》提出，排灣族的口述歷史分為代代傳統的 jautsiker(真實傳說)與 mirimiringan（虛構傳說）。 泰武鄉平和村(Piuma)有非常貼近村人現實生活的關於百步蛇的 tjautsiker(真實傳說)。排灣語的蛇叫做 qatjuvi，而平和村人稱百步蛇為 kamavanan，字根 mavan 的意思是「真實的」，kamavanana 可譯為「就是那個最真實的」。[31]

筆者訳:胡台麗は『排湾文化の解釈』において、排湾族の口述歴史は代々に伝わってきた真実伝説と虚構伝説があると述べている。泰武郷平和村(Piuma)では村人の現実生活に関わる百歩蛇についての真実伝説がある。排湾語の蛇は qatjuvi と呼ばれ、平和村の人々は百歩蛇を kamavanan と呼ぶ。Mavan の意味は真実であり、kamavanana の意味は「その最も真実であるものだ」と訳される。

宮本延人は『台湾の原住民族』において、百歩蛇の模様を使えることは頭目だけの特権でありながら、権威を示す表現でもあると次のように述べている。

百歩蛇の頭の形と人間の像を模様化することは頭目家のみ許された特権で、部落の一般の者が使用することはタブーであった。彼らは着衣をよく刺繍で飾るが、頭目の着物には人面や百歩蛇の模様などをつけることができた。(中略)頭目の家の軒には、幅

[30]陳國鈞、前掲書、P.1
[31]胡台麗 2010《排灣文化的詮釋》聯經、P.14-15

二〇センチぐらい、長さ二-三メートルぐらいの木の板が横に吊ってある。この板には、人面や百歩蛇の形を彫り、中には着色したものもある。この板が軒に吊ってある家が頭目の住居という一種の権威を示す標識である。[32]

紙村徹は『蕃族調査報告書』からパイワン族の創生神話において、蛇婿入りの物語「霊蛇クレレと契りたる頭人家の女モアカイカイ」、「霊蛇クレレレと婚してモアカイカイを生みたるチョコチョコの話」など 15 個の蛇の物語を取り上げ、「その中にパイワン族に属する蛇伝説は 10 個もある[33]」ことを指摘した。

このように、日中において蛇は信仰の対象となってきたわけだが、蛇のイメージを考えるためには、竜蛇信仰についても言及する必要があるだろう。竜蛇信仰という概念はインド、中国、台湾と日本の神話と伝説の中によく現れた信仰である。

しかし、龍または竜が架空の動物像であるのに対し、蛇は実在する動物である。中国の歴史を振り返ってみると、多くの王朝では龍というのは皇帝の象徴であり、黄色の竜袍を使えるのは帝王だけであった。印度の竜・蛇信仰は大陸に伝わり、中国から日本へももたらされ、いわゆる荒神となって普及するに至った。

龍と蛇の関係性について、楚戈は『龍史』において、龍の起源とは農業の「農」という音声から名前を付けられたということを次の引用文で解説している。

東亞長久不變的文化共同性象徵即為龍史。十九世紀以前，東亞人都共同使用一本「萬年農民曆」，簡稱「農曆」，又叫「民曆」。農曆其實就是龍曆，龍因農而得名也。（中略）龍以農聲為龍名，是農業之雨水神。先有農業，農音來自下雨時雷聲隆隆，驚蟄春耕。農業依賴雨水，而後才有農神，故龍的根源是農，農字的音源是雷聲。[34]

筆者訳:東アジアで長い間変わらない文化共同の象徴とは龍史である。十九世紀以前、東アジア人は共同で「万年暦」という暦を使い、「農暦」や「民暦」と略してきた。農暦というのは龍暦であり、龍は農のためにその名前を付けられた。(中略)龍は農の音声で龍と名づけられ、農業の雨の神様である。先に農業があり、啓蟄になると春耕が始まるが、農の音声は雨が降る時に雷の音がゴロゴロ鳴ることからきている。農業には降雨が必要となり、水と耕作を司る龍は農業神として信仰される以来、龍の

[32]宮本延人 1985『台湾の原住民族 ： 回想・私の民族学調査』六興出版、P.182
[33]紙村徹編・解説 2006『神々の物語 ： 神話・伝説・昔話集』草風館、P.329-342
[34]楚戈 2009《龍史》國家圖書館、P.14-19

根源は農となり、農という字の音声の由来は雷の音である。

しかし、【龍】に関する解説では古くから区別できず、次のように「龍は時に蛇と相似し、蛇は時に龍と相似する」という記載もある。

龍蛇之間，自古即難以劃分清楚，若甲骨文中之「龍」字，均以蛇形表之，作

，其形體之衍化，觀之則猶若「鳥」之與「鳳」，除甲骨文龍以蛇字形表外，另有龍蛇不分幷舉而言者，王充論衡講瑞云:龍或時似蛇，蛇或時似龍。[35]

筆者訳:龍と蛇は、古くからはっきり区別はできず、甲骨文字の中に「龍」という文字は全部蛇の形で表し、 のような形で、その形体の変化はまるで鳥と鳳のように見える。甲骨文字では龍は蛇という字で表すほかに、龍と蛇はあまり区別はないと次のような例がある。王充は『論衡』講瑞篇に龍は時に蛇と相似し、蛇は時に龍と相似する。

笹間良彦は東洋の龍と西洋の龍との差異といえば、東洋の龍は神話や伝説で神の存在として尊敬されることに対して、西洋の龍は神話の中で悪龍の存在として退治される対象であると次のように述べている。

東洋龍の最も古い伝説は中国神話及びインド神話に見られるし、西洋龍の最も古い伝説はギリシア神話中のカドマスとハ―キュリーの龍退治に現れている。（中略）
東洋の龍は尊敬され、西洋の龍は悪龍として退治されているが、いずれ国、いずれの民族も龍思想を生じた初めの頃は、人間に害を与えるものとして退治される対象になっているのは、こうした悪獣と自然の脅威と被害を排除せんとする人間の願望から想像されて作られたものである。[36]

また、笹間は東洋の龍の思想と形態について、中国では「蛇類尊敬の思想から理想化した蛇類の姿が中国古代の龍の姿であって、崇高さをいろいろと加味して行くうちに三停

[35]潘江東 1981《白蛇故事研究（上）附資料彙編》學生書局、P.5
[36]笹間良彦 1975『龍 ： 神秘と伝説の全容』刀剣春秋新聞社、P.47-50

九似の龍神が形づくられて行き、現実の蛇からは遙かに離れた姿の龍が、空想上に飛躍していろいろの霊力を付加され[37]」ることに対して、日本では開闢神話の『日本書紀』と『古事記』のにおいて龍神の姿が現れる。特に、「日本では人畜に害をなすものは蛇であって、霊威あるものは龍に分けられる[38]」と指摘している。

さらに、山本達郎は龍の造形や意味付けは神話的な要素が必要となり、「政治権力の由来の話は水物としての龍が出てくるというのは東南アジアからずっと日本に広まっている注目すべき特色である[39]」と述べている。笹間良彦は天地創造の神話に龍蛇の姿が欠かせぬ要素の原因の一つは「蛇の持つ霊力を人間が身に秘めたいという願望の潜在意識から蛇を祖霊(トーテム)とする傾向や繋がりを求めるようになったもの[40]」と述べている。

龍のイメージと皇帝の権威に関して、張競は「皇帝の象徴として龍のイコンが用いられたのも、聖性を付与する結果である。龍は自然界を主宰する神であり、皇帝は天意の下で人間界を支配する至上者である[41]」と論じている。

大庭祐輔は竜神信仰における龍と蛇の特徴を次のように箇条書きでまとめている。

竜信仰の特徴：

(1) 竜は王の象徴である。最高位の瑞兆であり、政治を司っている。
(2) 海神、水神である。
(3) 川を竜とみたてる考えがあった。中国では揚子江、黄河などを竜とみたてている。
(4) 再生、不老長生の象徴である。
(5) 「竜の子は魚」という考えが中国、朝鮮にはみられる。日本では「竜の子は蛇」と考えられていた。
(6) 竜は主として水中に棲むが、空中を飛翔できると考えられていた。

---

[37]笹間良彦 1975『龍 ： 神秘と伝説の全容』刀剣春秋新聞社、P.78
[38]笹間良彦、前掲書、P.89
[39]山本達郎「龍とナーガと蛇」、アジア民族造形文化研究所編 1992『アジアの龍蛇 ： 造形と象徴』雄山閣、P.9
[40]笹間良彦 1991『蛇物語 ： その神秘と伝説』第一書房、P.18
[41]張競 2002『天翔るシンボルたち ： 幻想動物の文化誌』、P.10

蛇信仰の特徴：

(1)『捜神記』の記述から家を司っていると考えられる。

(2)竜と同じく、再生、不老長生の象徴である。

(3)水神である。

(4)農業あるいは稲作の神となっている場合もある。

(5)現代は授福神となっている。[42]

以上の内容からみると、竜蛇信仰では竜と蛇は同じく水神として見られ、再生と不老長生の象徴があると考えられる。しかし、龍は非実在で想像上の動物にもかかわらず、西洋や東洋の神話によく登場するが、各文明と歴史の影響によって龍に対する思想や表現が異なっている。東洋では龍は大蛇崇拝と仏教思想の影響で龍神として神格化され、皇帝の象徴とも見られているが、西洋では人間に被害を与えるのを防ぐため悪龍や毒龍は退治されてしまうことが多い。

東西におけるこの龍に対する概念の違いは、蛇のイメージの違いとも呼応するものであるように思われる。東アジアにおいて、蛇の存在は神と見なされ、信仰の対象として考えられることが多いが、それにひきかえ、キリスト教社会では聖書の中で蛇を悪の象徴として扱っている。

本論文で扱うのは日中の文学作品であるが、特に近現代文学においては、ヨーロッパにおける蛇のイメージが影響している場合も多いため、ここで聖書の中の蛇の姿にも言及しておきたい。

創世記でエデンの園で蛇はエバとアダムを誘惑し、禁じられていた知恵の樹の実を食べたことからエデンの園から追放する。聖書[43]の創世記第三章では「蛇の誘惑」という題目をつけ、蛇がエバを誘惑するシーンを次のように述べている。

3：1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。

3：5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。

---

[42]大庭祐輔 2006『竜神信仰 ： 諏訪神のルーツをさぐる』論創社、P.85-86

[43]『聖書　新共同訳―旧約聖書続編つき』1987 共同訳聖書実行委員会、三省堂

その後、エバとアダムが蛇に誘惑され、禁断の果実であるリンゴを食べてしまい、神との約束を守らなかったため、二人を楽園から追放し、蛇を地を這う動物とし、エバには産みの苦しみが与えられ、アダムに苦労して地を耕さなければ食料を得ることができなくなったと次のような記載がある。

3:14 主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。」

3:16 神は女に向かって言われた。
「お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する。」

3:17 神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い、取って食べるなと命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。」という神からの夫のアダムに対する発言がある。

上述の内容から、聖書に誘惑者として登場する蛇が、後世に至るまでその悪いイメージを変えられないことが見られる。後に、西洋の龍に関する物語に至るまでは悪龍の姿であり退治される対象として見られる。

第 2 節　異類婚姻譚の類型

前節では日中における蛇のイメージを概観したが、人間と蛇との接点は昔話、伝説といった口承を含めた文学作品の中で、異類を登場人物とした形でも数多く現れる。

吉野裕子(2007 年)は現世における蛇を祖霊の姿そのものの現実の生きた蛇、蛇に見立てられる樹木、山、家屋など、仮に人間の姿になっている蛇[44]の三つの種類に分け、人間の生誕は蛇から人への変身であり、死は人から蛇への変身であると述べているが、物

[44]吉野裕子 2007『吉野裕子全集　5』人文書院、P.23-24

語では「仮に人間の姿になっている蛇」がよく語られるといえるだろう。こうした物語の中の異類の種類は、超自然の妖精と魔物や異界を支配できる動物、野生と家畜動物があるが、多くの場合には異界を支配できる動物を指すようである。動物から人間への変身は人間から動物への変身より明らかに多く、それは動物が異類として変身することによって非日常世界から人間の日常世界に入り込むことができる[45]からだと考えられる。

中村禎里(2006 年)は動物から人間への変身をめぐって、動物が変身した結果としての人間が真実の人間なのか、それとも動物が人間の仮面をつけただけなのかという問題を取り上げてきた。その点について、中村は化け人間は肉体と心理、両方とも完全に人間であり、日本昔話の世界で動物も潜在的人間であると述べている。[46]そして、日本昔話における動物から人への変身の意味を通婚、報恩、加害、悪戯、利便、その他、不明という七つの類型に分けている。それにひきかえ、人から動物への変身する場合には、常に媒介者があり、変身の意味として疎外、昇華、利便、加害、不明に分けられるという。[47]さらに、中村は「ヘビ神は水神としての機能をいちじるしく発揮していたため、祖神としての資格をえやすく、したがって人格神化しやすかったのである。ヘビが食用動物でなかったことも、祖神たるに有利な条件だったであろう。またトヨタマヒメ型異類婚姻譚のヒロインたち、ワニ・カメ・ウミヘビは海神の娘であった。[48]」と指摘しているが、蛇と人間との関係は、異類婚姻譚として最も多く語られるようである。『古事記』の三輪山伝説は三輪山の神をめぐる神婚説話である。活玉依姫もとに、貴公子が夜な夜な訪れ姫は身ごもる。両親は男の素性を怪しみ、姫に男の衣の裾に糸をつけた針を刺させる。翌朝糸をたどると三輪山に至り、男が三輪山の神であったとわかる。この説話は『日本書紀』では神墓伝説 (倭迹迹日百襲姫命) として記され、男の正体は三輪山の蛇とされる。また、日本昔話では「蛇聟入」と「蛇女房」という話型がある。蛇婿入

[45]難波美和子 1993「異類婚姻譚の「異類の妻」と「異類の夫」」『文学研究論集』第 10 号、筑波大学比較・理論文学会、P.122
[46]中村禎里 2006『日本人の動物観　変身譚の歴史』ビイングネットプレス、P.23
[47]中村禎里、前掲書、P.20-21
[48]中村禎里、前掲書、P.66

りの話では蛇はよく人間と結婚したが、最後に蛇は殺されてしまう場合が多い。ヘビ女房では子供を生むときに正体がばれた後、妻は夫のもとを去るが、去り際に子供に乳代わりにしゃぶらせるように自分の片眼を与えた。そこで、この節では異類婚姻譚の類型を先行研究をもとにまとめたい。

難波美和子(1993 年)は異類婚姻譚を登場人物、つまり「異類の妻」と「異類の夫」[49]からみて、異類の種類を超自然の存在(人間に特に害をもたらさないもの：神、天女、妖精、精霊)、超自然の存在（人間に害をなすとされるもの：魔物)、超自然の動物（異界の支配者たる動物。鰐、蛇、象)、野生動物、家畜動物という五種類に分けている。この分類によれば、蛇は野生動物であると同時に、「超自然の動物」ということになる。

一方、小松和彦 (1998 年)は異類婚姻をその物語の展開から以下の七つのタイプに分類している。

1.殺害型
2.殺害・里帰り
3.子ども誕生・逃亡
4.幸福・里帰り
5.幸福・里帰り・子ども誕生
6.幸福・水辺出現
7.幸福[50]

蛇をめぐる物語がこの中のどの類型にあてはまるのかについては、第２章以降で考察したいが、田中重雄は、「蛇物語の大半が悲劇に終る」ことを指摘している。その原因は、人間に人智の進むにつれて神蛇に対する崇敬から畏怖にと変化に至る[51]というのである。

[49]難波美和子 1993「異類婚姻譚の「異類の妻」と「異類の夫」」『文学研究論集』第 10 号、筑波大学比較・理論文学会、P.117-129
[50]小松和彦 1998『異界を覗く』洋泉社、P.90
[51]田中重雄 1982『紀州蛇物語―紀州の竜蛇伝説集』名著出版、P. 5

日本の異類婚姻譚の型については、小澤俊夫(1994 年)も以下のように論じている。日本では多くの異類婚姻譚は「蛇婿入り」、「蛙女房」、「つる女房」のように、変身場面は語られているが、変身についての説明なしというパターンである。「猿婿入り」のように変身せず、異類が異類のまま配偶者となり、最後に死ぬというのは動物のまま夫となりうると考えられる。日本の昔話では魔法を使って変身する例は極めて少ない。珍しい例としては「田螺長者」がある。[52]また、小澤は日本の異類婚姻譚では無限定の自然のなかから、ある力をもったものが人間の文化の世界への来訪する、と述べている。
そして、人間と婚姻したのちの物語の終結の仕方を、自ら退去する、人間に追放される、人間によって殺害されるという三種類に分類している。小澤は、異類が女性の場合には自ら退去し、または追放される形で話は終わるが、それに対して異類が男性の場合には、また来襲する危険があると考え、殺害して話は終わるという特質があると指摘している。[53]

なお、後藤優(1981 年)は、異類婚の特徴は異類が人間に対する報恩譚でありながら、別れの契機をつくったのが人間であることを次のように述べている。

> 日本の異類婚の特徴は、その多くが人間の男性に助けられた異類の女性が、その恩にむくいるために人間の女性の姿になって恩人のもとを訪れて彼の妻となり、ときには子供を生んで(異類とのあいだに生まれても日本ではいつも正常な人間の子どもである)、しばらくは仕合せな暮らしがつづくが、やがては人間の側の欲望や好奇心、あるいはふとした不注意から、その正体があらわれると、いかに愛していようとふりきって元の世界へ戻っていってしまうのである。鶴女房の話、葛の葉狐の話がその典型であろう。[54]

上述の論点をまとめると、日本の異類婚姻譚については次のようにいうことができる。多くの異類婚姻譚には人間への報恩譚との繋がりがあるが、結果的に異類は人間の

---

[52]小澤俊夫 1994『昔話のコスモロジー』講談社、P.188-195
[53]小澤俊夫、前掲書、P.235-245
[54]後藤優 1981『人と動物の愛と結婚』原書房、P.37－38

世界に永住せず退去、追放、殺害という三つのパターンのいずれかを踏襲する。また、蛇との婚姻をめぐる物語の大半が悲劇に終わることも、注目すべき点である。

第 3 節　異類婚姻譚に関する先行研究

ここで、異類婚姻譚に関する先行研究をまとめておきたい。異類婚姻譚に関する研究は、日本や中国またインドや西方との比較文学の見地から論じるられたり、昔話と伝説を中心に行われたりすることが多いが、現代文学への影響に至ることは稀である。異類をめぐって研究した先行研究の内容を分析しながら、本論文の特徴と位置づけを明らかにしたい。

禹鍾泰の『異類婚譚にみる人格統合の象徴化 ： 日本と韓国[55]』(1996 年)では「物語は人間の心の投影の産物である」という分析心理学をもとに、日本と韓国の物語を比較している。異類婚譚を日本と韓国、男性と女性、人間と異類との相違、結婚や理想的な関わりなどを分類している。日本と韓国の相違点ではいくつかの特徴をまとめることができる。物語の展開では日本の物語では女性が主導し、韓国のものは男性が主導する。また、人間と異類の関わりの中で日本では異類が主導し、韓国では人間の意志で主導する。人間と異類は結婚までたどりつけるかについて、日本では破局することに対し、韓国では幸せになることがあると述べている。

この論文では性別、人間や異類、物語の結末という三つの方向性から日本と韓国の異類婚姻譚の違いを導き出す。日本と韓国では男尊女卑の社会文化や父権主義という伝統があるものの、なぜ日本では物語の展開は女性が主導権を握るか、それは昔の母性社会との関連性があるか、などが明らかにされないのは残念である。また、同じアジア圏の国とはいえ、日本はなぜ悲劇譚が多いのか、その原因も知りたいところである。

[55]禹鍾泰 1996『異類婚譚にみる人格統合の象徴化 ： 日本と韓国』、総合研究大学院大学博士論文（学術）

楊静芳の『中日昔話における異類婚姻譚の比較研究[56]』(2014 年)は、七夕伝説、田螺女房、蛇婿と姉妹型、狐女房、浦島伝説などを取り上げて分析し、中日の類話が存在する要因に類似する信仰、習慣や生活様式が関わっていることが明らかにされている。日本と中国の異類婚姻譚を比べると、大きな差異というのは異類の正体が露見する時点での人間の対応の仕方である。中国の昔話では異類の正体が知られても、婚姻状態を続けられることが多いが、日本の昔話では異類の正体が知られると、離縁することになると論じている。この論文では異類の正体露見後、日本と中国では人間が異類に対して相違する反応により物語の結末が乖離した方向に導かれることになる。この論文においても、日本の昔話では悲劇的結末が多いということが示される。

柳政勲の『近代日本の怪談研究―明治期幽霊譚をジェンダー、戦争、植民地主義の視座から読み直す[57]』(2016 年)は、江戸期とは異なり、文明と科学の影響による怪談がつくられた近代明治期に再生産された累伝説を分析したものである。さらに、幸田露伴の「対髑髏」、夏目漱石の「琴のそら音」、船幽霊譚などを取りあげて、女性嫌悪、日露戦争、軍事主義や植民地主義を論じている。結論では近代日本の怪談が前近代の影響を受けながら、当時の政治と文化による変容が起こっていることを指摘している。

王貝の『中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察:狐、蛇、虎、犬、亀を中心に[58]』(2016 年)では、主な資料として日本側は「日本古典文学全集」をデータベースとして、蛇の変身譚では『法華験記』、『神道集』、『三州奇談』、『老媼茶話』、『諸国百物語』、『想山著聞集』、『室町時代物語大成』、『説経節』、『御伽草子』を抽出した。中国側は『太平御覧』と『太平廣記』を取り上げて、それぞれの動物の歴史的変遷、仏教要素の角度を比べることによる日中間の共通性と異質性を分析がなされている。中国では動物が人間に変身する場合は女性に変身するのが主流である。その中で、蛇が人間に変身す

[56]楊静芳 2014『中日昔話における異類婚姻譚の比較研究』、東京学芸大学博士論文（学術）
[57]柳政勲 2016『近代日本の怪談研究 ―明治期幽霊譚をジェンダー、戦争、植民地主義の視座から読み直す―』、筑波大学博士論文（文学）
[58]王貝 2016『中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察:狐、蛇、虎、犬、亀を中心に』、大阪大学博士論文（言語文化学）

る変身譚が初出したのは唐代の伝奇小説『太平広記』の『博異志』と『李黄』の二篇である。そして、日本では蛇が初出した変身話『古事記』の中に動物神の要素が含まれている。

このように、「異類婚姻譚」を論じる際、昔話や伝説をめぐって考察する場合が多い。また、たとえ比較しても、現代文学まで取り扱うことはほとんどないことがわかる。

それから、論文の研究について、いくつかを取りあげて要点をまとめたい。川森博司『異類婚姻譚の類型分析―日韓比較の視点から[59]』(1993 年)は、日本と韓国の伝承を異類聟譚と異類女房譚、婚姻成立型と婚姻不成立型に分けて考察する。そこで、日本で異類を排除する形の伝承が多く、韓国で異類が人間への変身を遂げて異類婚姻が成就される伝承が多いということについて日本の村落社会の閉鎖性と韓国の村落社会の開放性を反映した解釈を示す。

難波美和子は「異類婚姻譚の「異類の妻」と「異類の夫」[60]」(1993 年)において、異類婚姻譚に語られる結婚は人間と異類との関係に仮託された人間の男女関係とみなすことができると指摘している。インドの異類婚姻譚の諸形式、異類の種類と性別、異界と此界の往来などを論じる。結論として、異類婚姻譚で物語の展開に登場人物の種類と性別が規制を与え、幸福や不幸な結末になることは自然と地域から受ける外来文化の影響により異なると解釈する。

中村とも子ほか「昔話の研究 異類婚姻譚に登場する動物[61]」(2001 年)では、蛇、猿、狐という異類に関する話型分析をし、「異類婚姻譚にみられる動物観」では動物が人間と結婚する理由、動物と人間の事実上の結婚と変身の有無、動物婿と動物嫁の迎える結末、動物婿と動物嫁の発揮する力について論を展開する。

---

[59]川森博司 1993「異類婚姻譚の類型分析―日韓比較の視点から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集、P.385-406

[60]難波美和子 1993「異類婚姻譚の「異類の妻」と「異類の夫」」『文学研究論集』第 10 号、筑波大学比較・理論文学会、P. 117-129

[61]中村とも子・弓良久美子・間宮史子 2001「昔話の研究 異類婚姻譚に登場する動物(1)動物婿と動物嫁の場合」『子どもと昔話』第六号、古今社、P.17-23

その中で「蛇」に関する内容では、「蛇女房」の物語は他の動物嫁に比べると婚姻継続の比率が高く、蛇女房と蛇婿入は水や自然を支配する力を持つことを指摘している。

吉田幹生「異類婚姻譚の展開 ： 異類との別れをめぐって[62]」(2009 年)では『古事記』、『日本書紀』と『日本霊異記』などの伝承から異類との別れの原因を探求する。また、狐女房譚の定型に従い、正体が露見した後通ってくることがないことは「来つ寝=キツネ」という語源譚に関連があると導き出す。多くの異類婚姻譚では二人の別れは不可避の結末と設定され、別れの要素は二人の交流を阻害し悲劇性を高める要因として位置づけされる。しかしながら、別れを抒情的に描き出し、異類を希薄化させ、「つる女房」のように別れの悲しさを余韻として終わらせるという日本の異類婚姻譚の文芸的特質だと推論する。

呉艶の「異類婚姻譚におけるジェンダーの中日比較研究[63]」(2011 年)では、中国の六朝小説の古典文学と日本の記紀神話を比較し、社会形態と宗教思想の影響を考え、性差意識を検証している。考察の結果として、動物観の変容、社会形態の伝換、宗教伝来などの原因とされる男性中心の倫理観が異類婚姻譚に投影してくることは明らかである。男性本位の考え方により、異類女房譚の女は善玉役と悪玉役に分類できる。

上述で取り上げる論文から見ると、「異類婚姻譚」というテーマについて大体いくつかの典型的な論点が見られる。性別、国別、動物別などにより論点を始め、昔話や伝説など歴史的な流れの影響から他民族や異文化を受け入れるかまたは変容するかが指摘されている。

---

[62]吉田幹生 2009「異類婚姻譚の展開 ： 異類との別れをめぐって」『日本文学』58 巻 6 号、日本文学協会、P.12-19

[63]呉艶 2011「異類婚姻譚におけるジェンダーの中日比較研究」『同志社国文学』第 75 号、P.14-26

一方、異類婚姻譚の歴史的な変化を考察する研究もある。

服部邦夫は、浦島子伝説では海神の娘や常世(蓬莱山)の姫・亀の化身の女と結ばれるという「異類婚姻」が重要なモチーフを占めているが、近世から現代にかけてのおとぎばなし・童話を含めることで浦島話のロマンが見失われると述べている[64]。中村禎里は、ヒコホホデミとトヨタマヒメの神婚譚には穀神・稲霊と水神との結合による農耕儀礼の神話化と海神の血統のとりこみという二つの要素があると述べている。

また、日本人がトヨタマヒメ型の異類婚姻譚を受け入れた原因としては、みずからをある種の動物の子孫と同定する氏族の実在という基盤神話、世代から世代へながく累重する異氏族婚の体験とそれに伴う愛憎の忘れがたい記憶によって、民間伝承として有力になりえた[65]と論じている。

本論文では、以上の先行研究を踏まえながら、蛇との「異類婚姻譚」をめぐる日本と中国の文学作品を取り上げ、それぞれの作品における異類の表象の意味や役割を考察する。

[64]服部邦夫 1989『昔話の変容』青弓社、P.26-27
[65]中村禎里 2006『日本人の動物観　変身譚の歴史』ビイングネットプレス、P.45-47

第二章　蛇にまつわる日中異類婚姻譚の翻案と改作―

「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の婬」をめぐって

前章でも述べたように、中国と日本の昔話の中においては、蛇は神聖なる存在だと考えられ、蛇との交婚譚や蛇を祖神とする話が多いが、序章で述べた通り、本論文が扱うのは人間の男性と蛇との関係である。異なる歴史的・文化的背景の中で生み出された日本と中国の文学作品において、「蛇女」の表象がどのように変容したのかを考察する。

まず、本章において、中国におけるよく知られた馮夢竜「白娘子永鎮雷峰塔」(1624年)と「白娘子永鎮雷峰塔」の翻案といわれる上田秋成「蛇性の婬」(1776年)を取り上げる。この二作はどちらも後世の蛇物語に多大な影響を与えたものであり、本論で後に取り上げる現代の作品を考察する上でも重要な作品である。二作の関連性と共通点、相違点の検討と、これらの物語の中での異類と人間との関係性の分析を通して、女性たちが異類として描かれる意味や役割を改めて考察してみたい。

第1節　「白娘子永鎮雷峰塔」「蛇性の婬」の関連とあらすじ

1.1 二作の関連性

まず、二作の関連性を概観したい。《警世通言》（1956）の序で嚴敦易が述べるように、『警世通言』は明朝の馮夢龍が宋朝、元代、明朝の話本と擬話本を編集した総集であり、文学史家は『警世通言』と馮夢龍がほかに編集した喩世明言と醒世恒言を合わせて『三言』と呼ばれるものの一つである。『警世通言』の第二十八巻の物語は「白娘子永鎮雷峰塔」である。唐代の谷神子撰『李黄』にもあらわれる白蛇伝説は、美女に化けた白蛇が男を虜にし、破滅させる、というあらすじを持つものだった。

この伝説が、明代の『西湖三塔記』などを経て、「白娘子永鎮雷峰塔」では白蛇の化身「白娘子」が、人間性を持ちながら自らの幸せと愛情に追い求め、魅力がある女性像として描かれている。それ以来、白蛇のイメージは「白娘子」のような女性に定着して、その後の小説、弾詞と演劇は「白娘子永鎮雷峰塔」をもとにして改作するものになる。この「白娘子永鎮雷峰塔」の物語と詞章を下敷きにして書かれた翻案小説[66]が、『雨月物語』の巻之四「蛇性の婬」である。この物語の主人公真女児の典拠は日本の『道成寺縁起』の主人公清姫を「真砂の庄司清次の娘」としたものであることも指摘されており[67]、「各篇は現世と他界との境界性を持った地と聖なるものと魔的なものとが共存する両義的な場である[68]」とも評される怪異小説集『雨月物語』にふさわしい物語となっている。従来の研究では、「蛇性の婬」と「白娘子永鎮雷峰塔」の両作を一緒に取り上げて比較する場合は、社会背景と歴史の探求、また主人公を男性と女性をそれぞれに対する分析が多く、男性の主人公の豊雄、許宣と蛇の化身である真女児、白娘子における関係性及び異類とのコミュニケーションについての研究を論じることは少ない。

その中で、高田衛氏の『女と蛇—表徴の江戸文学誌』は、この二作に中上健次の『蛇淫』（1976 年）をあわせて取り上げたものである。そして、「蛇性の婬」は異類婚姻譚を民話的な幻想の域にとどめるのではなく、現世の法や制度下の現実へと反転させるという新しい読解を論じ、また『蛇淫』と「蛇性の婬」のパロディ風な関連は近世の物語を完全にひっくりかえしたと述べている。中上健次の『蛇淫』は上田秋成の「蛇性の婬」をん念頭においた作品であると考えられるが、この作品については次章で分析する。

本章は、この高田氏の論考を参考にしながらも、「白娘子永鎮雷峰塔」(白夫人がとこしえに雷峰塔に鎮められたこと)、「蛇性の婬」を、蛇、または蛇とされる女性と、相手の男性や周囲との「コミュニケーション」の観点から分析したい。以下、統一のために、「白娘子永鎮雷峰塔」、「白娘子」、「真女児」と表記する。

---

[66]高田衛 1999『女と蛇—表徴の江戸文学誌』筑摩書房、P.18
[67]高田衛 1980『雨月物語評解』有精堂、P.215
[68]金田文雄 1994「『蛇性の婬』における物語の場 —記紀神話をめぐって—」『広島女学院大学日本文学』 広島女学院大学、7 月、P.21-33

1.2 物語の概要

「白娘子永鎮雷峰塔」(白夫人がとこしえに雷峰塔に鎮められたこと)

若い男の許宣が清明の期間、先祖のお墓参りのため寺に行く。彼は 22 歳で、両親がなくなり、既婚の姉に世話になり、義兄の家に住む。叔父の生薬店の番頭を勤める。杭州の西湖で大雨の中に、船を乗る時、美しい未亡人の白娘子と女中の青青と出会う。許宣は白娘子に船賃と傘を貸すので、許宣が傘を返してもらうため二回も白娘子の家に訪ねていく。白娘子が許宣にご馳走しながら結婚のことを持ち出す。許宣はお金がなくて、白娘子は五十両の銀子を渡す。その後、許宣は姉夫婦に結婚することを伝える。しかし、白娘子からもらった銀子は太尉が盗まれたお金と同じ数と印字であったため、許宣が犯人扱いされ捕えられた。許宣は白娘子と知り合ってからの来由を白状し、白娘子の家に行ってみるとなんと幽霊屋敷と見られる廃墟になってしまう。お金はすべて返却するため、判決で許宣が蘇州の王家に労役に服することになる。そして、半年後のある日、女中の青青が王家に許宣を訪ねてきた。許宣は白娘子を見るたびに、怒りが納まらず非難したが、白娘子は一生懸命弁解した。王家の主人は二人が以前に婚約したことを聞いて、女房からすすめられて、二人に結婚式を挙げることにする。その日以来、夫婦は仲良く宿屋に住んでいる。ある日、許宣はある道士に会った。その道士は許宣に妖怪が付きまとうことを話し、護符を渡した。許宣は道士の話を信じ、護符をもらい、白娘子に試そうとする。白娘子が護符を発見し、許宣が信じてくれないことに悲しみながら、護符を焼いたことで何も起こらないことになる。翌日、白娘子は許宣を連れてその道士を罵倒するだけでなく、わざと衆人の前に護符を飲んで、妖怪ではないことをもう一度証明する。その後、許宣はまた白娘子からもらったものが盗品とわかり、捕まってしまった。前と同じように許宣が白状したが、白娘子は行方不明のため、許宣は今度は鎮江に懲役することになる。しかも、許宣が鎮江につくとき、白娘子が駆けつけてきた。許宣は最初白娘子のせいで二回も捕まえられたことを許せず、しかも白娘子を妖怪と見なしたが、とうとう白娘子の美貌に迷い、よりを戻すことになる。そして、白娘子のお金の援助により許宣が自分で生薬店を開い、商売繁盛である。ところが、許宣は白

娘子との約束をまもらないので、禅師の法海と出会うことになった。許宣は再び白娘子を妖怪と疑い始め、それに白娘子と青青は法海を見ると姿を消すため、余計に妻は妖怪であると信じた。許宣は荷物整理し、杭州の姉夫婦の家に帰ったが、着いたとたんに、家の中にすでに白娘子と青青がいたことに驚いた。許宣が義兄と相談し、蛇とりの戴先生を呼び、白娘子を捕まえようとする。白娘子がそのことを知った後、今回は何も弁解せず、かえって正体がバレ、許宣を脅すようになる。

許宣は仕方なく、また法海に頼んで命を救うことを願う。法海の法力により白娘子と青青はそれぞれのの正体である蛇と魚に戻し、二匹を鉢の中に入れ、鉢の口を封じ、雷峰寺に置きその上に七層の塔を建て、白蛇と青魚は永久にこの世に現れないことになる。許宣は法海に出家したいと申し、法海は許宣の師匠となり、雷峰寺で髪剃りして僧となり、数年修行後亡くなった。ほかの僧は許宣のために一座の骨塔を建て、永久に朽ちないようにしたのである。

「蛇性の婬」

紀伊国に住む大宅竹助の漁師の三男の豊雄は、優しい性格で家業を好まない厄介者である。ある日、にわか雨にあって雨宿りしていると、二十歳くらいの未亡人である真女児と侍女に出会う。豊雄は真女児の美貌に魅かれ、傘を女に貸し、後日引き取りに訪ねることにした。豊雄はその晩、真女児の家を訪れて接待を受けるという夢を見、実際に訪ねると夢で見たのと全く同じ立派な屋敷がある。真女児は夫を亡くしたことを話し、豊雄に求婚し、豊雄は迷ったがそれを承諾した。真女児は豊雄に宝物の太刀を渡したが、豊雄の兄がその太刀は権現様の御宝殿から盗まれたものであることに気付いた。そこで、豊雄は捕まえられ白状した。真女児の姿が消えたとはいえ、盗まれた宝物は見つかった。これらは妖怪の仕業であると見なされ、豊雄の罪は軽減され、牢獄へ入って百日後に釈放された。その後、豊雄は大和国の姉の商家で暮らしていると、真女児がやって来て涙を流しながら宝物を盗んだのは前の夫であると弁解し、はじめは恐れていた豊雄も真女児を許すことになった。そして、豊雄は真女児と結婚し夫婦になった。ある

日、豊雄夫婦は義兄と一緒に吉野へ旅をする時、当麻の酒人という老人が真女児と侍女の正体を見破り、二人は滝に飛び込み、姿を消した。老人は、豊雄に真女児の本性は邪神であり、豊雄に注意するようにと伝えた。その後、豊雄は紀伊国に帰り、富子を嫁に迎えたが、真女児は富子に憑りつき、豊雄のことを非難した。豊雄は鞍馬寺の僧に助けを求めることにしたが、その僧は真女児に敵わず死んだ。そして、豊雄は道成寺の法海和尚に助けを求め、法海は豊雄に袈裟を与え、駆けつけるまで真女児を取り押さえておくように指示した。豊雄がその袈裟で真女児を押さえ、やがて法海和尚が袈裟を取ってみると、気を失った富子と三尺ほどの白い蛇がいた。和尚はこの蛇と、さらに現れた小蛇を捕えて鉢に入れ、袈裟で封じた上で埋めた。その後、富子は病気で亡くなり、豊雄は無事生き延びたと語り伝えられている。

1.3 白蛇伝の背景と変化

中国では、「白蛇伝」、「孟姜女」、「梁山伯と祝英台」、「牛郎織女」を「中国四大民間伝説」と称されている。そこで、「白蛇伝」というのは白蛇が女性に姿を変え、人類の男性のロマンチックな恋物語であると通称されている。明代の馮夢龍が編纂された『警世通言』第 28 巻「白娘子永鎮雷峰塔」で初めに「白蛇伝」が小説として記載されている。

白蛇伝の作品背景は中国の江南の西湖である。宮下拓三は、「上に天堂あり、下に蘇州杭州あり」と俚諺に称えられ、近年定められた中国十大風景の一つにも選ばれ、何よりも古来文人に愛でられ多くの詩文に詠まれてきた杭州西湖。「古（いにしえ）」からの賞讃にふさわしい姿を四季折々に見せてくれる[69]と述べている。明代の話本である『清平山堂話本』の中で「西湖三塔記」の話は、雷峰塔伝説のもっとも古い原型である。その後「白娘子永鎮雷峰塔」に展開したものである。「西湖三塔記」において、入話は詩人の蘇軾をの詩である「西湖のよさ」《飲湖上初晴雨後》という漢詩を次のように引用している。

[69]宮下拓三 1989『漢文のある風景―中国古典誕生の地を訪ねて―』黎明書房、 P.78

湖の光たゆとう空晴れし日
山の色かすむ小雨ふる日
もし西湖を西施になぞらうれば
薄き化粧厚き化粧ふたつながら宜し[70]

また、「白娘子永鎮雷峰塔」では、はじめから西湖という場面を次のように描いている。

山青き西湖のほとり　　山外青山樓外樓
高楼に宴は果てず　　西湖歌舞幾時休?
春風は人を酔わせて　　暖風薫得遊人醉,
杭州を汴州と見る[71]　　直把杭州作汴洲。[72]

上述の引用からみると、「西湖」の風景は天気や季節に問わず、異なる景観が見られる。また、蘇軾が西湖の天候の変化を中国古代四大美女の西施の化粧と例え、どんな時でも魅力があると言える。現在では「西湖」はユネスコの世界文化遺産に「杭州西湖の文化的景観」として登録され、多くの観光客が訪れる名所である。そして、白蛇伝の変遷について、明代の馮夢龍の「白娘子永鎮雷峰塔」は白蛇伝説の最初の形である。

その後、『白蛇伝』は小説、映画やアニメーションではストーリーが改作や変遷しつつ、いくつかの場面が付け加えられ、様々なバージョンが生み出されてきた。清代では、玉花堂主人校訂の『雷峰塔奇伝』(1806 年)、1920 年代では夢花館主著の『白蛇全伝』の初版が出版される。1978 年に香港作家ラウ・イーチョン(劉以鬯)の短編小説『蛇』、1983 年台湾作家の李喬《情天無恨—白蛇新伝》、1986 年香港作家のリリアン・リー(李碧華)の『青蛇』初版、1999 年に中国系アメリカ人作家の厳歌苓（ゲリン・ヤン）の『白蛇』と 2007 年に中国作家の李鋭と蒋韻が合著した《人間：重述白蛇傳》などの小説がある。次章でいくつかの作品を取り上げ、内容を詳しく分析する。

---

[70]入矢義高・吉川幸次郎・神谷衡平（訳）1958『中国古典文学全集第七巻　京本通俗小説/雨窓欹枕集/清平山堂話本/大宋宣和遺事』　平凡社、P.153
[71]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）1970『中国古典文学大系 25 巻 宋・元・明通俗小説選』平凡社、P.150
[72]馮夢龍 1956（著）/嚴敦易（校註）《警世通言》作家出版社、P.420

また、『白蛇伝』の演劇において、谷口義介が萬暦年間(1573－1619)の間に「戯曲作家陳六龍」による『雷峰塔傳奇』が存在し、惜しむらくは亡佚していまに傳わらない[73]と指摘している。現存する最初の脚本とは清代の 1738 年の黄図珌撰『看山閣楽府雷峰塔伝奇』である。方成培が清代乾隆 36 年(1771 年)に書いた『雷峰塔伝奇』において、『白娘子永鎮雷峰塔』を基に「求草」、「水鬪」、「断橋」、「祭塔」といった場面が付加された脚本がある。特に白娘子が法海との戦闘する場面である「水漫金山寺」では白娘子は水を操り、金山寺を水没させようとするが、白娘子が妊娠しているため、力不足で法海が雷峰塔の下敷きにしたというシーンはとても有名である。近代では、田漢が「白蛇伝」の物語を京劇の脚本として『金鉢記』（1943 年）、『白蛇伝』（1952 年）、『白蛇伝』（1955 年）3 回で改作を行う。

現代になると、「白蛇伝」をモチーフとした創作作品は多様化し発展している。雲門舞集（クラウド・ゲイト舞踊団）創始者である林懐民は創作の起点として中国の伝統題材をもとに「白蛇伝」(1975)、「紅樓夢」などのモダンダンスは国際的に名高いものである。また、台湾の伝統芸能において歌仔戯団の明華園(Ming Hwa Yuan)は 2004 年で《超炫白蛇傳》(Legend of WHITE SNAKE)という演劇を作り上げ、歌仔戯の元素のほかに、川劇変臉、モダンダンスと打楽器が融合した作品である。それに、映画とドラマ、動画においても「白蛇伝」をテーマとする作品は次から次へと制作されている。

日本の東宝と香港のショウ・ブラザーズ（中国語：邵氏兄弟有限公司／英訳：Shaw Brothers）の合作映画『白夫人の妖恋』（1956）に監督は豊田四郎で、許仙は池部良、白娘は山口淑子が主演を務める。日本東映ビデオ株式会社の『白蛇伝』(1958)は日本初のオールカラー長編劇場用アニメーション映画である。公式サイドの記載で当時アニメーション制作の経験者がなく、「白蛇伝」は約 7 カ月の作画期間と 4047 万 1000 円の製作費、原画 1 万 6474 枚、動画 6 万 5213 枚を費やして完成した作品と述べている。香港のショウ・ブラザーズの『白蛇伝』(1962)の監督は岳楓で、主演は 50 年代の伝説的名女優

[73]谷口義介 2014「馮夢龍と黄圖珌のあいだ ： 白蛇傳・小説から戯曲へ」『学林』 第 58 号、3 月、立命館大学、P.83

の林黛(リン・ダイ)が演じる。台湾では《白蛇大鬧天宮》Snake Woman's Marriage(1975)のほかに、1970 年代から 90 年代にかけて多数の映画に出演、中華圏で高い人気を誇っていた台湾の女優の林青霞(ブリジット・リン)が『真白蛇伝』(1978)と『新白蛇伝』(1982)を主演する。そして、香港の『青蛇転生』(原題：『青蛇』)(1993)は監督のツイ・ハーク(徐克)と原作の作者のリリアン・リー（李碧華）が共同で脚本を書く。中国の『白蛇伝説』(2011)（英訳：The Sorcerer and the White Snake）では監督はチン・シウトン（程小東）で、主役はジェット・リー（李連杰)、ホァン・シェンイー（黄聖依）が担当する。さらに、ドラマの場合は台湾、中国、香港とシンガポールは「白蛇伝」に関するドラマを制作された。そこで、台湾で制作されたドラマを以下に取り上げられた。最初は中国電視公司が『雷峰塔』(1977)と『白蛇伝』(1985) が制作された。次に、『新白娘子伝奇』(1992、監督：夏祖輝、主演：趙雅芝、葉童、陳美琪)は台湾電視公司より初放送の 50 話の長編テレビドラマである。その内容は戯曲に基づいて書かれた『雷峰塔伝奇』と『白蛇全伝』二本の伝奇小説から改編され、黄梅調という戯曲元素も取り入れる。このドラマはのちに「白蛇伝」のドラマとして伝説の傑作といわれる。台湾だけでなく、翌年の 1993 年に中国中央電視台(略称：央視)で放送され、年度の最高の視聴率を獲得した。2019 年に中国の愛奇芸（アイチーイー）がリメイクの新版ドラマ「新白娘子伝奇」を制作し、于朦朧(アラン・ユー）とSNH48 の元メンバー鞠婧禕(ジュージンイー)が主役を演じる。また、《戲說台灣》は台湾の三立台灣台（英訳：Sanlih E-Television、略称：三立、SET）で 2001 年の放送開始以来、月曜から金曜までの帯番組で毎日 30 分放送の長寿番組である。その中で《白蛇外傳》は 2013 年 6 月 17 日から 2013 年 8 月 9 日まで 40 集のドラマシリーズである。

いわば、「白蛇伝」は中国四大民間伝説として、小説だけでなく、映画やドラマなどのメディアを通じて物語の内容と大筋が人々によく知られている。「白蛇伝」の既成のイメージといえば、白娘子が中国の伝統文化で良妻賢母とはいえ、夫や人間に受け入れられない異類の存在として見られる。夫の許宣が優柔不断な男であるため妻への不信感を抱

き、対抗しようとする。法師の法海が法術で白娘子を蛇の正体に戻し、人類社会から排除される悪人としての役割という構図になっている。 また、主演した俳優や女優も当時大人気の人々であり、視聴率にかなり影響を与えた。さらに、「白蛇伝」における「女性表象」は時代背景や異なる文化とともに変化し続けているが、当時それぞれの社会に求められる女性像を描くことであると言えるだろう。

1.4「蛇性の婬」の背景

上田秋成は明和五年 (1768)、「雨月物語」の初稿を書き上げた。「雨月物語」は中国の白話小説の翻案による近世読本の祖とされる都賀庭鐘の著作の「英草紙」と「繁野話」の影響で執筆したと言われる。序文によれば、実際の刊行は安永五年(1776)である。『雨月物語』は上田秋成の代表作として、白峯、菊花の約、浅茅が宿、夢応の鯉魚、仏法僧、吉備津の釜、蛇性の婬、青頭巾、貧福論の九篇で構成される。

まず、『雨月物語』の題名の由来は序文で「明和戊子の晩春、雨は霽れて月は朦朧の夜、窓下に編成して、以て梓氏に与ふ。題して雨月物語と曰ふと云ふ。剪枝畸人書す」[74]と解釈する。井上泰至は「雨月」の意味について、「雨」「月」は東洋の世界観を支配する。「易」の世界で「陰」または「闇」の世界を司る。しかし、春の夜の闇は、その奥に何かがあるような、ただならぬものを感じさせる。式子内親王の「この世には忘れぬ春のおもかげよ朧月夜の花の光に」という歌を取り上げ、秋成にとって春の闇の妖美こそこの作品の世界を象徴するものである[75]と述べている。

鵜月洋によると、序文で「剪枝畸人」という号は『荘子』の太宗師篇・駢拇篇から取られた言葉である。「剪枝畸人」は無用の指を剪りとった天にひとしい者という意味をもつ言葉になり、秋成は五歳で重い痘瘡を患い、右の中指と左の人差し指がひどく短くな

---

[74]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)1995『新編　日本古典文学全集 78・英草紙／西山物語／雨月物語／春雨物語』小学館、P.275
[75]井上泰至 2009『雨月物語の世界 ： 上田秋成の怪異の正体』 角川学芸出版、P.78

り、一時の戯号で自嘲する意味と考えられる[76]と論じている。それに、「蛇性の婬」は『雨月物語』で唯一の中篇小説である。原話の『警世通言』第 28 巻「白娘子永鎮雷峰塔」をもとにして、原話の主人公の許宣が豊雄、白娘子が真女児に変更するほかに、秋成の独特な場面描写が設定されている。『雨月物語』はよく怪談小説として見られており、鈴木敏也が『雨月物語』の特質は「筆端の凄愴と構想の幻怪にある」[77]と評したことである。長島弘明は『雨月』の物語の語り手が変幻自在であり、無限に分裂且つ変身し、語り手はまた書き手であるらしい[78]と述べている。

井上泰至は本作の語りが客観と主観の間に揺れることによって語りの視点が怪談の語りとなり、舞台設定から道成寺との関わり及び白蛇伝の翻案を以下のように論じている。

> 真女児をめぐる「語り」は話が進むに従い、謎の女をめぐる視点の揺れから、女をめぐる怪異へ皆が恐怖するものへと転じて行く。そして「語り」の方向性は、読者の不意をうって富子から真女児の声がする場面においてピークを迎える。後半の「語り」は、読者の予想の及ばない不意を読者にしかける色合いが濃くなってゆくのである。本作の「語り」はその意味で、恋物語の主人公気取りの豊雄の視点を相対化するところから出発しつつ、最後には豊雄の視点が男性読者一般の視点とほぼ一致するところに帰結している。(中略)本作はタイトルと冒頭の紀州熊野の舞台設定からして、道成寺の世界を読者に暗示しており、いわば本作は道成寺の異伝として構成されている。刀の結納、宮滝での入水、鞍馬寺の僧の熱死、そして道成寺の蛇塚への押し込めは、「道成寺」の世界をなす重要な場面や小道具をちりばめ趣向化している。ただし、大筋は『警世通言』「白蛇子永鎮雷峯塔」など中国小説のリライトにもなっている。[79]

---

[76]鵜月洋 1980『雨月物語評釈』角川書店、P.700
[77]鈴木敏也著・芳賀矢一編 2003『秋成研究資料集成　第 3 巻雨月物語新釈』クレス出版、P.11
[78]長島弘明 2000『秋成研究』東京大学出版会、P.160
[79]秋成研究会編 2016『上田秋成研究事典』笠間書院、P.63-64

さらに、森田喜郎は「蛇性の婬」で新しく創作された主なことは豊雄の家庭の描写、富子との結婚という二つのことであると述べている。「白娘子」にあることが「蛇性の婬」で変えて描かれている主なことを次のようにまとめている。

> ①詩→和歌、②盗難品の白銀→太刀、③蘇州・鎮江→津柘榴市・吉野、④法海禅師→当麻酒人・法海和尚、⑤道士・蛇取りの名人→鞍馬寺の僧、⑥雷峯塔の由来→道成寺蛇塚の由来。秋成は「白娘子」を下敷にしながらも、時・場所・人物・内容を「蛇性の婬」にふさわしいものに描き、物語を自然に展開しているのである。そこには原拠を通り越した秋成独自の世界をつくりあげ、それをしのぐできばえを示しており、作者の手腕が十分に発揮され、読者にも納得できる、感銘ぶかい物語になっている。[80]

そして、「蛇性の婬」と関連する映画作品を紹介する。栗原喜三郎監督による無声映画『蛇性の婬』(1921 年 9 月 6 日)に公開され、その原作は上田秋成の『雨月物語』であり、谷崎潤一郎が脚色したものである。国立映画アーカイブのウェブページではこの映画の紹介について、「網元の息子・豊雄（高橋英一、のちの岡田時彦）と、彼に懸想した妖艶な蛇の化身・真女児（紅沢葉子）の物語。約半年を費やして製作したといわれ、夜間撮影の巧妙さと染調色の美しさが高く評価されている」[81]と述べている。

また、溝口健二監督が制作した『雨月物語』は 1953 年 3 月 26 日に公開された映画であり、主演は森雅之、京マチ子である。内容は上田秋成の読本『雨月物語』の「浅茅が宿」と「蛇性の婬」とモーパッサンの『勲章』を加え、川口松太郎と依田義賢が脚色したものである。この映画は第 13 回ヴェネツィア国際映画祭の銀獅子賞を受賞した。井上泰至はこの映画について、主人公の源十郎が近江の名族朽木氏の生き残りだった美女若狭の虜となることは「美女型の蛇の精の誘惑」と同系統の話であると述べている。また、監督の溝口は「雨月」的妖美の本質をよく見極め、動く絵にそれを再生してみせた

---

[80]森田喜郎 2003『上田秋成文芸の研究』和泉書院、P.182-183

[81]国立映画アーカイブ(National Film Archive of Japan) 第 15 回 無声期日本映画のスチル写真(5)―天活・国活・大活篇 https://www.nfaj.go.jp/onlineservice/digital-gallery/nfc-digital-gallery-no-15/ (2017 年 12 月 26 日)

のである[82]と指摘している。いわば、『雨月物語』は題名から雨月という言葉の解釈では春の闇の妖美を象徴している。「蛇性の婬」は『白蛇伝』の翻案として見られるが、日本の文化的要素と古典の蛇妖に対するイメージを取り入れることによって、秋成の独自的な文学世界をつくりあげることができる。そのため、映画作品においても、「蛇性の婬」の真女児を妖艶な蛇の化身と美女型の蛇精の誘惑として描かれていることがわかる。上述からみると、白娘子は伝統的な女性像であることに対して、真女児は蛇妖のイメージが強調されている。異文化における蛇女表象の変容と特徴についても比較してまとめていきたい。

第 2 節　主人公たちの表象とその意味

この節はそれぞれの物語の中で主人公たちの表象、人物造形と役割などの意味を探求したい。

2.1「白娘子永鎮雷峰塔」と「蛇性の婬」の場面描写

「蛇性の婬」の全体の構成から物語のエピソード、登場人物の設定まで多くの要素が「白娘子永鎮雷峰塔」と類似性を持つことは、これまでも指摘されてきた。

最初に、両作品の女性主人公である、白娘子と真女児の人物像を比較し、その相違を明らかにしたい。 白娘子は都中の白侍従の妹であり、役人の未亡人という設定であるが、真女児は美しく経済力のある下司の未亡人である。同じく「未亡人」という設定とはいえ、白娘子と真女児がそれぞれに異なる性格を表している。まず、主人公たちが出会った場面における女主人公への描写を取り上げたい。「白娘子永鎮雷峰塔」の白娘子と許宣は、雨の日に船で邂逅する。その場面は以下の通りである。

[82]井上泰至 2009『雨月物語の世界 ： 上田秋成の怪異の正体』角川学芸出版、P.28

中国語原文：

不期雲生西北，霧鎖東南，落下微微細雨，漸大起來。(中略)許宣看時，是一個婦人，頭戴孝頭髻，烏雲畔插着些素釵梳，穿一領白絹衫兒，下穿一條細麻布裙。這婦人肩下一個丫鬟，身上穿着青衣服，頭上一雙角髻，戴兩條大紅頭鬚，插着兩件首飾，手中捧着一個包兒要搭船。[83]

ところが思いがけないことには、西北の方から雲が出て来て、東南の空を霧が立ちこめたかと思うと、ばらばらと小さな雨が落ちてきました。（中略） 許宣、見れば、それは一人の婦人であります。服喪の髷を結い、黒髪にやはり服喪の人のさす飾りのない釵や櫛をさし、白絹の上衣に、細麻の裙をはいています。その婦人のわき下に肩を貸しているのは一人の小間使で、青衣を着て角髷を結い、二つの真っ赤な頭鬚をつけ、頭飾りを二本挿し、包みを手に持って、船に乗せてくれと言っているのです。[84]

一方、「蛇性の婬」の男主人公の豊雄ははじめて女主人公の真女児に出会ったシーンは、以下のように描写される。

長月下旬、けふはことになごりなく和たる海の、暴に東南の雲を生して、 小雨そぼふり来る。(中略)外の方に麗しき声して、「此の軒しばし恵ませ給へ」といひつつ入り来るを、奇しと見るに、年は廿にたらぬ女の、顔容髪のかかりいと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣着て、丫鬟の十四五ばかりの清げなるに、包みし物もたせ、しとどに濡れてわびしげなるが、豊雄を見て、面さと打ち赤めて恥ずかしげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて、且思ふは、「此の辺にかうよろしき人の住むらんを今まで聞えぬ事はあらじを、此は都人の三つ山詣せし次に、海愛らしくここに遊ぶらん。さりとて男だつ者もつれざるぞいとはしたなる事かな」と思ひつつ、すこし身退きて、「ここに入らせ給へ。雨もやがてぞ休みなん」といふ。[85]

二人の出会いが雨の日であることを上田秋成が踏襲したことについては、「東南の雲」の雨が中国原拠に拠っているものの、「たつみ」は日本人の古来からの方角観からいえば、神異の降臨する聖なる方角の意味がこもっていることに注意すべきである[86]」といった指摘や、「「雨」は怪異出現の前提条件であり、この時の「雨宿り」の出会いや借傘

[83]馮夢龍編・魏同賢校 1993《馮夢龍全集 警世通言》江蘇古籍出版社、P.420
[84]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、P.152-153
[85]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）1995『新編　日本古典文学全集 78・英草紙／西山物語／雨月物語／春雨物語』小学館、P.358-359
[86]高田衛 1980『雨月物語評解』有精堂、P.210-211

譚は、古くからの浪漫的な物語的発端の様式でもある」ことから、「豊雄が日常的生活の呪縛から引離されて、非日常的な夢の存在に引入られた体験を形象化したもの」であるとの解釈[87]がなされている。

この点に付け加えるならば、「蛇」は水の神とも呼ばれているため、雨の日に登場することで、蛇であるヒロインが水を操ることができることを示しているともいえるのではないだろうか。 実際、白娘子にも真女児にも両方にヒロインである蛇が水を操るシーンが見られる。「白娘子永鎮雷峰塔」では、水を操ると言えるところは許宣は金山寺に行って、坊さんの法海と会う場面である。白娘子は二人の対面を避けようとするため、自然を操る能力を表している。

中国語原文：

和尚見說，持了禪杖，自出方丈來，前後尋不見。復身出寺來看，只見眾人都在那裏等風浪靜了落船，那風浪越大了，道:「去不得。」正看之間，只見江心裏一隻船飛也似來得快。許宣對蔣和道: 「這船大風浪過不得渡，那隻船如何到來得快?」正說之間，船已將近。看時，一個穿白的婦人，一個穿青的女子，來到岸邊。仔細一認，正是白娘子和青青兩個。[88]

坊さんはそれを聞くと、禅杖を持って、自分で方丈を出て行き、あちこち探しますが見つかりません。さらに寺を出てみますと、大勢の人が浪風の静まるのを待って船に乗ろうとしています。ところが浪風はひどくなるばかりで、「とても渡れない」と言っています。そのときです。揚子江のただ中を、一隻の船が飛ぶように走って来ます。許宣は蔣和に向かって言いました。「この大風で渡ろうにも渡れないのに、あの船はどうしてあんなに速く走れるんだろうね？」（中略）見ると、一人は白い着物の婦人、一人は青い着物の女の子で、岸に着いたのをよくよく見ますと、なんとそれは白夫人と青青の二人ではありませんか。[89]（下線筆者）

そこで、「浪風はひどくなる」、「一隻の船が飛ぶように走って来ます」などの描写により、そのような状況の中に一般人には自然の浪や風に対して勝てないはずだが、白娘子

[87]森山重雄 1982『幻妖の文学　上田秋成』三一書房、P.63-64
[88]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.438
[89]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.173

と青青は女性二人だけでどのようにして渡ることができるのか、しかも、船は早いスピードで飛ぶように見えることから、白娘子は凡人ではない力を持つことが言えるのではないだろうか。特に許宣が「この大風で渡ろうにも渡れないのに、あの船はどうしてあんなに速く走れるんだろうね？」というところからみると、許宣さえその船はそのような状況の中で耐えられるとは信じられないので、そのことが許宣がさらに白娘子のことに疑いを深めさせたといえる。それに対して、「蛇性の婬」では当麻の酒人という老人が真女児をじっと見つめながら、「あやし。此の邪神、など人をまどはす。翁がまのあたりをかくても有るや[90]」とつぶやいて、真女児は以下のように水を操っている描写がある。

滝に飛び入ると見しが、水は大虚に湧あがりて見えずなるほどに、
雲摺墨をうちこぼしたる如く、雨篠を乱してふり来る。[91]

「水は大虚に湧あがりて」、「雲摺墨をうちこぼしたる」、「雨篠を乱してふり来」と描き出された状況は、真女児は水や雲と雨を操ることにより不思議な力を持つことである。高田衛はこの状況を「真女子はついにその蛇神としての霊異をあらわしてしまう。はじめに雨の中から出現したことと見合う正体の示現である。わが国では伝統的に龍神(蛇)信仰があって、その龍神はまた水を司る水神であった[92]」と述べている。

しかし、高田衛はこちらの真女児を描写する段落と白娘子との比較について、「原話では白娘子は水に飛び込むが、それは船を湖に漕ぎ出しての仕業であって、ここに見られるごとき滝への躍身、水の奔騰のようなダイナミックな水神的描写はない[93]」と指摘しているが、高田が指摘した段落は「白夫人は、禅師を見ると、船を漕ぎ出しました。そして青青と共に船を転覆させると、二人とも水にとびこみ、もぐって行ってしまいま

[90]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.377
[91]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.378
[92]高田衛 1980『雨月物語評解』有精堂、P.250
[93]高田衛、前掲書、P.250

した。[94]」というシーンである。

それにもかかわらず、先に上げた例の「浪風はひどくなる」、「一隻の船が飛ぶように走って来ます」のいうところからみると、たとえ水神のような描写がなくても、白娘子は大自然を操ることができる力を持っているのではないだろうか。

一方、前述の女主人公の美しさが強調されるその場面での両作の描写の仕方はかなり異なっている。高田厚一は、許宣と豊雄について、「決定的な違いは、偶然出会った美しい女性に対する彼ら二人の対応の差異」であり、許宣と「積極的にかかわろうとしたのは明らかに白夫人の方である」、豊雄は「自らに抱え込んだまま彼女に自分から声をかけることになる」[95]と述べている。

そこで、「白娘子永鎮雷峰塔」では、許宣が白娘子のことを「服喪の髷、さす飾りのない釵や櫛、白絹の上衣、細麻の裙」、また小間使の青青は「青衣、角髷、二つの真っ赤な頭鬟、頭飾りを二本、包みを手に持ち」などと描写し、詳細かつ色彩豊かに夫人と小間使の様子を描いている。そこには特に許宣の考えが描かれてはいないものの、そのように詳しく二人の様態を描写することで、許宣は目を離せないほど二人を見つめていることを示すのではないだろうか。「蛇性の婬」では豊雄が魅了されるのは、「年は廿にたらぬ女の、顔容髪のかかりいと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣着て」と描き出す真女児がまさに豊雄にとって女神のような存在であるので夢中になってしまう。

また、豊雄が自分を見て「面さと打ち赤めて恥ずかしげなる形の貴やかなる」とはいえ、心がドキドキしながら、こんなに美しい人がいることは聞いたことがないと思いながら、真女児たちが船に入れるために後ろへ下がり、「ここに入らせ給へ。雨もやがてぞ休みなん」と積極的に声をかける。許宣の場合は面描写のように見えるが、実際、二人の服装を色から素材まで詳しく説明することで許宣が感情を表に出さない人であると推測できる。それにひきかえ、豊雄は感情豊かな表現で自ら真女児に話しかけている。

---

[94]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、P.173
[95]高田厚一 2002『雨月物語の表現』和泉書院、P.104-105

このように、許宣と豊雄の行動に対して、白娘子と真女児はそれぞれにどんな返事をするのか。白娘子は「ぶしつけなことを伺いますが、あなたさまのお名前は？[96]」と許宣に聞くことに対して、真女児は豊雄の話に「しばし宥させ給へ[97]」と返答する。

要するに、出会いの場面からみると、積極的に相手と話をかけて、距離感を縮め、仲良くなるきっかけを作り上げるのは白娘子と豊雄である。「白娘子永鎮雷峰塔」では白娘子が「ぶしつけなことを伺いますが、あなたさまのお名前は？」と言い女性から積極的に気になる男性に接近する描写である。「蛇性の婬」では豊雄が「御見送りせんも却て無礼なけば、この傘もて出で給へ」[98]から、豊雄が真女子の外見に惹かれることによって行為を示すと見られる。実際、豊雄が真女子の姿を見て、「よろしき人」と推測してから話しかけてみる。いわば、白娘子が許宣の外見的魅力に惹かれることに対して、豊雄が真女子の社会的地位と身分に着眼するといえる。それに、物語の中ではヒロインが水及び大自然を操ることによって、ヒロインの正体が異類であることを暗示している。二作における二人の力関係はそれぞれの物語の発展につれて、状況は変わるかどうかを見てみたい。

2.2「白娘子永鎮雷峰塔」と「蛇性の婬」における主人公の分析

さて、これらの描写による男性主人公の人物造形の相違は物語の中でどのような影響を及ぼすのか。また、生い立ちと個性の違う二人は異類の正体を明らかした際に背馳した対応の仕方をとる理由について考察する。

豊雄の性格については、「三郎の豊雄なるものあり。生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。[99]」と描かれており、「幼い頃に父母ともに亡くなり、今では母方の叔父李将仕がやっている生薬店の番頭をつとめ、今年二十二歳になります。

---

[96]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、 P.153
[97]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.359
[98]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.360
[99]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、 P.357

[100]」と描写される許宣のように、自力でお金を稼ぐ独り立ちした人間ではない。

先行研究が指摘するように、「ある意味、現実から隔離された理想の中での生活を許されたい[101]」という甘えを持ち、「現実に向きあう勇気のない若者[102]」なのである。

都風であることだけを好む彼にとっては、恥ずかしげに顔を赤らめた真女児が「貴やか」だったことが重要だといえる。また、両親ともに亡くした許宣は、叔父の店に勤めて、嫁入りした姉の家に住んでいる。豊雄のようにすべてが家族からの援助ではなくとも、遺孤として家族と親戚から世話されているということである。とはいえ、家族の側からみると、二人に対する評価もかなり異なっている。豊雄の父は、豊雄のことを心配しながらも、束縛や干渉はせず、豊雄の好きなことをすればよいと考える親心がある。

> 「家財をわかちたりとも即人の物となさん。さりとて他の家を嗣しめんもはたうたてき事聞くらんが病しき。只なすままに生い立て、博士にもなれかし、法師にもなれかし、命の極は太郎が驕物にてあらせん」とて、強ひて掟をもせざりけり。此の豊雄、新宮の神奴安倍の弓麿を師として行き通ひける。[103]

ここでは、先行研究における豊雄に対する評価をいくつかを取りあげる。

植田一夫は「家庭にしろ世間にしろ、豊雄を取り巻く環境は、絶対なのであって、彼の個としての存在を許そうとしない。豊雄は自己決定のできない人間である[104]」という見解がある。金田文雄は「生産」を核とした男性原理の支配する家の中で、豊雄は無用者の位置に置かれ、家族の構造から疎外され、それに性格造形で母性的なものへの傾斜をみせる[105]と解釈している。また、宮崎沙織は豊雄の性格から弱くて素直で世間知らずという特徴が見られ、周囲から孤立されながら幻想のような世界観を持つ男[106]と指摘し

---

[100]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.151
[101]山下愛美 2008「『蛇姓の婬』--豊雄の成長と〈死〉」『玉藻』第 43 号、3 月、フェリス女学院大学国文学会、P.54
[102]中田妙葉 2008「『蛇性の婬』における人物形象の創作と中国白話小説の影響について」『東洋法学』第 51 巻第 2 号、3 月、東洋大学、P.93
[103]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)、前掲書、P.357-358
[104]植田一夫 1988『雨月物語の研究』桜楓社、P.151
[105]金田文雄 1994「『蛇性の婬』における物語の場 ―記紀神話をめぐって―」『広島女学院大学日本文学』広島女学院大学第 4 号、広島女学院大学、P. 22
[106]宮崎沙織 2012「『雨月物語』について:豊雄と真女子から読み解く「蛇性の婬」」『日本文

ている。

いわば、豊雄の性格と人物像では自己決定できず、無用者、疎外、孤立などのネガティブな言葉で構成されている人間であると評価されている。

それでは、許宣の場合はどうだろうか。中国語の先行研究の文献では、許宣という人物造形とは「自私好色、懦弱无能、薄情寡义」[107](利己的に女好き、臆病で無能、薄情かつ没義道)、「他胆小、懦弱、迂腐、保守，他既追求幸福，自保欲望又强烈，终于在不觉中毁灭了自己的家庭」[108](彼は臆病で気が弱く、保守且つ時代遅れの価値観を持ちながら、自己防衛本能が強く、いよいよ家族を破壊することになる)などを評価されている。また、鵜月洋によれば、「許宣の人柄とか、性格とか、趣味嗜好とか、知性と教養とかいうような人間性を形成し、個人的魅力につながる面が、その片鱗さえ示されていない」[109]と指摘している。そこで、中国の伝統に反する男性のイメージとして表れてきた許宣の人物像から分析してみる。まず、許宣が白娘子と初対面の時、船に出会った頃の描写である。

中国語原文：

許宣平生是個老實之人，見了此等如花似玉的美婦人，傍邊又是個俊俏美女樣的丫鬟，也不免動念。[110]

許宣は今まできまじめ一方男でありましたから、こんなすごい美人、しかもそのそばにきりっとしたきれいな女中がいるのを見ては、我にもなく胸をときめかさずにはいられません。[111]

この描写からみると、許宣の心がドキドキする状態は白娘子だけでなく、そばにいる

学』第 108 巻、3 月、P. 145

[107]谭本龙 2016「论许仙形象的类型化嬗变」《贵州大学学报（社会科学版)》第 34 卷第 4 期、贵州工程应用技术学院人文学院、P.150

[108]张文琴 2018「《白蛇传》故事的演变及主要人物形象浅析」《戏剧之家》第 3 期、P.18－19

[109]鵜月洋 1980『雨月物語評釈』角川書店、P.565

[110]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.420

[111]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.153

「女中」の存在にも影響されていることがわかる。そこから許宣は白娘子だけに一目ぼれするというより、きまじめな男性として、これまで綺麗な女性に出会うことがなかっただけで、実は女好きであることが窺える。次に、許宣が家に戻った後、なかなか眠れなく、夢の中で女が現れることになる。

中国語原文：

到家内喫了飯。當夜思量那婦人，翻來覆去睡不着。夢中共日間見的一般，情義香濃。不想金鷄叫一聲，却是南柯一夢。[112]

家に着きますと、飯を食い、その夜はあの女のことを考えて、寝返りばかり打って睡れなかったのです。夢の中でも昼間見たのと同じく、情意濃かなものでしたが、鶏の声にはっと目を覚ませば、これなん南柯の夢でありました。[113]

許宣が「あの女のことを考える」からみると、特定な人物を示さなくても、読者は自然に「あの女」は白娘子のことを指すと思い込むことである。しかし、「あの女」は白娘子もしくは女中のことを指すだろうか。また、許宣がなぜ「あの女」のことを考えて眠れられないだろうか。一体「あの女」に対してどんな思いを抱くのか、下心が潜んでいるのではないだろうか。翌日、許宣は貸した傘を取るために白娘子の家に行ったが、白娘子がその傘を親戚に貸したので、許宣はその次の日にもう一度白娘子の家に訪ねる機会を持つ。白娘子がそれをきっかけとして、許宣に結婚のことを言い出す。しかも、貧乏な許宣に結婚に必要なお金を準備してあげる。許宣は白娘子から五十両の銀子をもらい、豪華な肴とお酒を買い、義兄と姉にご馳走しながら、白娘子と結婚しようとすることを話し出す場面である。

中国語原文：

姐夫、姐姐聽得說罷，肚内暗自尋思道:「許宣日常一毛不拔，今日壞得些錢鈔，便要我替他討老小?」[114]

---

[112]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.421-422
[113]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.154
[114]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.421-424

義兄と姉はその話をきいて、腹の中で考えました。「許宣は日頃一本抜こ うとせぬけちな男だに、今日はえらい散財をすると思ったら、女房を世話してくれというわけだったのか？」夫妻は二人たがいに顔と顔を見合わせて、返事もしません。[115]

吝嗇な弟である許宣が嫁迎えのため、姉夫婦家族に大金を使ってしまうことに対して唖然とした。しかし、姉はそのお金は弟が結婚のために貯め込んでいたと何の疑いもなく思い込んでしまった。その後、二作の展開もかなり興味深い。許宣が白娘子から銀子をもらうことと、豊雄が真女児から太刀をもらう描写を比較する。白娘子は許宣が金無しで結婚することができないことについて、以下のよう二つのセリフを話した。しかし、許宣は躊躇なくお金を受け入れてしまった理由はなぜだろうか。

中国語原文：

娘子道:「這個容易。我囊中自有餘財，不必掛念。」便叫青青道:「你去取一錠白銀下來。」(中略)娘子道:「小乙官人，這東西將去使用，少欠時再來取。」親手遞與許宣。許宣接得包兒，打開看時，卻是五十兩雪花銀子。藏於袖中，起身告回。[116]

「そんなこと何でもございませんわ。あたしお金ならいくらもございますから、どうぞご心配なく」白夫人はそう言って、青青を呼び、「白銀を一枚だけ持っておいで」 と言いつけます。 (中略)「許宣さん、これを持ってってお使い下さいまし。たりなかったらまた取りにいらっしゃい」白夫人はそう言って、みずから許宣に渡します。許宣が、その包みを受け取り、あけてみますと、真っ白い五十両の銀子です。 それを袖に入れると、立ちあがっていとまを告げます。[117]

中国の伝統文化では結婚のときに、男性 (夫) から女性 (妻) 側に「聘金」という結納金をあげる風習がある。しかし、許宣はここで男としての責任感やプライトは全然見えず、言われるままにお金を受け入れ、白娘子の言葉に従うように見える。このことでこれから二人の間の力関係にどのような影響を与えるだろうか。しかも、白娘子は直接に許宣にお金を渡すことで、それはいったい許宣を信頼したのか、もしくは試したのだろ

[115]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.157-158
[116]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.423
[117]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.156-157

うか。それから、似たようなシーンで豊雄と真女児の状況を見てみたい。同じく豊雄が真女児に嫁に渡すお金がないことを伝え、真女児は「前の夫の太刀」を渡すことになった。

> **何を禄に迎へまゐらせん便りもなければ身の徳なきをくゆるばかりなり。何事をもおぼし耐給はば、いかにもいかにも後見し奉らん。孔子さへ倒るる恋の山には、孝をも身をも忘れて」といへば、「いと喜しき御心を聞きままゐらするうへは、貧しくとも時々ここに住ませ給へ。ここに前の夫の二つなき宝にめで給ふ帯あり。これ常に帯せ給へ」とてあたふるを見れば、金銀を餝りたる太刀の、あやしきまで鍛うたる古代の物なりける。**[118]

ここでは、原作の白娘子は直接的にお金を渡すことに対し、翻案の真女児は太刀を渡す理由はなせだろうか。

矢野公和によると、真女子と豊雄にも殆ど同じような状況を設定しながら、五十両の銀をわざわざ太刀に変更した理由は「蛇―剣の連想」が素戔嗚尊の八岐大蛇退治以来の伝統である。『類船集』、『三世道成寺』、『道成寺現在蛇鱗』などを例を挙げ、真女子が不気味な程に鍛えられた太刀を豊雄に贈ったことは蛇の化身である彼女の正体を暗示する伏線の役割を果たしていると述べている。

妻問婚的な雰囲気にいる豊雄にとって、金銭ではなく太刀を贈られるのは古代の習俗と恋の常態として不自然に映らないように配慮される[119]と指摘している。それに、井上泰至は、秋成は原拠の贈り物は銀貨に対し、「蛇性の婬」では贈られた古代の刀は、家の中で内心厄介者と考えていたと述べている。それは豊雄の非現実的な行き様の倒錯性を、浮き立たせる点が異なる。豊雄の負の属性を同情する対象へと無意識のうちに転換させる、はるかに意識の高い小道具の使い方へと昇華させていた[120]と指摘した。

---

[118]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)、前掲書、364
[119]矢野公和 1987『雨月物語私論』、岩波ブックサービスセンター、P.178-179
[120]井上泰至 2018「考証から紡がれる物語 ―『雨月物語』「蛇性の婬」論」『京都語文』第 26 号、佛教大学国語国文学会、11 月、P.30－43

しかし、樋口瑞希は太刀の象徴は神霊の依代としての呪具であり、太刀の形状の類似から蛇との関わりが非常に深く、原典で登場した銀塊は、結婚資金として金に換えられる存在だった。ここで登場した太刀は真女子を神性を強く結びつけ、彼女が蛇神、もしくはそれに近いものであると裏付ける役割を果たしている[121]と述べている。真女児が太刀を贈ることは、真女児の豊雄への気遣いとして考えられるほかに、真女児の正体は人間ではなく、神性を持つ蛇神という存在であることを提起しているためと言える。

さらに、二人の女性が男性に高価な品物を渡した後について、それらの場面を比べてみたい。

中国語原文：

許宣接得包兒，打開看時，卻是五十兩雪花銀子。藏於袖中，起身告回。青青把傘拿來還了許宣。許宣接得相別，一勁回家，把銀子藏了。[122]

許宣が、その包みを受け取り、あけてみますと、真っ白い五十両の銀子です。それを袖に入れると、立ち上がっていとまを告げます。青青は傘を持って来て許宣に返します。許宣はそれを受け取り、別れを告げて、まっすぐ家にかえり、銀子をしまいました。その夜はそれまで。[123]

許宣は白娘子から金を受け取る場面では、許宣は最初の動作は「あけてみます」という一言だった。それは一体どのような意味が含まれているだろうか。許宣は受け取ったお金はいくらなのかを直接白娘子の前に確かめたいのか。もしくは、許宣は白娘子のことを信用できず、自らもう一度確かめようとしたのか。しかも、金額を確認した後、次の動作はすぐ袖に入れ、家に帰ることであった。そこから見ると、なぜ許宣はお金に対してそんなに真剣なのだろうか。それは許宣がそのような大金を見たことがないからなのか、それとも許宣にとって白娘子は外見だけでなく、経済力を持つ女性だからこそ、

[121]樋口瑞希 2012「「蛇姓の婬」研究:「反転」という皮肉」、『群馬県立女子大学国文学研究』第 32 号、3 月、群馬県立女子大学国語国文学会、P.69－81
[122]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.423
[123]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P. 157

魅力的な女として見なされているのだろうか。次は豊雄が真女児から太刀をもらった場面である。

> **物のはじめに辞みなんは祥あしければとてとりて納む。「今夜はここに明させ給へ」とて、あながちにとどむれど、「まだ赦なき旅寝は親の罪し給はん。明の夜よく僞りて詣でなん」とて出でぬ。其の夜も寝がてに明けゆく。**[124]

それにひきかえ、豊雄と真女児の状況において、豊雄を取った後の動作の描写が一切なく、かえって真女児は遠慮なくお泊りの誘い「今夜はここに明させ給へ」という表現がある。豊雄は「まだ赦なき旅寝は親の罪し給はん。明の夜よく僞りて詣でなん」という返事から、豊雄は親に叱られることを恐れるため断ったが、明日の夜に来るのを約束することになる。

上述の描写は二つの物語に人物像の違いを明らかにした。白蛇伝の許宣と白娘子はただ物の授受関係しか表されておらず、二人の間に曖昧な関係さえ表現されていない。

「蛇性の婬」では真女児が一緒に夜を過ごすことを提案しているが、それに対して、豊雄がどのように心境変化してきたのか。最初、豊雄が親の許可なしに外泊することは叱られるので拒否してしまった。しかし、真女児に魅了された豊雄は真女児からの誘いに対して抵抗がなく、かえって明日の夜なら来られると言い出した。そこで、真女児が積極的に性的な魅力で豊雄を惹きつけようとする行動と豊雄は真女児の誘いを受けることにより、二人の関係は許宣と白娘子より早く進展していると言える。それから、許宣と豊雄はそれぞれ大金と太刀を受け取った以後、二人への、家族の態度の差異で二人の男性主人公の共通点と相違点を導き出してみよう。許宣は姉に結婚するためお金の準備があるので、結婚することは姉夫婦にお金の心配をかけることはないと伝え、姉はお金を見ると素直に許宣は自ら結婚する貯金であることを思い込んでいた。許宣の姉と義兄が許宣は結婚するお金を持っていることを知り、二人がそれぞれに言い出す言葉である。

---

[124]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.364-365

中国語原文：

許宣道:「姐姐，你如何不上緊?這個有甚難處，你只怕我教我姐夫出錢，故此不理。」許宣便起身到臥房中開箱,取出白娘子的銀來,把與姐姐道:「不必推故,只要姐夫做主。」姐姐道:「吾弟多時在叔叔家中做主管，積攢得這些私房，可知道要娶老婆！你且去，我安在此。」（中略）李募事聽得說道:「原來如此，得他積得些私房也好。拿來我看！」做妻的連忙將出銀子遞與丈夫。[125]

「姉さん、大丈夫ですよ。何でもありゃしませんよ。にいさんにお金の心配をかけると思って、話して下さらないんでしょ？」許宣はそう言うと、立ちあがって寝室に行き、箪笥をあけて、白夫人から貰った銀子を取り出して来て、姉に渡しました。
「遠慮いりません、これでにいさんにお世話を頼んで下さい」
「お前は長いこと叔父さんとこで番頭をやってるあいだに、こんなに臍くりを貯めてたのかえ。なるほど、それで結婚がしたくなったってわけだね。いいとも、あたしがいいようにして上げるから、まかせておきなさい。」 **(中略)**
「へえ、そうだったのか。あの子もよくまあそんなにたくさん貯めたもんだね。持って来てわしにみせてごらん」李募事にそう言われて、妻がいそいそとその銀子を持って来て夫に渡します。[126]

このように、許宣の姉は許宣の人柄を信じ、そのお金は許宣の貯金であることを疑いなく受け入れた。一方、豊雄の方はどうなっているだろうか。豊雄の家族には豊雄のことを信じようともしない場面を以下のように描かれている。

太郎、「いかでさる宝をくるる人此の辺にあるべき。あなむつかしの唐言書きたる物を買ひたむるさへ、世の費なりと思へど、父の默りておはすれば今までもいはざるなり。其の太刀帶びて大宮の祭を邊やらん。いかに物に狂ふぞ」といふ声の高きに、父聞つけて、「徒者が何事をか仕出でつる。ここにつれ來よ、太郎」と呼ぶに、「いづちにて求めぬらん、軍将等の佩給ふべき輝々しき物を買ひたるはよからぬ事、御目のあたりに召して問ひあきらめ給へ。おのれは網子どもの怠るらん」と言ひ捨てて出でぬ。母豊雄を召て、「さる物何の料に買ひつるぞ。米も錢も太郎が物なり。吾主が物とて何をか持たる。日來は為すままにおきつるを、かくて太郎に悪まれなば、天地の中に何国に住むらん。賢き事をも学びたる者が、など是ほどの事わいだめぬぞ」といふ。豊雄、「実に買ひたる物にあらず。さる由縁有りて人の得させしを、兄の見咎めてかくの給ふなり」。父、「何の譽ありてさる宝をば人のくれたるぞ。更におぼつかな

[125]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.424
[126]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、P. 158

き事。只今所縁かたり出でよ」と罵る。[127]

豊雄の家では、兄の太郎をはじめ、父と母、全部豊雄はそのような高価な宝物を持つことに疑うだけでなく、豊雄が「実に買ひたる物にあらず。さる由縁有りて人の得させし」という弁解に対しても信じようともしない。

その原因としては、高田衛によれば、父が豊雄の事を「徒者」という言葉から、家業に従事せず、学問などに熱中するのはすべて「あだ事」であり、「いたづら事」である。そのような者は世の無用者という論理である。当時の家族の相続形態では長男がすべてを相続するため、次男の豊雄は家族にとって余計な存在であると見なされている。鎌倉時代に、武家社会での慣習や道徳をもとに制定された御成敗式目において、家族法の項目の第 22 条の内容では相続の規範について次のように制定された。

> 父母所領配分の時、義絶にあらずといへども成人の子息に譲り与へざる　事右、その親成人の子を以て吹挙せしむるの間、勤厚の思ひを励まし労功を積むのところ、或は継母の讒言につき、或は庶子の鍾愛により、その子義絶せられずと雖も、忽ち彼の処分に漏る。侘傺の条、非拠の至りなり。よつて今立つる所の嫡子の分を割き、五分一を以て無足の兄に宛て給るべきなり。但し少分たりと雖も計らひ 宛つるに於ては、嫡庶を論ぜず、宜しく証跡によるべし。抑も嫡子たりと雖もさしたる奉公無く、また不孝の輩に於ては、沙汰の限りにあらず。[128]

長子相続制によると、近世の家相続は嫡子が単独相続であった。

> 家相續についは、嫡子の單獨相續制は当時において、確立した原則と言うことができる。かくのごとく、一跡相續が一般化し、父の跡職は嫡子一人が相續したのであるが、嫡子がその知行の一部を割いて庶子を扶持することもあった。[129]

---

[127]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)、前掲書、P.365-366
[128]石井進・石母田正・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一著 1972『中世政治社会思想上　日本思想大系 21』岩波書店、P.22
[129]石井良助 1950『長子相續制　法律学体系第 2 部 法学理論篇』日本評論社 、P.88

また、松田敬之は明治時代以前、次男と三男以下の人生は部屋住や厄介というイメージ付けられ、次男と三男は被扶養者と論じている。

> 部屋住とは、嫡子でいまだ元服を済ませていない者や、家督を相続していない者のことをも指すが、一般的には、次三男以下で分家や独立もせず、親や兄、ひいては甥や従孫(甥の子)に厄介として寓居する者も指す。その厄介であるが、これは家長の傍系親(兄弟姉妹またその子孫間の関係の意)で被扶養者のことを指している。[130]

上述をまとめてみると、次男の豊雄は家相続に関係なく、独立できず厄介とみなされる被扶養者にすぎないと言える。それに対して、原話の主人公許宣は、薬屋の番頭にすぎないが、一個の人間としては自立していた。それを豊雄のような境遇に書きかえたのは、秋成の小説的構想である。豊雄は自立を求めつつも自立の不可能な矛盾的立場におかれている[131]と指摘している。そこで、許宣と豊雄は家族たちからの評価や考えをいくつかまとめてみる。

まず、家族の構成では、許宣は両親がなくなり、家族の末子として叔父の店で働い、姉と義兄と一緒に住んでいる。豊雄は漁師の家の次男且つ末子であり、家業を継ぐことや家族を支えるなどの役割はすべて長男である兄の太郎が背負うべきであるという考えがあるので、豊雄の家族は豊雄に対してあまり期待できない存在であると見なされている。それに、仕事の面からみると、許宣は叔父の店の生薬店の番頭をつとめ、自力でお金を稼ぐ。それに対して、豊雄は「生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。[132]」の描写により、豊雄は性格は風流なことを好んで、世間知らずで生活のための心がけがないということがわかってきた。また、家族側に許宣や豊雄がお金や高価な宝物が手に入ることに対する態度と反応の違いである。許宣の姉はお金を見たとたんに、あっさりとそのお金は許宣の貯金であると思い込んでいる。

---

[130]松田敬之 2008『次男坊たちの江戸時代 公家社会の〈厄介者〉』吉川弘文館、P.1-2
[131]高田衛 1980『雨月物語評解』有精堂、P.226-227
[132]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)、前掲書、 P.357

義兄は姉の言葉を信じるが、お金の存在をもう一度確かめようとするという行為からみると、義兄は許宣が大金を持つことに疑念を抱いていることがわかる。一方、豊雄の家族の態度はかなり異なっている。なぜなら、豊雄の家族にとって、豊雄がそんな大金を持つ、もしくは他人が豊雄にそんな宝物をあげることなど一切信用できず、豊雄が両親に叱られる場面がある。このように、許宣と豊雄の人物設定の違いから二人は異類の白娘子と真女児に対して異なる言動と選択により変わる結果を導き出すと推測できるのではないだろうか。

鵜月洋が許宣と豊雄の人間造形について、次のように語っている。

> 許宣は都会育ちの薬屋の通い番頭であったが、とりわけ都会人らしい性向が強調されているわけでもない。ただ美男で、ごく平凡な男にした寺れているだけで、とりたててしっかりとした性格、きわだった特徴が浮彫りにされているというわけではない。（中略）それにひきかえて、秋成が造形した豊雄には、豊雄独自の性格が与えられ、その人柄また躍如として描き出されて、リアルな人間像に作り上げられているのである。しかもその性格ゆえに事件に巻込まれ、やがてはその人間的な成長が事件を解決してゆくように構想されている。[133]

上述から見ると、許宣の人物像をはっきり描いていないため、許宣の性格と特徴を場面描写を通じてまとめてみたい。許宣の仕事が番頭であり、店主の指示に従う必要がある。また、古代の初婚年齢では「男性 16 歳、女性 14 歳」ということであるが、許宣が 22 歳になっても、まだ姉夫婦に頼って同居していることで、結婚することはおろか、独居することすらできていない。すなわち、許宣が経済力がなく、嫁をもらえない男である。しかも、仕事に対しても家族に対しても他人の言いなりになることを自然に身に付けていると考えられる。

それに対して、豊雄が次男として、家業を継ぐや家族への責任もなく、家族から甘やかされ、仕事すらやる必要がない。そのため、豊雄が家族に頼って生きることにより、家族の言いなりにしなければならないと考えられる。

---

[133]鵜月洋 1980『雨月物語評釈』角川書店、P.563-564

こうして、許宣と豊雄は家族との連帯感が強いというより、二人の共通点は自立できないため、家族と同居している状態であり、結婚に相応する能力を持たず、女性にもモテたことがない男性である。二人の性格は、許宣が臆病で気が弱く、豊雄が「都風たる事」が好きなものである。そのような男性が雨の日に船を乗った時、美しいヒロインと邂逅し、しかもヒロインが結婚することを持ちかける。許宣と豊雄にとって、結婚のお金や支度まで準備してくれる美女が嫁になってくれることほど良い話はほかになく、簡単に受け入れる。

しかし、物語の展開をみると、許宣と豊雄はヒロインの正体がわかると、自力で解決することもなく、ヒロインとのコミュニケーションもなく、ひたすらに逃避する道を選ぶことになる。その主な原因として、許宣も豊雄も家族に援助ひいきされることが習慣になり、家族や社会からの期待もなく、男性としての責任を負う必要もないという人格に育てられてきたからだと言える。次に、白娘子と真女児から受け取ったものを原因として、許宣と豊雄が犯人扱いされる場面である。そこでの、二人の共通点は隠さず白娘子と真女児のことを話し出すことである。

中国語原文：

許宣道:「告相公，不必用刑，不知許宣有何罪?」(中略)許宣方知是這事，大叫道:「不是妖人，待我分說!」大尹道:「且住，你且說這銀子從何而來?」許宣將借傘、討傘的上項事，一一細說一遍。[134]

許宣、「どうか、お手荒なことはなさらないで下さい。わたくしが一体どういう罪を犯したというのでございましょうか？」と言うと、（中略）許宣さてはと思い、「待ってください、わたくしは妖術使いではございませぬ。何もかも申し上げますから」「よし、ではこの銀子はどこから来たのだ？」許宣は傘を借りたこと、傘を取りに行ったことなど、前にあったことを詳しく話しました。[135]

助、豐雄をにらまへて、「爾神宝を盗みとりしは例なき国津罪なり。猶種々の財はいづ地に隠したる。明らかにまうせ」といふ。豐雄漸此の事を覚り、涙を流して、「お

[134]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.425
[135]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P. 159

のれ更に盗をなさず。かうかうの事にて県の何某の女が、前の夫の帯たるなりとて得させしなり。今にもかの女召て、おのれが罪なき事を覚らせ給へ」。助いよよ怒りて、「我が下司に県の姓を名のる者ある事なし。かく偽るは刑ますます大なり。」豐雄、「かく捕はれていつまで偽るべき。あはれかの女召して問はせ給へ。」[136]

その上に、豊雄は自らの無実を証明するための、「今にもかの女召て、おのれが罪なき事を覚らせ給へ」という発言がある。二人の男性主人公は同じく窃盗との関与を認めないばかりか、すべてのことは女性の白娘子と真女児が背負うべきだという考えがある。たとえ彼らは自らの利益だけ考え、男としての責任感や婚約者に対して保護しようとする気持ちが一切表わされていないと言えるではないだろうか。そして、白娘子と真女児が渡したもので大騒ぎになり、許宣と豊雄を犯人扱いされたことについての女たちの弁解は同じく「あたしがどうして化物でございましょう？服には縫目がありますし、お日さまに向かえばちゃんと影ができます。」と「衣に縫目あり。日にむかへば影あり。」という比喩表現で妖怪や化物ではないことを証明しようとしたが、以下のように二人の感情表現においては、大きな差異が見られる。

中国語原文：

那白娘子道:「小乙官人，不要怪我，今番特來與你分辨這件事。我且到主人家裡面與你說。」白娘子叫青青娶了包裹下轎。許宣道:「你是鬼怪，不許入來。」攔住了門不放他。那白娘子與主人深深道了個萬福，道:「奴家不相瞞，主人在上，我怎的是鬼怪?衣裳有縫，對日有影，不幸先夫去世，教我如此被人欺負!做下的事是先夫日前所為，非干我事。如今怕你怨暢我，特地來分說明白了，我也甘心。」[137]

すると白夫人が申しますには、「許宣さま、まあそうおっしゃらずに！今日はわざわざそのことを弁解するためにまいったのです。ともかく中にはいってお話ししましょう」白夫人は青青に命じて荷物を下ろさせ、轎から下ります。
許宣は、「きさまは化物だ。はいっちゃいかん！」
「あたし、決して嘘いつわりは申しません。あたしがどうして化物でございましょう？服には縫目がありますし、お日さまに向かえばちゃんと影ができます。不幸にも夫に先立たれてからは、こんなにあたしは人から馬鹿にされているのです。犯したこ

[136]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.369
[137]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.428

とは亡夫が前にしたことで、あたしとは何の関係もないのです。いまあなたがあたしを怨んでいらっしゃるにちがいないと思って、わざわざいいわけをしに来ました。それさえ納得していただければ、あたしは帰っても満足です」[138]

白娘子は最後に「いまあなたがあたしを怨んでいらっしゃるにちがいないと思って、わざわざいいわけをしに来ました。それさえ納得していただければ、あたしは帰っても満足です」という段落では、白娘子は低姿勢な態度を取り、許宣への思いと感情が表されている。

真女子入り來りて、「人々あやしみ給ひそ。吾夫の君な恐れ給ひそ。おのが心より罪に墮し奉る事の悲しさに、御有家もとめて、事の由縁をもかたり、御心放せさせ奉らんとて、御住家尋ねまゐらせしに、かひありてあひ見奉る事の喜しさよ。あるじの君よく聞きわけて給へ。我もし怪しき物ならば、此の人繁きわたりさへあるに、かうのどかなる昼をいかにせん。衣に縫目あり。日にむかへば影あり。此の正しきことわりを思しわけて、御疑ひを解かせ給へ」。（中略）真女子涙を流して、「まことにさこそおぼさんはことわりなれど、妾が言をもしばし聞かせ給へ」[139]

逆に、真女児は「此の正しきことわりを思しわけて、御疑ひを解かせ給へ」と言い、なぜ涙さえ流し出して豊雄の同情や憐れみを求めようとするのだろうか。これについて、高田衛はこの段落では原話との違いは秋成が書いたいくつかの「真女子のことわり」を挙げながら、その一つは「涙」であり、原話の白娘子は涙を流さない[140]と述べている。この場面では、「涙」という要素による違いは真女児が豊雄の同情を求めるかわりに、白娘子は許宣の理解を求めると言えるであろう。

一方、白娘子と真女児が蛇の正体を疑われ、または暴かれそうになった際、許宣と豊雄はどのように対応するのか。許宣は前から何回も白娘子のことを疑い、道士、蛇とりの戴先生と禅師の法海に助けを求め、白娘子の正体を暴くためにいろいろな方法を使って白娘子に対抗しようとする。

---

[138]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、P. 161
[139]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.372-373
[140]高田衛 1980『雨月物語評解』有精堂、P.242

しかし、豊雄は異類の蛇を恐れ、はじめから家族の意見を受け入れ、対抗するというより他の女性と結婚することを選択する。

豊雄は真女児が蛇という異類だとわかった後、家族の言いなりになり、もう一人の女性「富子」と結婚することになる。豊雄がこのような行為を選んだことについて、矢野公和は、豊雄が内面的な問題は全く考慮の外に置いてしまい、独身でいるから良くないのであって、結婚すれば何とかなるだろうということを「安易な善後策」と言い、豊雄にとって本質的な問題が何も解決されてはいない[141]と述べている。

植田一夫は、「愛情にしても共同体における承認を必要とする」といい、人間社会に承認されることのない真女児は豊雄の妻になることが不可能な存在になり、富子は豊雄の妻として共同体に承認されている存在である[142]と指摘されている。つまり、二人の男性は白娘子と真女児の正体が暴かれた後、異なる対策をたてる。豊雄はこっそりと朝廷の采女である富子と結婚することで真女児との関係から逃げようとする。許宣は道士、蛇とりの戴先生と禅師の法海を依頼し、白娘子と対抗することを選んでいる。そこでの豊雄と許宣の共通点といえば、ヒロインたちとの対話やコミュニケーションを一切拒否していることであり、豊雄が真女児との結婚を認めないことに対して、許宣が妻を敵として扱い戦うことになる。以下は許宣が道士、蛇とりの戴先生、禅師の法海それぞれの人に助けを求める場面である。

中国語原文：

道士

叫道:「你近來有一妖怪纏你，其害非輕!我與你二道靈符，救你性命。一道符，三更燒，一道符放在自頭髮內。」許宣接了符，納頭便拜，肚內道:「我也八九分疑惑那婦人是妖怪，真個是實。」[143]

---

[141]矢野公和 1987『雨月物語私論』、岩波ブックサービスセンター、P.182－183
[142]植田一夫 1988『雨月物語の研究』桜楓社、P.143-144
[143]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.429

道士

「あなたにはこの頃、妖怪がつきまとっておりますぞ。そのままにしておくと、たいへんなことになりますぞ。わたしが霊符を二枚さし上げて、あなたの命を助けて進ぜましょう。一枚は真夜中に焚きなされ。一枚はご自分の頭髪の中に入れておくのですじゃ」許宣は護符をもらって、頭をさげて礼をのべ、腹の中で考えました。「僕も八、九分どおりあの女は妖怪じゃないかと疑っていたが、やっぱりそうだった」[144]

呼蛇戴先生

許宣道:「家中有一條大蟒蛇，相煩一捉則個!」(中略）取出一兩銀子道:「先生收了銀子，待捉得蛇另又相謝。」[145]

蛇とりの戴先生

「わたくしの家に大きなうわばみがいるんで、つかまていただきたいのですが」(中略)許宣がそう言って、一両の銀子を取り出し、「これだけお収め願います。蛇をつかまえていただいた上で、またお礼はいたしますから」[146]

法海禅師

許宣見了禅師，納頭便拜，道:「救弟子一命則個!」禅師道:「這業畜在何處?」許宣把上項事一一訴了。道:「如今又直到這裏，求尊師救度一命。」[147]

禅師の法海

許宣は禅師を見ると、頭を下げて頼みました。「どうかわたくしの一命を救って下さいまし」「その畜生はどこにいるのだ？」禅師にたずねられて、許宣は今までのことを詳しく話して、「そういうわけで、ただいまここにまいった次第でございます。なにとぞ、一命を助けて下さいまし」[148]

上述の引用について論を展開しようと思う。まず、ある道士が許宣に「妖怪がつきまとう」ということを話しかけ、護符を渡すことである。許宣は全く迷わず、すぐに護符をもらう。しかも、「僕も八、九分どおりあの女は妖怪じゃないかと疑っていたが、やっぱりそうだった」という一言を話す。

---

[144]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P. 163
[145]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.441-442
[146]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P. 176
[147]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.443
[148]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P. 178

許宣は白娘子の支え、何もかも尽くすことを妻としての役割を当然だと考えるが、自分の夫として家族を養う責任感を持っていないと言える。しかし、許宣は妻の白娘子より他人の言葉のほうを信じる傾向がある。

次に、許宣が蛇とりの戴先生をお金で雇い、大きなうわばみや蛇という言葉から白娘子の正体は異類であると確信しているに違いない。また、文章の中に言及していないが、許宣が人を雇うお金は恐らく白娘子からもらったお金かもしれない。それなら、白娘子が許宣に提供したお金はかえって自分に逆らう機会を与えるのではないであろうか。さらに、道士と蛇とりの人とも白娘子に勝てないため、許宣が禅師の法海に頼んでついには白娘子の生存の問題に迫っている状態になる。その一方、豊雄は家族を守るため、あっさりとほかの女を嫁取りするが、初めから真女児のことを迫害しようとする態度は見えない。

豊雄夢のさめたるここちに、礼言尽ずして帰り来る。金忠にむかひて、「此の年月畜に魅はされしは己が心の正しからぬなりし。御恵いとかたじけなけれど、又も参りなん」とて、紀の国に帰りける。父母太郎夫婦、此の恐ろしかりつる事を聞きて、いよよ、豊雄が過ならぬを憐み、かつは妖怪の執ねきを恐れける。「かくて鰥にてあらするにこそ。妻むかへさせん」とてはかりける。[149]

このように、豊雄は夢から醒め、「親兄の考もなさで、君が家の羈ならんは由縁なし」、豊雄が家族への貢献や迷惑をかけないようにと考え、真女児とのことを家族に話したことがわかる。そして、家族から豊雄への解決策では「かくて鰥にてあらするにこそ。妻むかへさせん」といい、ほかの女性と結婚することで真女児が豊雄のことに断念するはずだと考えているのではないだろうか。家族に依存し自立できない豊雄からみれば、他人任せの性格によって家族の意見をあっさりと受け取り、躊躇なく采女の富子と結婚することを決めた。その決定はその後真女児が執念深い蛇女に変身することにつながりがあるといえる。

[149]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)、前掲書、P.379

第 3 節　蛇のイメージ

「白娘子永鎮雷峰塔」、「蛇性の婬」をより深く理解するためには、二作が物語の中に描き出す蛇のイメージを比較することにも意味があるだろう。

まず、先行研究では白娘子と真女児に対するそれぞれの分析を取り上げてみる。近藤忠義は、白娘子は許宣を心から愛するひとりの女性として現れるが、気の弱い許宣は白娘子を疑いつつ、動揺することになる。白娘子の愛情は男に負担を感じさせるようなセンチメンタルで世話女房型であり、意志の弱い許宣の心は彼女から断ち切れて飛び去りそうになる[150]と述べている。阿部泰記は『白蛇伝』を民間における伝統的な蛇信仰の反映及び後世に白蛇が存在の正当化される理由、庶民の白蛇に対する恐怖と信頼が交錯する作品といい、蛇の毒性が否定されず、それが恩人の救済に役立つものとして肯定される動物報恩譚[151]と指摘している。川田耕は許宣が蛇ということに恐怖を抱きながら「自己保衛」のため、白娘子と対抗し、彼女を棄却することになることを次のように解釈している。

> 白蛇＝白娘子は、まずは、この「太母」の否定的な側面を臆面もなく発揮する。蛇は元来ものを言わない非言語的でおぞましい存在である。そして、白蛇＝白娘子は、どこからともなく現れて、社会の法を侵犯し男たちの安寧を脅かしながら、おのれの欲望を実現しようとしていく。許宣は、そのような白蛇＝白娘子に強く恐怖しながらも深く惹かれて、白娘子に呑み込まれてその社会性を繰り返し奪われ命までも危険にさらされることになる。だからこそ許宣は彼女を「棄却」しようと必死になるのである。[152]

「白蛇伝」における白娘子は人間の許宣のことを好きになり、雨の日に偶然の出会いというきっかけ作りで積極的に接近し、結婚話さえ持ち出す女性である。

---

[150]近藤忠義 1957「「白蛇傳」と「蛇性の婬」―その三―」『日本文学』第 6 巻第 5 号、日本文学協会、P.377-378

[151]阿部泰記 1995「『白蛇伝』の発展 ： 怪談から報恩譚へ」山口大学アジア歴史・文化研究会『アジアの歴史と文化』第 2 号、10 月、P.1-19

[152]川田耕 2014「白蛇伝にみる近代の胎動」『京都学園大学経済学部論集』第 23 巻 2 号、3 月、京都学園大学経済学部学会、P.46

白娘子が許宣に対してすべてを捧げるが、許宣は白娘子に不信感を持つ。さらに、許宣は白娘子の正体が蛇であることを分かると、薄情かつ残酷な面を現し、白娘子に迫害しようとする。しかし、蛇妖としての白娘子はなぜあらゆる手段を使い、自分の追い詰めて来る許宣に対して懲罰を与えることができないのだろうか。

従来の研究では「白蛇伝」は報恩譚や世話女房のイメージがあり、妖蛇に変身して人々に脅かすことは伝統文化における理想的な女性像に相応しくないと考えられる。また、もし白娘子が許宣の下心を見抜き、次第に許宣を諦めるもしくは何か対策を講じるなら、法海によって雷峰塔の下に鎮圧されることにもならないではないのだろうか。

白娘子が鎮圧されることで、ヒロインが愛情を追い求め、男性に献身的な女性像を描き、同情される対象にもなる。次に、真女児の場合はどうだろうか。「蛇性の婬」という題目から物語の中に蛇が登場することを暗示している。鵜月洋は真女児の豊雄に対する愛情表現を次のように述べている。

> 「真女児はあくまでも自主的に、積極的に、全身を投げ出して豊雄を愛し抜こうとする。それは愛と呼ぶよりは執念と呼んだほんがいいかもしれない。豊雄の身も心も独占しようとする強烈な愛情本能のままに動いている。それは与えるよりは奪おうとする愛であった。だからそれをはばもうとする障害にあうと、そのたびに全身全能をもってこれに立ち向かい、これを排除しようとしたのである。ここにも異類の自己中心的な愛の論理が描かれている。」[153]

いわば、真女児にとっての愛情とは実に執念に近く、豊雄を自分の「所有物」として自らが独占し、邪魔になる人々をすべて迫害してしまい、豊雄を取り戻すために何でもするという執着をもつことである。真女児が僧侶を殺害し、富子に憑依することによって、豊雄とやり直す方法を試みるが、すでに真女児の正体に怯える豊雄にとって蛇妖を受け入れることができない。大輪靖宏によれば、「真女児は、蛇であるという点を除けば、何ら非難さるべき点はない。豊雄を取って喰おうとするわけでもなく、精気を吸い取ろうとするわけでもない。自分達の愛が妨げられぬかぎり、他人に危害を加えること

[153]鵜月洋 1980『雨月物語評釈』 角川書店、P.566－567

もせぬ。彼女は、ただひたすら豊雄を愛するのみである。只、その愛が、蛇の愛であるゆえに、豊雄に受け入れられない。豊雄のみならず、周囲の人間にも―勿論、読者にも―排斥されねばならないのである。」[154]と指摘している。

そこで、大輪の論点から、真女児は蛇だからこそ人々に非難される。他人が真女児を妨害さえしなげれば危害に当たらないという解釈である。真女児の正体が蛇であるゆえに、豊雄に受け入れられず、人間社会から排斥されることになる。

長島弘明は『雨月物語』で女の「性」は「慳(かだま)しき」もので、その時代の女性は抑圧され差別されることが常態であると次のように述べている。

> 抑え込まれた情念や潜在する自由への欲求は、「慳しき性」と「婬なる性」と呼ばれ、それを解き放とうとすることは、まがまがしい悪とされる。「慳しき性」「婬なる性」とは、その発現を好まぬ側から名付けられた、女のもっとも人間らしい感情を指すことばである。かくして、女の「性」とは、処罰され断罪されることを宿命づけられた「性」である。[155]

さらに、三浦一郎は蛇性の婬に関する研究を豊雄の成長物語という主流的な捉え方を批判し、真女児の好意や同情的見方に修正すべきであり、語りのあり方や表現などを従来の論点から新しい論点を求められることを指摘している。

> 本編をもっぱら豊雄の成長物語という枠組みで把握すれば、真女児はその妖異性を強調され、克服されるべき存在として否定的に把握されることになる。しかし、作品中しばしば真女児の姿が、肯定されるとまでは言えないにせよ、好意的ないし同情的に描かれているように読めることも確かである。[156]

上述の先行研究から、白蛇伝における白娘子及び「蛇性の婬」の真女児についての評価は賛否両論があるが、白娘子が伝統的な「良妻賢母」という女性像に対して、真女児は蛇妖のイメージであることに着目している。

---

[154]大輪靖宏 1976『上田秋成文学の研究』笠間書院、P.71
[155]長島弘明 2000『秋成研究』東京大学出版会、P.173－174
[156]秋成研究会編 2016『上田秋成研究事典』笠間書院、P.65

そのため、二人の共通点は同じく異類として見られる存在である限り、たとえ白娘子と真女児がどんなに人間化しようとしても人類社会に受け入れられないと言える。

さらに、木村慧子は蛇女の変容について、「宿命の女(ファム・ファタール)」の様相が見られ、「蛇性の婬」では「人間の力は圧倒的に勝るものとなり、異形の者の力は弱まっていく。人間は自然を制御し、文明化を進め、宗教の力を強めていった[157]」と述べている。そこで、日本と中国の歴史の中で女性のイメージは何か、また「良妻賢母」とはどのような役割を果たすべきかについて探求してみたい。

小山静子は「良妻賢母」の解釈について、「家事使用人を抱えた家族にあって、舅姑と同居し、夫や舅姑に従順につかえ、子を育て、教育し、家政を管理できる女性、家事・育児が国家・社会の基礎であることを認識し、国民としての自学を持ち合わせた女性」[158]というのは期待される女性像であると述べている。

まず、それぞれの小説の発行年では、馮夢竜の『警世通言』は明朝天啓 4 年（1624)で刊行され、上田秋成の『雨月物語』は 1776 年に刊行されている。それに、作品背景では「白娘子永鎮雷峰塔」は南宋の紹興年間（1131-1162 年）で、「蛇性の婬」では「いつの時代なりけん」という描写をして、次のように物語を展開する。

中国語原文：

話説宋高宗南渡，紹興年間，杭州臨安府過軍橋黒珠巷内，有一個官家，姓李，名仁。[159]

さて宋の高宗が南渡されました紹興年間に、杭州は臨安府、過軍橋黒珠児巷内に、李仁というお役人が住んでいました。[160]

いつの時代になりけん、紀の国三輪が崎に、大宅の竹助といふ人在りけり。[161]

---

[157]木村慧子「蛇女の変容―「レイミア」と「蛇性の婬」の場合」、徳田和夫編 2018『東の妖怪・西のモンスター―想像力の文化比較』勉誠出版、P.206
[158]小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房、P.210
[159]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.419
[160]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P. 151
[161]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)、前掲書、P.357

そして、古代中国と日本の家族形態について、関口裕子は中国古代の所有形態の特徴は女性が基本的に財産所有から排除され、それに財産所有が家族を単位として実現していると指摘している。しかし、日本古代の所有形態において、女子相続権は「男子の半」という不平等なものでありながら、女子の所有権が存在する[162]と述べている。

中国の儒道では「女子無才便是德」（才能のないことこそ、女の徳）という観念がある。また、「三從四德」(三従四徳)という表現で女性の地位を表すことがある。三従とは「娘は父親にしたがい、結婚後は夫にしたがい、夫なきあとは長子にしたがうことである」[163]という。「四徳」は、女性としての節操を守ることを意味する婦徳、言葉遣いを意味する婦言、身だしなみをを意味する婦容、家事を意味する婦功のことである。要するに、家父長制の社会では女性の地位が低く、結婚は自らに決定する権力も持っていない。しかし、関口裕子によると、日本古代では女性には結婚の決定権のほかに、求愛及び求婚権を持つと次のように指摘している。

> ところで女性による結婚＝性関係の決定権の保持といった時、それは当然女性による求愛・求婚権の保持をふくむはずである。なぜなら女性が本当の意味で自分の結婚＝性関係を決めることができるためには、ただ受動的に男性からの求愛・求婚をまつのではなく、自分の方から積極的に好きな男性に働きかけることができる必要があるからである。[164]

次に、小説の内容から蛇女の表象を探求してみたい。最初主人公が出会う場面では、許宣と豊雄が白娘子と真女児に傘を貸した。そこで、傘を貸したことを契機に家を訪ねてきた豊雄に、真女児は積極的に結婚を持ちかける。女性が迫る、というのは、「白娘子永鎮雷峰塔」の白娘子でも似たような発言があり、二人の女性が次のように語っている。

---

[162]関口裕子 1982「古代における日本と中国の所有・家族形態の相違について―女子所有権を中心として」『日本女性史①原始・古代』東京大学出版会、P.250-255
[163]シャルル・メイエール著・辻由美訳 1995『中国女性の歴史』白水社、P.105-106
[164]関口裕子 2018『日本古代女性史の研究』塙書房、P.87

「面なきことのいはで病なんも、いづれの神になき名負すらんかし。努徒なる言にな聞き給ひそ。(中略)きのふの雨のやどりの御恵みに、信ある御方にこそとおもふ物から、今より後の齢をもて御宮仕へし奉らばやと願ふを、汚なき物に捨はずば、此の一杯に千とせの契をはじめなん」といふ。[165]

中国語原文：

奴家亡了丈夫，想必和官人有宿世姻緣，一見便蒙錯愛。正是你有心，我有意。煩小乙官人尋一個媒證，與你共成百年姻眷，不枉天生一對，却不是好。[166]

あたし、夫を亡くしましてから、きっとあなたと前世からの姻縁があったのでしょうか、はじめてお会いした時から好意を寄せていただきました。あなたがあたしを思って下さるように、あたしもあなたを思っています。済みませんがお仲人をさがして来て下さいません？そしてあなたと共白髪まで夫婦になれましたら、それこそ人と生まれた甲斐があったと申すもので、どんなにうれしいでしょう！[167]

上述からみると、共通して女性から結婚のことを話し出すことにおいて、真女児と白娘子、二人の表現方法はかなり異なっている。「あなたがあたしを思って下さるように、あたしもあなたを思っています。済みませんがお仲人をさがして来て下さいません？」という白娘子の表現に対して、真女児が「今より後の齢をもて御宮仕へし奉らばやと願ふを、汚なき物に捨はずば、此の一杯に千とせの契をはじめなん」という発言がある。

さらに、上述の段落を通して、言葉遣いによる白娘子と真女児の人物像について分析したい。真女児は単刀直入に結婚することを持ち出すが、白娘子はわざと仲人を探すという婉曲表現を使って縁談をお願いすることをほのめかしている。したがって、白娘子の許宣への婉曲的な態度により、彼女がかなり思慮深い人であると言えるであろう。また、白娘子と真女児はどのように許宣と豊雄を魅了しているのか。それらの場面描写を以下で引用する。初対面の時から、白娘子と真女児の美貌は許宣と豊雄に深い印象を与えて、二人とも家に帰ってもその美しさを忘れられない。

---

[165]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、 P.362-363
[166]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.423
[167]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、P.156

中国語原文：

那婦人同丫鬟下船。見了許宣，起一點朱唇，露兩行碎玉，向前深深道一個萬福。許宣慌忙起身答禮。那婦人和丫鬟艙中坐定了。娘子把秋波頻轉，瞧著許宣。許宣平生是個老實之人，見了此等如花似玉的美婦人，傍邊又是個俊俏美女樣的丫鬟，也不免動念。[168]

婦人は女中と共に船に乗りましたが、許宣を見ると、赤い唇を少しひらき、二行の玉のような歯をあらわして、ていねいにおじきをしました。許宣はあわてて立ちあがり、礼を返します。その夫人と女中は胴間に腰を下ろしましたが、夫人はしきりに横目を使って許宣の方を見ます。許宣は今まできまじめ一方の男でありましたから、こんなすごい美人、しかもそのそばにきりっとしたきれいな女中がいるのを見ては、我にもなく胸をときめかずにはいられません。[169]

「不慮に心動きて、且思ふは、此の邊にかうよろしき人の住むらんを今まで聞えぬ事はあらじを、此は都人の三つ山詣せし次に、海愛らしくここに遊ぶらん。」[170]

薬屋の番頭である許宣と「都風たる事を好む」豊雄の描写を見ると、許宣は一見生真面目な男であるが、実は白娘子のことだけでなく、そばにいる女中、二人の女性を見ているし、また、豊雄は真女児の美貌に惹かれるとはいえ、田舎にはそのような美人がいるはずがなく、真女児の出身が憧れの「都人」であると想像している。要するに、許宣と豊雄は女主人公の美貌に魅了されながら、二人にそれぞれの下心があることがわかる。次は、許宣と豊雄は家に訪ねてくる際、白娘子と真女児は結婚のことを持ちかけようとする時である。

中国語原文：

那白娘子篩一盃酒，啓櫻桃口，露榴子牙，嬌滴滴聲音，帶着滿面春風，告道:[171]

---

[168]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.420
[169]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.153
[170]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)、前掲書、P.358-359
[171]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.423

白夫人は酒をついで許宣に差し、桜桃のような口をひらいて、柘榴のような歯並をあらわし、美しい声で、顔いっぱいに笑みを浮かべながら言いました。[172]

「真女子杯をあげて、豊雄にむかひ、花精妙桜が枝の水にうつろひなす面に、春吹く風をあやなし、梢たちぐく鶯の艶ひある聲していひ出るは、（下略）」[173]

上述からみると、共通点は男性に「お酒」をご馳走する間に気軽に結婚話を提起している場面である。しかし、次に二人の外見についての描写はかなり異なっている。

白娘子の容貌を果物の「桜桃」と「柘榴」に喩えており、両方とも小さな様を表し、伝統的な中国の美人像を描く時によく使用されている比喩である。また、真女子の容姿を「花精妙桜」と喩えることに対して、鵜月洋の解釈は、「桜が水に映るじるさまを顔の表情の喩にする古例は見当たらず、秋成の創出らしい」、「豊雄が女をこの世ならぬ存在のように感じた心を表現している[174]」と解釈している。

それに、二人の声と見映えについて、白娘子が「美しい声と顔にいっぱいに微笑」に対して、真女子が「春吹く風をあやなし、梢たちぐく鶯の艶ひある聲」である。白蛇伝の中国語原文「嬌滴滴聲音，帶着滿面春風」によれば、二人は男性を惹かれるために容姿端麗な女性を演じている様子であると述べている。主人公たちがやっと結婚によって二人が結ばれ、婚姻生活で夫婦仲よくに過ごす場面である。

中国語原文：

白娘子取出銀兩，央王主人備辦喜筵，二人拜堂結親。酒席散後，共入紗厨。白娘子放迷人聲態，顛鸞倒鳳，百媚千嬌，喜得許宣如遇神仙，只恨相見之晚。（中略）
自此日為始，夫妻二人如魚似水，終日在王主人家快樂昏迷纏定。[175]

白夫人は銀子を取り出して、亭主に祝宴の支度をたのみ、二人は天地を拝して結婚式をすませ、酒席果てた後、ともどもに洞房にはいりました。白夫人は人をとろけさせるような媚態の限りをつくして許宣をたのしませましたので、許宣は神女にで

[172]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、P.155-156
[173]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.362
[174]鵜月洋 1980『雨月物語評釈』角川書店、P.320－321
[175]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.429

もめぐり会ったような気持ちで、今さら相見ることの晩かりしを恨む始末です。(中略)この日以来、夫婦二人は魚と水のように片時も離れず、一日中この宿屋で楽しみにふけるのでした。[176]

ここに一日二日を過すままに、金忠夫婦が心をとりて、ひたすら歎きたのみける。其の志の篤きに愛て、豐雄をすすめてつひに婚儀をとりむすぶ。豊雄も日々に心とけて、もとより容姿よろしきを愛よろこび、千とせをかけて契るには、葛城や高間の山に夜々ごとにたつ雲も、初瀬の寺の暁の鐘に雨収まりて、只あひあふ事の遅きをなん恨みける。[177]

その後の展開を見ても、その差異は明らかに見える。妻が妖怪かどうかを疑い出した許宣は、護符やお祓いを持ち妻を試みようとする。「白娘子永鎮雷峰塔」では、白娘子は夫の許宣の前に自分が蛇であることを隠し続けている。その後、道士が許宣に妖怪が付きまとうことを看破して護符を渡した際にも、白娘子は許宣の前に護符を焼いても何も起こらないことだけでなく、許宣を連れて道士と衆人の前で符を飲んで何も起きないことで証明しようとする。

中国語原文：

「小乙哥和我許多時夫妻，尚兀自不把我親熱，却信別人言語，半夜三更燒符來鎮壓我!你且把符來燒看!」就奪過符來，一時燒化，全無動靜。[178]

あなたはあたしと長いあいだ夫婦ぐらしをしていながら、まだあたしを信用しないで、他人のいうことを真に受け、こんな真夜中に護符なんか焼いて、あたしを取り鎮めようとなさってるのね？さあ、そんならその符を焼いてごらんなさい！[179]

中国語原文：

那白娘子道:「眾人在此，你且書符來我喫看!」那先生書一道符，遞與白娘子。白娘子 接過符來，便吞下去。眾人都看，沒些動靜。[180]

---

[176]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.162-163
[177]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)前掲書、P.374-375
[178]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.430
[179]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.163
[180]馮夢龍編・魏同賢校、前掲書、P.430

「みなさんが見ておいでになる。さあ符を書くがいい、あたし飲んでみせるから」
道士は符を書いて白夫人に渡します。白夫人は符をうけとると、すぐ呑み下しました。人々はみな見ています。ところがなんのこともないのです。[181]

一方、豊雄は妖怪を恐れ、真女児と直接の対話を避ける。「父母太郎夫婦、此の恐ろしかりつる事を聞きて、いよよ豊雄が過ならぬを憐み、かつは妖怪の執ねきを恐れける。「かくて鰥にてあらするにこそ。妻むかへさせん」とてはかりける。[182]」そして、さほど時間が経たないうちに、もう一人の女性の富子と婚約する。その結果、真女児は豊雄が富子と契った二日目の夜に、富子の身に取り憑いて豊雄に次のように語る。

吾君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ山に盟ひし事を速くわすれ給ふとも、さるべき縁にしのあれば又もあひ見奉るものを、他し人のいふことをまことしくおぼして、強ちに遠ざけ給はんには、恨み報いなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峰より谷に潅ぎくださん。あたら御身をいたづらになし果て給ひそ [183]

妻の言葉を聞いた許宣は、疑念を持ちながらも結局妻の言葉を信じる。しかし、豊雄は妻の真女児と何も相談や確認もせず、ただ逃げ出して別の家に婿入りしようとする。許宣と直接対話することで自己主張をし、相手に訴える白娘子と比較して、そのような機会と言葉を奪われた真女児は、人間性を失い、妖蛇となる。そして、夢見がちで現実に向き合う勇気のない豊雄の性質は、真女児が蛇という妖異であることによって、自分を単なる被害者とすることをためらわない。一方、富子に取り憑くことでしか豊雄と対話できない真女児は、この「いまだかつてない戦慄的場面[184]」によって、自らを恐怖の対象としてしまうのである。さらに、白娘子と真女児が正体を暴かれる、もしくはもう弁解したくないところで、許宣と豊雄に対する発言や態度がどうなるのかは、先にみた通りである。

---

[181]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫（訳）、前掲書、P.164
[182]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.379
[183]中村幸彦・高田衛・中村博保（校注・訳）、前掲書、P.381
[184]高田衛 1980『雨月物語評解』有精堂、P.253

中国語原文：

只見白娘子叫許宣到房中道:「你好大膽，又叫甚麼捉蛇的來!你若和我好意，佛眼相看，若不好時，帶累一城百姓受苦，都死於非命!」許宣聽得，心寒膽戰，不敢則聲。[185]

すると白夫人が許宣を部屋に呼んで、あなたはひどい人ね、こんどは蛇とりの男なんか呼んで来て！あなたがあたしに好くして下されば、あたしもあなたを大事にします。でも好くして下さらなければ、この町全体の人々にまで巻き添えを食わせて、残らず非業に死を遂げさせてやりますからね！」許宣をそれを聞いて、胆をつぶし、声も立てられません。[186]

「古き契を忘れ給ひて、かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ、こなたよりまして悪くあれ」といふは、姿こそかはれ、正しく真女児が声なり。聞くにあさましう、身の毛もたちて恐しく、只あきれまどふを、女打ちゑみて、「吾君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ山に盟ひし事を速くわすれ給ふとも、さるべき縁にしのあれば又もあひ見奉るものを、他し人のいふことをまことしくおぼして、強に遠ざけ給はんには、恨み報ひなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峰より谷に灌ぎくださん。あたら御身をいたづらになし果給ひそ」といふに、只わななきにわななかれて、今やとらるべきここちに死に入りける。」[187]

以上、「白娘子永鎮雷峰塔」と「蛇性の婬」について考察してみた。「蛇性の婬」と「白娘子永鎮雷峰塔」では全体の構成、登場人物の設定など多くの要素に類似性を持つことは、これまでも指摘されてきた。

まず、出会いの場面から、積極的に相手と話をかけて、距離感を縮め、仲良くなるきっかけを作り上げるのは白娘子と豊雄であると見られる。白娘子が許宣の外見的魅力に惹かれることに対して、豊雄が真女子の社会的地位と身分に着眼したといえる。

「白娘子永鎮雷峰塔」と「蛇性の婬」において、許宣と豊雄の共通点は、家父長制度における家族責任を背負わず、家業を継ぐことが必要のない次男であることである。

---

[185]馮夢龍編・魏同賢校 1993《馮夢龍全集 警世通言》江蘇古籍出版社、P.443
[186]松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫(訳)、前掲書、P.177
[187]中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)1995『新編　日本古典文学全集 78・英草紙／西山物語／雨月物語／春雨物語』小学館、P.380-381

また、家族を頼りに生きるため、彼らの人格は物事に対して向き合う能力がなく、解決する必要もなく、何かあったら逃げるのか、または他人の助けを求めや家族に頼りがちな性格を有していることである。物語の展開をみると、許宣と豊雄はヒロインの正体がわかると、自力で解決することもなく、ヒロインとのコミュニケーションもなく、ひたすらに逃避する道を選ぶことになる。

その主な原因として、許宣と豊雄は家族に援助されることが習慣になり、家族や社会からの期待もなく、男性としての責任を負う必要もないという人格を育ててきたからだと言える。そこで、白娘子と真女児が蛇の正体を疑われるまたは暴かれそうになった際、二人が異なる対策をたてる。豊雄はこっそりと朝廷の采女である富子と結婚することで真女児との関係から逃げようとする。許宣は道士、蛇とりの戴先生と禅師の法海を依頼し、白娘子と対抗することを選んでいる。いわば、二人がヒロインたちとの対話やコミュニケーションを一切拒否していることであり、豊雄が真女児との結婚を認めないことに対して、許宣が妻を敵として扱い戦うことになる。

その結果、豊雄と許宣はヒロインたちとのコミュニケーション不全によって、真女児は恐ろしい執念深い妖蛇に変身し、白娘子は愛情を追い求めつつ雷峯塔に鎮圧されることで、二人とも人間社会から排除される対象になる。

第三章　２０世紀後半の文学作品における「蛇女」のイメージ

本章では、1970 年代、80 年代に発表された日本と中国の現代文学作品から、蛇との人間の男性との異類婚姻を扱った作品を取り上げ、「蛇」のイメージの共通点と相違点を探求していきたい。ここで、日本の作品では、中上健次の『蛇淫』(1976 年)と水上勉『白蛇抄』（1982 年）、中国語の作品では、ラウ・イーチョン(劉以鬯)の『蛇』（1978 年）を取り上げたい。

まず、『蛇淫』のタイトルは上田秋成の「蛇性の婬」から取られ、内容は「市原両親殺害事件」を題材にしている。

そして、劉以鬯の『蛇』は馮夢龍の「白娘子永鎮雷峰塔」の構成をベースにして、リメイクした現代の短編小説である。

さらに、水上勉の『白蛇抄』では、同じくヒロインは執着や淫欲などを特徴とする妖蛇のイメージがあると見なされている。

この三作における蛇女の表象と前章で論じた「蛇女」の表象や役割を比較しながら、人間の女性が蛇女として見なされる原因、及びそれぞれが作品に果たす役割、ヒロインと登場人物におけるコミュニケーション不全の問題などについて探求していきたい。

第１節　日中文芸における蛇女表象

まずは、日中における「蛇女」の表象を概観し、そのイメージについての先行研究の論点をまとめていきたい。

日本における「蛇になる女」または「蛇女との婚姻」の物語は、『今昔物語集』などの平安時代の説話集と、室町期に『道成寺縁起』として流布された安珍・清姫の伝説と、前章で取り上げた、1776 年に出版された上田秋成『雨月物語』の「蛇性の婬」など

において、よく知られている。

高田衛は蛇にこだわる理由として「神話からはじまって日本の過去の文学は、蛇をたえず異世界的な何かの象徴としてきた。例えば、水神、山神、邪神、剣、死、不死、性とエロス、邪淫、魔性、執念、欲望、吉凶の兆、犠牲、雷、地底、大地、豊饒、悪意、宿命、等々…。蛇はそのいぶせき姿で常にいま掲げた諸項目の幾つかを象徴する一種の神話的装置であった。[188]」と述べている。

門池真菜は、「日本の文学作品からみる蛇に対するイメージの変化」について、日本古来の神道思想に基づき蛇が神とされ、中世以降は仏教思想の影響によって蛇は忌まわしい動物となり、執念や復讐といったイメージが多くみられた。また、明治以降ではキリストによる影響で蛇は新しい悪魔的な発想を付与された[189]と指摘している。

堤邦彦によると、「蛇になる女」というのは人間の執着心、愛欲、嫉妬などの象徴として意味付ける文化記号である。それらの象徴を女性特有の罪障と説く倫理思想となり、人の心の内奥を蛇身の因縁に戒める説教話材である[190]と解釈している。若桑みどりは、大地母神の変容とともに、蛇が大地の豊饒の象徴であり、たえず抜け変わる殻の連想による死と再生の象徴から旧約におけるエバの誘惑者サタンの象徴となり、男根の連想によって女性の淫乱な性を象徴するものになったのである[191]と論じている。

一方、上田秋成の「蛇性の婬」にも大きな影響を及ぼした中国の白話小説が、「白娘子永鎮雷峰塔」（白夫人がとこしえに雷峰塔に鎮められたこと）である。唐代の谷神子撰『李黄』にもあらわれる白蛇伝説は、美女に化けた白蛇が男を虜にし、破滅させる、という筋を持つものだった。この伝説が、明代の『西湖三塔記』などを経て、「白娘子永鎮雷峰塔」では白蛇の化身「白娘子」が、人間性を持ちながら自らの幸せと愛情を追い求めて、魅力的な女性像を描く。 この作品の登場以来、「白娘子」は白蛇のイメージとし

---

[188]高田衛 1999『女と蛇ー表徴の江戸文学誌』筑摩書房、P.68
[189]門池真菜 2014「文学作品からみる蛇に対するイメージの変化―他宗教からの影響」『英米文學英語學論集』第 3 号、3 月、関西大学英米文学英語学会、P.65-100
[190]堤邦彦 2006『女人蛇体　偏愛の江戸怪談史』角川学芸、P.16-24
[191]若桑みどり 2000『象徴としての女性像　ジェンダー史から見た家父長制度における女性表象』筑摩書房、P.63

て定着し、その後の小説、弾詞と演劇は「白娘子永鎮雷峰塔」をもとにして改作するものになる。方成培撰の戯曲『雷峰塔伝奇』（1771 年）が『白娘子永鎮雷峰塔』を基に、許宣と白娘子の息子である許士麟が登場し、白娘子に良妻賢母像のイメージが付け加えたことも重要であろう。

屠柳青は「中日古典文学における蛇イメージの比較研究』で、中日の蛇像の相違点について、中国の蛇像は吉と凶という二元的な特徴が顕著に現れたことに比べ、日本の蛇は本体のまま姿を見せ、人を侵害していることを指摘し、中国の蛇は勧善懲悪の法の下であり、日本の蛇は仏罰の象徴とされる[192]と述べている。

要するに、蛇女の表象からみると、初めから日中とも蛇信仰による蛇神があり、それには神霊への畏敬と仏教の信仰が含まれていた。しかし、その後、日本は仏教の影響による蛇女は執念と復讐のイメージを付与され、のちほどキリスト教による蛇の形を男根と連想され、女性の淫乱の象徴であると解釈されるようになったといえるだろう。

また、孔凌霄は「中日文学中的蛇女形象」（中日文学における蛇女のイメージ）という論文において、次のような指摘をしている。

> 中国文学的蛇女形象，蛇神阶段、蛇妖阶段、民众心目中的女性形象三个阶段。蛇女形象的演变与中国古代女性地位息息相关。日本的蛇女形象只有蛇神和蛇妖两阶段。蛇女普遍表现出强烈的性欲和怨魂的报復，以悲剧结尾。日本封建社会，缺乏蛇女解放的过程，因此蛇女发展仅停留在第二个阶段。[193]

筆者訳：中国文学において蛇女とは蛇神から、蛇妖に、そして人々が求めている理想の女性像になるという三つの発展の段階である。蛇女イメージの変化は中国古代の女性地位にかなり関連している。日本の蛇女イメージはただ蛇神と蛇妖という二段階がある。蛇女のイメージは大抵強い性欲と怨念を抱く魂からの復讐であり、結局は悲劇になる。日本の封建社会では蛇女を解放する過程を欠いているので、蛇女の進化は第二段階にとどまる。

---

[192]屠柳青 2016『中日古典文学における蛇イメージの比較研究－唐代小説と平安説話を中心に―』河南师范大学日语语言文学专业修士論文、 P.30－33

[193]孔凌霄 2006『中日文学中的蛇女形象』对外经济贸易大学日语语言文学专业硕士论文、P.45-46

中国では「白娘子」のような蛇妖に母親の役割を加えることにより、「理想的な良妻賢母という女性像」が作られたといえるが、日本の作品では、蛇女が子を産むことはない。その原因として、杜芳琴によれば、中国では伝統的産育文化の核心は生殖崇拝である。また、中国の産育文化を母系時代(仰韶晩期―紀元前三千年ころ―まで続いた)、父系時代(仰韶晩期から商代まで)、父権・夫権時代(周代以降清末まで)という三時期に区分される[194]と述べている。

そこで、馮夢竜の『白娘子永鎮雷峰塔』の背景は南宋の紹興年間から考えると、宋代が父権と夫権時代の境に属し、女性が男性の支配に従い、男尊女卑の観念、男児待望の念願が当時産育文化の特徴と見られる。この構造が、本章で取り上げるラウ・イーチョン(劉以鬯)の『蛇』にも受け継がれていることは興味深い。

各作品の概要は以下のとおりである。

『蛇淫』

中上健次の『蛇淫』のタイトルは上田秋成の『雨月物語』の「蛇性の婬」から取られたもので、内容は 1974 年の「市原両親殺害事件」という殺人事件を題材にしている。若い女ケイは、主人公順の幼なじみで、彼のスナックのウエイトレスをしている。順のスナックは親が出資している。ケイは、父親が亡くなり、母親はアルコール依存症なので、中学を出てからパチンコ屋に住んでいた。

ケイと再会した順は、彼女を家に連れて帰り、同居を始めるが、二人は昼夜性交し、放縦な生活を過ごすため、順の母はケイのことを嫌う。ある夜、順は両親とケイの聴覚障害のことで喧嘩になり、咄嗟に灰皿を持って二人を殴りつけ、両親を殺してしまう。その後、ケイと一緒に両親の死体を浴槽に入れた順は、家に火をつけ、二人で大阪の天王寺に逃げ出すことを考える。

---

[194]杜芳琴（田畑佐和子訳）1994「産育文化の歴史的考察」秋山洋子・江上幸子・田畑佐和子・前山加奈子訳 1998『中国の女性学―平等幻想に挑む―』勁草書房、P.152－154

『白蛇抄』

水上勉の『白蛇抄』は、昭和初期の「京都府与謝郡吉津村の中本山華蔵寺」において、住職の懐海(48 才)、息子の承昌 (20 才)、後妻のうた女(37 才)とまつの(14 才)の四人をめぐる出来事や事件が、手伝いとして寺に来たまつのの目を通して描かれる物語である。住職が亡くなった後も寺に残ったうた女は、寺を切り盛りし、宇田守峯という画家を逗留させるが、新住職の承昌が妊娠したうた女を殺害してから自殺する、という凄惨な無理心中事件が起こる。事件後、まつのは手伝いの老女さわから話を聞き、「白蛇の魔性」を持ったうた女に思いを馳せる。

『蛇』

香港の「文壇の父」であるラウ・イーチョン(劉以鬯)は 1978 年に『蛇』という短編小説を創作し、白蛇伝を元にする改作の物語であり、物語の中で神話の部分を取り除き、現代の物語にリメイクした。『蛇』では白蛇伝と同じく許仙、白素貞、女中、法海という四人が登場しているが、それぞれの人物像は『白娘子永鎮雷峰塔』とかなり異なっている。『蛇』において、許仙は蛇に対するトラウマがある男性、白素貞は寡婦や蛇妖ではなく普通の女性で、女中の名前さえ論じられず、法海は偽称とする存在である。また、物語の背景は記されず、白蛇伝と同じように「西湖の出会い」場面がありながら、「白蛇伝」の先入観に対する人性への批判や戯謔を含んだ風刺小説である。

次に、各作における作品背景と舞台及び作者の生い立ちをまとめていきたい。

中上健次の『蛇淫』は昭和五十年(1975 年)9 月 1 日『文藝』に発表された。『蛇淫』のタイトルは上田秋成の『雨月物語』の「蛇性の婬」から取られたもので、内容は 1974 年の「市原市両親殺人事件」という殺人事件を題材にしている。また、長谷川和彦監督のデビュー作『青春の殺人者』(1976) の原作は『蛇淫』である。

中上健次は和歌山県新宮市で父の鈴木留造と母の木下千里との間に私生児として生まれた。八歳の時、母は末子の健次を連れて、中上七郎と同居し、中学校入学をきっかけ

に母親が再婚して、中上家の戸籍に入り、姓は木下姓から中上姓となった。当時十二歳年上の異父兄の木下行平が首吊り自殺するという事件が起こり、中上に大きな衝撃を与えた。中上の長女である中上紀によると、その事件は中上健次に「重い十字架を背負わされる」と以下のようなエピソードがあると述べている。

> 健次とちさとが暮らす家に、酒によっては、しばしば刃物を手に、「子供を捨てた、裏切者」と脅しにやって来た兄。その突然の縊死によって、健次は重い十字架を背負わされる。兄の命日の三月三日は、我が家にとっては女の子の節句である以上に特別な日であった。私の母は、今でもその日になると伯父のための花を買って来る。[195]

1965 年、大学受験を名目に上京し、親から仕送りを受け、『文藝首都』に入会した。1970 年、『文藝首都』で知り合った恋人の山口かすみ(のちの小説家・紀和鏡)が妊娠のため、中上がかすみに「結婚する、産んでほしい」[196]と言い、すぐ仕事を探しに出る。中上紀は父親が「二四になったら、俺は死ぬと思っていたんだよ」、「二十四歳、兄の死んだ歳になっていた。この新しい命によって、自分は死なずに済む、生きられると思った」[197]などの発言から、中上健次は兄の死亡の影響で命を大切にせず、子供ができたことがきっかけで暗い人生に希望の光を見いだし、空港で飛行機の水洗い、貨物の積み卸ろしなどをして家計を支えながら執筆を続けた。また、妻の紀和鏡が「健次の文学志向は、高校時代に決定づけられたと言っていいだろう。(中略)母の長男(健次の異父兄)が、健次の小学校時代に縊死しているからだ。本などを読むと妙なことばかり考えてノイローゼになる、というのが、母親の持論だったと、若き日の健次は苦笑交じりに言っていった」[198]と語っている。1973 年以降、『十九歳の地図』『鳩どもの家』『浄徳寺ツアー』が続けて芥川賞候補となり、1976 年『岬』で第 74 回芥川賞を受賞し、「蛇淫」も同

---

[195]中上紀・市川真人 2016「中上紀が「中上健次」略年譜を解説する」「[生誕 70 年記念特集]中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号、P.13
[196]中上紀・市川真人、前掲書、P.13
[197]中上紀・市川真人、前掲書、P.13-14
[198]紀和鏡 2016「中上健次という回転体」「[生誕 70 年記念特集]中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号、P.44

じ年で刊行した作品である。1979 年からアメリカに半年滞在し、三重県熊野市に転居、連作「熊野集」を連載し始める。1981 年新聞記事で被差別地域出身を公式表明し、再び東京に暮らし、よく海外に行くようになる。1992 年ハワイ滞在中に体調を崩し日本に帰国し、癌と判明した。同年、46 歳の誕生日の 10 日後、腎臓癌の悪化で早逝した。

『蛇淫』の先行研究では、「蛇性の婬」と『蛇淫』について、「似ているのはただ、心の構造という位相から見られたときの男女の関係だけである[199]」、「順の〈親殺し〉は豊雄のような父母のもとへの帰順ではなく、「樊噲」のような清々しい親殺しに帰結する[200]」といった指摘がこれまでになされている。高田衛は「蛇淫」で逆転する場面といえば、蛇の化身である女は排除されず、かえって順が両親を殺害するに至ったというところであると次のように述べている。

> 「蛇性の婬」は蛇の化身をかくも苦心して鎮める物語なのであった。（中略）
> 「蛇淫」はそこを逆転している。豊雄に相当する余計者、はみだし者は、ここでは順という不良上りである。この順が殺したのは、蛇の化身かもしれないケイではなかった。その反対で、ケイの排除をはかる順の親たちなのである。[201]

また、四方田犬彦は、「蛇淫」における女主人公のケイが真女児の転生でありながら、男を滅ぼす「邪悪な意志」として描写されると指摘している。

> 男の母親から「蛇や蛇、あの女は蛇。淫乱」と罵倒される女主人公はあきらかに真女児の転生した姿であり、彼女に取り憑かれて身を滅ぼす男は豊雄のそれである。作者は抑圧された路地の地母神的なるものが携えている「邪悪な意志」の現れとして、この女主人公を造型している。[202]

---

[199]中上健次 1996『蛇淫』講談社、P.246
[200]旦部辰徳 2018「中上健次「蛇淫」論―「事実の肯定」をめぐって―」『あいだ/生成=Between/becoming』第 8 巻、あいだ哲学会（京都大学大学院人間・環境学研究科武田宙也研究室）、P.30
[201]高田衛 1999『女と蛇―表徴の江戸文学誌』筑摩書房、P.22
[202]四方田犬彦 1996『貴種と転生・中上健次』新潮社、P.294

それに、嶋田彩司も同じくケイが「邪悪な意志」として扱われ、「蛇淫」では順がその「男性を滅ぼす」女性と一緒に逃げることは「蛇性の婬」との最大の相違点であると指摘している。

> ケイは、一個の邪悪な意志である。豊雄が富子を殺してしまったように、順は両親を殺害する。ただ、「蛇性の婬」と「蛇淫」のちがいは、そのさき、順がケイをともなって天王寺へとむかうところである。（中略）たしかに順はケイから逃げることなく、ケイといっしょに逃げだすのだ。これこそが、「蛇淫」の「蛇性の婬」に対する批判であった。[203]

『蛇淫』をもとにした映画『青春の殺人者』で主人公を演じた俳優の水谷豊は主人公が親を殺した原因について、順は器用な男ではないからこそ、親が自分から恋人を取り上げることで親を殺害する犯行に及ぶと次のように推測している。

> 自分の中でたどり着いた結論としては、おそらく、彼が器用な人間だったら、“精神的に殺して”済ませただろうと思うんですね。でも、器用な男じゃなかった。親と言うのは、言うことを聞かせるときに子どもに何かを与えてくれますよね。でも、事情が変わると、今度は、子どもから何かを取り上げようとする。（中略）親から与えられたスナックを経営する主人公の「順」は、恋人のケイ子と別れるように親から強要される。モノを与える代わりに人を取り上げようとする親に対して、「順」は凶行に及ぶのだ。映画は、原作のこの設定を忠実に踏襲している。[204]

李禹煥が中上作品では韓国の風土や作家から影響され、「彼の小説によく登場する蛇の素材感や巫女のイメージ、底の抜けたような実直な語りになど、韓国の作家のそれに似たところが現れるのは、決して偶然とはいえまい」[205]と述べている。

---

[203]嶋田彩司 2002「典拠と批評 ―「蛇性の淫」と中上健次」『国文学研究』第 136 集、早稲田大学国文学会、P.38

[204]水谷豊 2016「回想―『青春の殺人者』中上作品の主人公を演じて」「[生誕 70 年記念特集] 中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号、P.28

[205]柄谷行人・他 1996「中上健次さんのこと」『群像　日本の作家 24　中上健次』小学館、P.216

永島貴吉が中上健次の初期作品において大江健三郎の影響により、「血縁、母系、父系、路地、自然、異界、物語、定型、反復、差異といった言葉がキー・ワードとして多く用いられている」[206]と上原善広が「中上作品の大きな特徴の一つは、複雑な家族関係を細かいところまでしっかりと描いていることです」[207]と論じている。

上述の論点をまとめると、中上作品の特徴は自らの経験を元に創作された物語が多く、「被差別」、「路地」、「死者」などのテーマが含まれることであると言える。その原因として、中上健次は被差別部落の和歌山県新宮市出身であり、自らの生まれた部落を「路地」と名付け、異父兄の木下行平が縊死したことで衝撃を受けるなどの物事により、実際人生の体験が作品の想像力の源となったと言えるだろう。そこで、『蛇淫』が始めて「路地」を舞台とした作品[208]である。

『蛇淫』では主人公の順が親から恋人を取り上げられることに対して、順は恋人と一緒に駆け落ちや心中を考えず、「親殺し」という選択肢を選んでしまう。「蛇の化身」のケイは順から排除されず、逆に順がその「邪悪な意志」として現れる女性の後ろに付いていくと言える。そのため、人間の男と蛇とされる女との「コミュニケーション」という点からもう一度この物語を読み直してみると、また違ったものがみえてくるのではないだろうか。

水上勉の『白蛇抄』は、昭和初期の「京都府与謝郡吉津村の中本山華蔵寺」において、住職の懐海(48 才)、息子の承昌 (20 才)、後妻のうた女(37 才)とまつの(14 才)の四人をめぐる出来事や事件が、手伝いとして寺に来たまつのの目を通して描かれる物語である。

---

[206]柄谷行人・他、前掲書、P.300

[207]上原善広 2016「中上健次と「路地」」「[生誕 70 年記念特集]中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号、P. 38

[208]中上紀・市川真人 2016「中上紀が「中上健次」略年譜を解説する」「[生誕 70 年記念特集]中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号、P.14

当方は京都府与謝郡吉津村にございます臨済宗燈全寺派別格地中本山華蔵寺と申します、鎌倉期に開創されましたもと天台派の寺が改宗した寺でございます。[209]

ロスアンゼルスオリンピックの翌々年のことだから、昭和九年の六月末である。鵜藤まつのが華蔵寺を去って一月後だ。[210]

いわば、『白蛇抄』は京都府の華蔵寺で起こった出来事であり、ロスアンゼルスオリンピックは 1932 年で、昭和九年は 1934 年の頃を描く物語である。『白蛇抄』は 1979 年 5 月から 1980 年 4 月まで『すばる』で連載し、1982 年に集英社より刊行されている。1983 年に伊藤俊也監督が『白蛇抄』を映画化し、公開されている。原作は昭和初期でありながら、映画化された『白蛇抄』の舞台は現代になっている。伊藤監督によると、映画世界において日常的な世界と非日常的世界の接点が一番興味深いところであり、観客を異空間か異次元に連れ去ることが狙いであるため、「現代風俗の中で、その裏側にある空間を超えたら、全く日常とは別世界という意味ではなくて一種の映画的な世界が開けるという、そういう構造として現代に設定する」[211]と述べている。

また、水上勉の作品ではよく「母性回帰願望」、「母恋い」などのテーマ及び悲劇意識に含まれていると指摘している。その原因は水上が福井県の五人兄弟の次男として生まれ、貧困のため 9 歳で京都の禅寺に小僧として預けられ、少年時代の禅寺での修行体験を元にした『雁の寺』で直木賞を受賞した。

黒田賢治は水上勉文学における「怨念」と「母性回帰願望」という問題に対して、「母に対する愛と憎という二律背反の解決策として、女性への残酷という代償観念である」、「作中の彼女達の何れもが自己に起因しない不幸災難を理不尽に投げ与えられ苛まれた挙句、自殺或いは他殺により落命すること」というような哀れで非道な結末とは

[209]水上勉 1995『新編水上勉全集　第六巻』中央公論社、P.368
[210]水上勉、前掲書、P.368
[211]野村正昭 1983「夢、幻のごとく踏み迷える世界を―伊藤俊也監督インタビュー」『キネマ旬報』第 873 号、キネマ旬報社、P.57

作者における母への宿怨への代償という形で、怨念の浄化措置としての機能を果たす[212]と解釈している。

杨柳岸は、水上勉の女性観の特徴について、「受身の愛に生きる哀しさ」にほかならない。主に「運命への絶望」、「無償な犠牲」と「薄い独立意識」という三つの特徴がある[213]とまとめている。

上述からみると、『白蛇抄』においても、同じく「母性回帰願望」、「母恋い」という表現があり、結末では母親としての役割を果たす女性が殺されるというパータンがある。

しかし、水上は『白蛇抄』の内容について、「すべて嘘である。いくら事実がありそうに思われる人は、与謝半島や宮津湾沿いの村々を訪ねてみるがいい。華蔵寺という禅寺もないし、京都に燈全寺という本山もない。登場人物もむろん、私の創作であって、モデルなる人もいない。」と強調しながら、『白蛇抄』の創作では「野道でナタを拾った」ことで「作中女主人公が白蛇の滝前でナタを拾って帰り、そのナタで、寺の息子に殺される場面はすべて空想で、芝居でも書く思いがしたが、ナタだけは事実がちからになった[214]」と述べている。いわば、水上勉は『白蛇抄』がすべて創作内容であり、偽りの物語と称したとはいえ、『白蛇抄』では「怨念」や「母性回帰願望」という要素が含まれている。

ラウ・イーチョン(劉以鬯)は香港で「文壇の父」と称する小説家、本名は劉同繹、1918 年 12 月 7 日に上海で生まれた。1941 年に上海のニューヨークのセント・ジョンズ大学を卒業後、日中戦争下に重慶でジャーナリズムへの道を決意する。1930 年代から 50 年代にかけて、中国から香港に移住する作家は「南来作家」と呼ばれ、香港で自由な執筆活動を行い、香港の文学発展に大きく影響した。ラウは 1948 年に香港に移住した「南

---

[212]黒田賢治 1981「水上勉論―水上勉における母性回帰願望とその代償機能としての異性観」『日本文学誌要』第 24 号、2 月、法政大学、P.54－57

[213]杨柳岸 2015『水上勉の女性観についての考察―瀋陽の月を中心に―』大连外国语大学大学院日本語言語文学専攻修士論文、P.38

[214]水上勉、前掲書、P.454

来作家」の一人である。ラウは雑誌『香港文学』の編集長、香港作家連合会の会長、香港文学研究会の会長などを歴任した。2011 年に香港特別行政区政府による勲章「銅紫荊星章」(The Bronze Bauhinia Star) と香港公開大学に名誉文学博士号を授与した。2015 年に香港芸術発展局より 2014 年の香港芸術発展賞の終身成就賞を受賞した。2018 年 6 月 8 日、99 歳で亡くなった。主な作品は『酒徒』、『寺内』、『一九九七』、『對倒』、『天堂與地獄』など 40 作品ほどある。香港のウォンカーウァイ（王家衛）監督の映画の「花様年華」と「2046」の原作はラウ・イーチョンの《對倒》と《酒徒》という著作である。また、ラウは「物語新編」という分類で古代典拠、歴史人物と神話伝説などを改作し、『蛇』、『追魚』、『寺内』、『蜘蛛精』などの作品がある。

『蛇』は白蛇伝の改作とはいえ、ラウは物語の中で神話の部分を取り除き、現代の物語にリメイクした。『蛇』は 9 つの物語で構成する短編小説である。しかも、その 9 篇中 3、4、6、9 篇は 3 行以内で、2、5、8 は一ページくらいの内容である。ラウが僅か何行の内容で物語を語る理由は白蛇伝というのは概ね許仙と白蛇の化身・白娘子との恋の物語であることがよく人々に知られているからだろう。

刘雪梅は劉以鬯の『蛇』を「間テクスト性」〈間テクスト性(アンテルテクスチュアリテ)〉で解釈をすべきであると次のように論じている。

> 《蛇》实际上是借用了《白蛇传》中的部分故事情节，但是在表现其真正的主题情节或人物安排却是完全不同。两篇小说中的女主人中虽然都是善良、妍媚、体贴、细心的白娘子，但是前者是千年蛇妖贪恋人间爱情幻化成人的异物，而后者却是普普通通的弱女子，是真正的人。(中略）其次，男主人公的经历和个性也有所不同，《蛇》中的许仙是个颠覆版的许仙，他自私、多疑，尤其是幼年时的一次经历，让他产生了终生的心理障碍。[215]
>
> 筆者訳：
> 実際、『蛇』において物語の部分的なプロットは『白蛇伝』の筋を土台とするが、本体の主題やプロット及び登場人物の配置などの内容がかなり違う。両篇の小説

[215]刘雪梅「刘以鬯小说《蛇》的“互文性”解读」,《语文教学通讯》第 682 卷第 5 期，2012 年 5 月,P.95-96

では女主人公も善良、嬌艶、思いやり、繊細な白娘子であるとはいえ、前者は千年の蛇妖が人間への愛情に執念深く異類に変身されるもので、後者は普通の弱々しい女性で本物の人間である。(中略)次に、男主人公の経歴と性格も異なる。『蛇』の中の許仙は『白蛇伝』と正反対バージョンの許仙であり、利己的にかつ疑り深い性格で、特に幼い頃の経歴による彼が生涯的な心理障害となって残っている。

ここでは、〈間テクスチュアリテ性〉ないし〈相互テクスト性〉とはフランスのポスト構造主義者のジュリア・クリステヴァ(Julia Kristeva)が作り出した言葉であり、「もろもろのテクストの間の相互置換の関係性という意味を示し、クリステヴァ独特のテクスト概念[216]」である。

また、罗宗宇と朱花蕾は同じく『蛇』における間テクスト性の論点を言及し、小説の間テクスト性を次のように三つのところから取り上げる。

《蛇》与《白蛇传》成互文，两者的文本互涉主要体现在三个方面：
其一是小说的题目； 其二是小说的人物安排。《蛇》中的主要人物仍沿用《白蛇传》里白素贞、许仙、法海的名字。其三则是小说的故事情节和框架。[217]

筆者訳：
『蛇』と『白蛇伝』における「間テクスト性」、両者のテクスト間相互関連性は主に三つの方面から反映される。その一は小説のテーマであり、その二は登場人物の設定である。『蛇』の中で主要人物は『白蛇伝』の白娘子、許仙、法海という名前をそのまま用いている。その三は小説のプロットと基本構造である。

いわば、『蛇』の内容は『白蛇伝』と「間テクスト性」があると見られ、特に構成、登場人物及び人物の名前で『白蛇伝』と関わりがある。しかし、この二作における最も異なっているところは『白蛇伝』ではヒロインが蛇から人間の姿に変え、『蛇』ではヒロインの夫が妻を人間として承認していないことである。『蛇』の白素貞は夫の許仙が蛇に対

[216]西川直子 1999『クリステヴァ―ポリロゴス 現代思想の冒険者たち　第 30 巻』講談社、P.40
[217]罗宗宇,朱花蕾「试论民间故事的现代建构——以刘以鬯的《蛇》为例」,中国高校人文社会科学信息网 http://www.sinoss.net ,2017-11-17, P.1-6

する恐怖症があるため、人類に完璧な妻などいるはずがないと思い込んで、妻を人間として認められない。また、もうひとつ違う点は、白素貞が妊娠することで母親の役割を与えられるところである。

なお、『蛇』は香港の作家が創作する小説であるため、そこには当時政治的寓意と香港アイデンティティの論点が含まれるとされ、次のような指摘がある。

「《蛇》发表于 1978 年 8 月，许仙挥之不去的焦虑紧张，不相信真挚的爱情，正是那个时代给港人留下的精神烙印。」[218]

筆者訳：
『蛇』は 1978 年に発行され、許仙が不安と緊張の感覚が頭から離れず、真摯な愛情を信じられないという状態はその時代が香港人にトラウマを残すことである。」

それに、劉の歴史小説ではリメイクする翻案作品と詩的な表現という二つの傾向があり、『蛇』の許仙が真実より嘘を信じることはフロイトの心理性的発達理論に影響され、劣等コンプレックスと過去のトラウマを持ち、他者への不信感につながると論じている。

至于重述历史文本，刘以鬯的重述有两个典型倾向:第一个倾向是故事的重新审视，即故事新编。他以现代人性作为新作的基本观念，弗洛依德的性意识理论对他的新解影响甚深。在《蛇》中白素贞不再是蛇精，而是一个世间少有的善良、美丽、聪慧的女子，许仙的自惭形秽与幼时的蛇恐惧症使他不能相信自己的妻子，而相信谎言。(中略)他的第二个倾向是故事诗化。与新编故事相关连，刘以鬯注重故事的诗意传承。[219]

筆者訳：劉以鬯が歴史小説の作り替えにおいて、二つ典型的な傾向があると見られる。一つ目の傾向は物語を改めて念入りに見ることであり、いわゆる翻案作品である。彼のリメイクした作品は現代の人性を基本観念とした上で、フロイトの心理性的発達理論になり影響を受ける。『蛇』では白素貞はもはや妖蛇ではなく、世間でめったに見られない優しくて綺麗で賢い女性として登場し、許仙の自

[218]刘雪梅 2012「刘以鬯小说《蛇》的“互文性”解读」《语文教学通讯》第 682 卷第 5 期、5 月、P.96
[219]陈树湘 2004「刘以鬯小说简论」《淮阴工学院学报》第 13 卷第 2 期、4 月、P.47

らに劣等コンプレックスと幼い頃からの蛇恐怖症のため、彼が自分の女房を信じることができず、嘘話を信じる。（中略）二つ目の傾向とは物語を詩的に表現し、リメイクした物語と関わりがあり、劉以鬯が物語の詩的な伝承を重視している。

また、池上貞子は「香港文学では中国大陸の文学作品も日本映画も一貫して触れることができていたうえに、劉以鬯（りゅういちょう）のようにこれらを具現する文学の先達的存在があった。」と述べながら、劉の「詩的な文体」の特徴を比喩、イマージュ性、音声という三点を挙げる。「いったいに劉以鬯の小説を読むと、一つ一つの文体には耳に心地よいリズムがあり、伝統的な意味でも詩的ある。また彼のいくつかの小説には視覚的にも詩の技巧が用いられている[220]」と指摘している。

要するに、劉以鬯は『蛇』という作品によって、当時の時代背景の香港作家として、政治的寓意と香港アイデンティティ問題、登場人物の造形によって描き出す劣等コンプレックスと過去のトラウマを通して、作者の想いを作品に寄せると言えるだろう。

第 2 節　蛇女の表象の意味と役割

『蛇淫』、『白蛇抄』と『蛇』における蛇女の表象と役割を理解するために、それぞれの作品に描き出す蛇の表象を比較したい。次は、『蛇淫』のケイと『白蛇抄』のうた女における蛇女のイメージと登場人物の関係性について比べてみたい。『蛇淫』と『白蛇抄』では、蛇女は執着、淫欲、妖気などの象徴であり、妖蛇のイメージを含んでいる。

『蛇淫』と『白蛇抄』において、彼女たちは不憫な状況で生活し、周囲から同情もされる。しかし、その後、ほかの登場人物から女性への態度及び女主人公自身の性格による異なる結末につながる。

[220]池上貞子 2010「劉以鬯と也斯--香港文学の継承・発展をめぐって」『跡見学園女子大学文学部紀要』44 号、跡見学園女子大学、P.15-26

2.1 『蛇淫』のケイ--『蛇性の婬』から受け継ぐコミュニケーション不全

『蛇淫』に登場する若い女ケイは、順の幼なじみで、彼のスナックのウエイトレスをしている。順のスナックは親が出資している。ケイの父親はなくなり、母親はアル中なので、中学を出てからパチンコ屋に住んでいる。ケイと再会した順は、彼女にスナックの仕事とアパートまで借りてあげることを次のように述べている。

> ウエイトレスに、彼は、幼なじみを、頼んだ。それが、この女だった。女とは、環境も境遇も、まるっきり違ってしまっていた。女は、まだ昔の、駅裏の、どぶがにおいたてる路地に、住んでいた。靴職人の父親は死んでいた。母親はアル中だった。これもアル中の男を、引っ張り込んでいた。女は、パチンコ屋に住み込んでいた。女をくどき落して、スナックのウエイトレスに呼び、女がアパートに移る時、彼は女について、その家まで行った。[221]

> 女にアパートを借りてやるのは当然だ、と彼は思った。母親が男と一緒に暮らしている家を出て、パチンコ屋に住み込んでいることだし、女一人で敷金、礼金、周旋屋の謝礼金を用意できるはずがなかった。すべて彼が出した。いや、彼のスナック「キャサリン」が出した。女は、スナック「キャサリン」で働いた。[222]

上述の内容によって、順はケイを惨めな状態から救い出し、仕事を与えるだけでなく、住む場所まで提供してあげることを見ると、順はまるでケイにとって救済者のような存在であり、ケイは自然に順の言いなりになりやすい女性になる。二人は雇用関係から始まり、順の父母に二人の関係を疑われ、次第に恋愛感情が芽生えていくことになってしまう。最初、ケイは順の母親に対して、順との関係を否認し続けている。昔は兄妹みたいに遊んでいたとしか認められないことを次のように表す。

> 「いややなあ、わたし順ちゃんと恋人でもなんでもないよ。昔から順ちゃんと兄妹みたいに遊んできたけど。ちがう、ちがう」女はわらう。「順ちゃんと中学もちがうし、わたしすぐ大阪へ行ってたし、このあいだやもん、順ちゃんにばったり会うて、このお店手伝てくれんかと言われたの」[223]

---

[221]中上健次 1995『中上健次全集 2』集英社、P.151
[222]中上健次、前掲書、P.152
[223]中上健次、前掲書、P.154

それに、ケイは順の親に誤解されたため順の前に泣き続けることので、順はケイとの関係を進展させる原因は親のせいであると考えている。

> 父と母が、誤解していたことは確かだった。女とは、いままでもそんなことはなかったし、いまもそんな関係ではなかった。女はカウンターにしゃがみ、泣いた。その女を抱きあげ、後ろから抱きしめたのだった。店の照明を消した。自分が昂っているのがわかった。女との関係は、だから父と母にあおられたようなものだった。(中略)その夜アパートの女の部屋に泊まり込んだ。[224]

しかし、順がケイの部屋に泊まり込んでいる時に、ケイが普段と違うような様子に気付いて、ケイもあっさりと順のことが好きと答えた。

> 店にいる時より、急に変わって、女っぽくなった気がした。女は、素裸のまま、わらった。店で泣いたことが嘘のようだった。「あんたのお母ちゃんて、やっぱし、勘がええなあ。わたしがあんたに惚れとるの、ちゃんと見抜いてたんやな」女は言った。[225]

要するに、ケイは最初から順の親の前では順との関係を否認し、幼なじみでウエイトレスとしての役割しか認めない。ところが、順と体の関係になると、すぐ順のことが好きであると言い出した。まるでケイは順の親の前で芝居をしているような感じである。

その後の展開では、ケイは完全に順を魅了し、次の「熱をあげる」、「はじめて女を知ったような気がした」からみれば、順にとってケイは今までに出会ったことがなく特別な存在であり、「男性を滅ぼす」方向に導く女性とも言えるのではないだろうか。

> 「彼は、女にほれた。自分でも熱をあげる自分を不思議に思うくらいだった。」[226]

> いままで女を知らないわけではなかったのに、二十七のこの齢にしてはじめて女を知ったような気がした。[227]

---

[224]中上健次、前掲書、P.155
[225]中上健次、前掲書、P.155
[226]中上健次、前掲書、P.156
[227]中上健次、前掲書、P.157

いわば、『蛇淫』において、ケイは順の幼なじみ、スナックの店員、彼女というように役割が変化し続けている。ケイの役割変化はまさに蛇の脱皮のように進化していくと言えるだろう。

『蛇淫』のケイは彼氏の順と順の両親の前で、たとえ順の母親が順とケイが交際することで意見も持つ時も、二人の交際を阻止しようとする時も、いつも従順な態度のように見える。

「あの女、悪意を持っとんのよ、うまい具合に行って、貧乏から這い上ったわたしらにヤキモチ焼いとんのよ。おまえは、ひっかかって、とりつかれてるんや」母は彼の顔をみつめたまま、言った。注文をきいていた女が、母にそうなじられているもの知らず、「順ちゃん、ヤキメシがひとつと、カレーライスがひとつと、コーラ二つ」と歌うように声をあげる。「蛇や蛇、あの女は蛇。淫乱」母は首をふる。その母がわずらわしく、「もう帰れ」と彼は言う。女が母の横に立つ。「うちのお母ちゃんが、いっつもおばさんの事、ほめとるよ」女は言う。[228]

以上から、母親がケイのことを悪意を持つ、貧乏育ち、しかも蛇を淫乱の象徴であると様々なことを息子に言っても、帰る時にケイはかえって「うちのお母ちゃんが、いっつもおばさんの事、ほめとるよ」という一見矛盾する言葉を言う。実際、その主な原因として、ケイは「まるっきり右耳がきこえない様子だった[229]」ため、コミュニケーション不全の状態である。しかし、母親は聞こえないケイとの対話を拒否するだけでなく、息子に相応しくない女は淫乱で蛇だと思い込む。

女は、シャワーを浴びていた。シャワーを浴びて、バスタオルのまま出ると、浴室の外に立っていた母が「ケイちゃん、あんまり大っぴらにやりなさんなよ」と言った。「そら、あんたも若いし、順も若いけど、人目があるからな」女は平然とした顔をしていた。母の言葉に笑みさえ浮かべ、桃色のバスタオルを乳房のあたりでおさえて、彼の横に立っていた。母の言葉が聞こえなかったのだろうかと思った。[230]

---

[228]中上健次、前掲書、P.164
[229]中上健次、前掲書、P.157
[230]中上健次、前掲書、P.157

「あんたねえ、お父ちゃんはあんたぐらいの時から一生懸命、材木持ちやったんよ。成上りと人が言うけど、血がにじむほどの眼に会うて、ここまで来たんよ、そんなことしらんと」笑みを浮かべ、こびをつくるように、首をかしげ、左耳をさりげなく前にさし出した女に腹だったのか、母は、「なんや二人とも、恥を知りなさい、恥を。犬畜生でもあるまいのに」と言った。[231]

そこでは、母親がケイに苛立つ原因が、昼間から性交にふけることを咎める彼女の注意を「平然とした顔をして」、「笑みさえ浮かべ」てバスタオル一枚で聞くケイの様子であると上述の引用から見られる。「笑みを浮かべ、こびをつくるように、首をかしげ、左耳をさりげなく前にさし出した」ケイは母親を腹立たせ、母親は「おばさんなあ、ケイちゃんが順とつきあいはじめてから、なんか悪い夢みてるようで[232]」と言って、家から出て行ってほしいことを伝えるのである。しかし、こうしたケイの態度は、実はケイの右耳が聞こえないことからきている。母の小言を平然とした顔で聞くケイを見て、順は「母の言葉が聴こえなかったのだろうかと思（傍点論者）[233]」う。首をかしげ、左耳をさりげなく前に出すのも、媚びをつくっているからではなく、片方の耳で聞き取るためである。

ただし、順の母親にはそれが伝わらない。一見普通に登場人物たちが会話を交わしている『蛇淫』において、ケイの右耳が聞こえないことは、物語を動かす重要なファクターとなっている。右耳の聴力を失ったことについて、ケイは順に次のように言う。

「なんせから順ちゃんの家の、便所のくみ取り口に、いちじくが植ってたん。もうこれは、絶対に確かやから。わたしが一つ盗ったの、お母ちゃんに告げ口したの。はっきり覚えとるよ、お母ちゃん、いまでこそ酒ばっかし飲んでああやけど、お父ちゃん生きとるときは、あれできびしいからな。耳のあたりぶたれて、わたしの右耳ほとんどきこえんもん」[234]

---

[231]中上健次、前掲書、P.158
[232]中上健次、前掲書、P.159
[233]中上健次、前掲書、P.157
[234]中上健次、前掲書、P.152

順にはそのような記憶は全くない。心当たりのない昔の話をほかにもケイに聞かされ、彼は「女に、次々、ペテンにかけられはじめた気が[235]」する。

しかし、順はそうした疑問について、ケイを問いただすことはない。それは「蛇性の婬」の豊雄と同じく「受け身」の性格でケイをそのままに受け入れているともいえるだろう。そして、ケイの右耳によるコミュニケーション不全は、順を楽しませもする。

> **女は、まるっきり右耳がきこえない様子だった。女と寝、女を抱いたまま右耳に声を出しても、聞きとれない。女は、その度に声を左耳でききとめようとするのか、体をねじろうとする。それで体をおさえつけた。女を苛めていると思った。いや、時たま、女を苛めたくなった。女の右耳に話しかけた。女は時にかんしゃくをおこす。「順ちゃん、聴こえへんよ」**[236]

聞こえない言葉を聞き取ろうと体をねじるケイの姿は、蛇のようでもある。裸の姿が「服を着ている時よりも、体は大きくみえる[237]」ケイの腹は、「それだけ切り離されているように動く[238]」。コミュニケーションを阻害された女は、男にとっても、その母にとっても、蛇のように映るのである。最終的に、順が「一瞬、その時、体が燃え上る気がし[239]」て両親を殺してしまった原因も、ケイの右耳のせいである。

> **女の耳は、女が中学三年の時、母親がひっぱり込んだ男に手ごめにされ、その現場を母親にみつかり、それで母親からぶったたかれた。鼓膜が破れた。「どうや、気づかへんか」父は言った。[240]**

そこから母親に「あの子は天成の嘘つきなんよ。男をたぶらかせるためにやったら、どんな嘘でもつくし、どんなことでもする[241]」、「眼から淫乱の炎が出とる。男には、

---

[235]中上健次、前掲書、P.156
[236]中上健次、前掲書、P.157
[237]中上健次、前掲書、P.151
[238]中上健次、前掲書、P.157
[239]中上健次、前掲書、P.166
[240]中上健次、前掲書、P.165-166
[241]中上健次、前掲書、P.166

わからんのよ。それにそろいもそろて、うちは淫乱の女に弱い男ばっかしやからな[242]」と畳み掛けられた順は、両親を灰皿で殴りつけるのである。

このようにみると、『蛇淫』は、「蛇性の婬」におけるコミュニケーション不全の引き起こした悲劇、という側面を踏襲しているようでもある。ケイは、必ずしも「一個の邪悪な意志」ではないのではないだろうか。また、中沢新一は『蛇淫』の主人公たちは、「暗い閉塞の中で、性のむさぼりのかぎりをつく」している。ところが、この物語においては、「欲望した相手を執拗に追い求め」るのが、ケイなのかどうかはよくわからないと次のように述べている。

> 白蛇の動物的生命力は、動物界にあるときは、ある秩序に収まっている。ところが、その力が人間の女性のエロス的な身体に宿ったとき、それはすさまじいほどの破壊力を発揮する。欲望した相手を執拗に追い求め、いったん手に入ると、暗い閉塞の中で、性のむさぼりのかぎりをつくすのだ。この「婬」の猛威の前に、人間は手のほどこしようがない。かろうじて、仏法の力によって、その力は、ふたたび白蛇の身体にもどしてやることができるのだ。[243]

要するに、「女をくどき落してスナックのウエイトレスに呼[244]」んだのは、順である。「暴れ抵抗する女をものにし[245]」たのも、順である。しかし、先述したように、順の記憶にない話をするケイは、不気味さを漂わせてもいる。初めて関係を持った後訪れたケイの部屋で、彼女は「素裸のまま、わら[246]」う。「あんたのお母ちゃんって、やっぱし、勘がええなあ。わたしがあんたに惚れとるの、ちゃんと見抜いてたんやな。」女は言った。くっくっと音を立てた。[247]」

---

[242]中上健次、前掲書、P.166
[243]中沢新一 2015『日本文学の大地』角川学芸、P.115
[244]中上健次、前掲書、P.151
[245]中上健次、前掲書、P.155
[246]中上健次、前掲書、P.155
[247]中上健次、前掲書、P.155

こうした違和感に説明をつけるのが、順の母親の「あの女は淫乱なんよ、蛇なんよ[248]」という言葉である。母親の中では、息子が「いつも女と寝てい」るのも、夫が「そんだけの器量よしやったら、すぐ若い男らが、ケイちゃん目当に集まるやろ？[249]」とケイを褒めるのも、蛇であるケイが「淫乱の炎」が出た目で息子や夫を見るからなのである。「お茶をならい、生花をやっているととりすました母の仮面をひきはがしてやりた[250]」いと思う順は、「成上りを肯定する母」がケイをよく思わないのは、貧乏な時代の隣家の娘であるからだとも感じている。しかし、両親を殺めた後、順は思うのである。

> **女は、素裸だった。これが蛇か、と思った。これが淫乱か？彼は女の顔をみた。確かに風呂場の中に放り込まれている二人からは、蛇にもみえるかもしれなかった。女を、「キャサリン」に引っ張ってきてから、いきなり、なにもかも変った。いや、もともと変りはじめていたのだった。**[251]

変化がケイのせいであることを即座に否定してはみるものの、順の内面はゆらぐ。「おれにとりついて、ここまできて、おれをみすてるのか[252]」とケイの額を床の絨毯にこすりつける順は、ケイを蛇にすることによって、両親殺しの責任をケイに転嫁する。この構図は「蛇性の婬」と同様である。

2.2『白蛇抄』のうた女

『白蛇抄』では、華蔵寺の住持の親子に献身する加波島うた女（め）は、京都の有力者の娘で、日本画家の夫を結婚後３年で失い、その後住持の懐海の後妻として寺に来た女性として描かれている。

---

[248]中上健次、前掲書、P.166
[249]中上健次、前掲書、P.153
[250]中上健次、前掲書、P.161
[251]中上健次、前掲書、P.166
[252]中上健次、前掲書、P.167

ところがそのうた女はんが、嫁にいって、三年たったかしてふしあわせなことに、絵描きさんに死にわかれなはった。うた女はんは、子はなかったさかい、嵯峨からまた高台寺へもどらはって、大旦那はんのお供して、この三明へもよう泳ぎにきてはった。華蔵寺の和尚さんの後妻にと、話がきまったのは、この別荘へ華蔵寺さんといっしょに旦那はんが見えた時やった。[253]

それに、病気で寝込みがちな懐海と義理の息子の承昌の世話をかいがいしくするうた女は、檀家からもその献身ぶりを次のように評価される。

これはこのひとの気性で、懐海父子への無心な献身だろう。華蔵寺へ嫁にきたからには、腹ちがいの子にしてもわけへだてなく気をくばってつくさねばならぬとうた女が心にきめたことなのだろうと、まつのは納得するのである。[254]

右あがりの細い書体は、女らしい繊細さをあらわし、キワダ粉のシミの出た黒谷の手漉き和紙に、線をひいたようにまっすぐ書かれ、無学の常吉にも、つましい教育ある寺のおくさまらしい几帳面さだと思われる一方、文面のどこを見ても、横着さが微塵も感じられない、心ぬくもる行文が、見も知らぬ丹後にあるという、古寺のたたずまいにかさなった。[255]

うた女は最初から「寺の奥様」として登場しているが、そのような生まれも育ちも良く、綺麗な女性が寺に来た原因といえば、元夫が亡くなり寡婦になり、再婚で寺の後妻になったからである。このような人物設定を見ると、中国の白蛇伝において「白娘子」と同様に、寡婦が再婚する物語である。しかし、うた女が再婚する相手は頼りになれる寺の住持であることに対して、白娘子が独身且つ貧乏で頼りになれない許宣に結婚話を切り出すことである。一見、うた女は再婚することで一見安定しているように見えるが、実はうた女に対する意見や評価がたくさんある。そこで、『蛇淫』のケイとの共通点といえば、女性が男との関係性を最初は否認していることであると言える。うた女は義子の承昌との関係性が普通ではないと見なされるが、小間使いのまつのが初潮を迎えたことを見ると、いきなりにまつのに寺のお嫁さんになることを次のように言い出す。

---

[253]水上勉、前掲書、P.381

[254]水上勉、前掲書、P.343－344

[255]水上勉、前掲書、P.316

だが、このとき、うた女は、急に語調をかえると、「まつのちゃんにきこうきこう思うてやけど、承昌さんのことどう思うえ」という。びっくりした。「あては、今日、まつのちゃんが、大人になった日やさかい、きいてみるねんやけど、もし、あんたが、承昌さんが好きやったら、お嫁さんになってもろてもええのんえ。このお寺にいつまでもいてほしい思うねん。承昌さんのこと、どない思うてる、いうてみてんか」（中略）まつのは、初潮を見て気が重かった上に、急に、うた女から承昌の嫁になってくれなどといわれて、信じられない気持ちになった。自分がこの華蔵寺の跡取り息子さんの嫁になれる。夢にような気はするが、同時に、嘘をいわれている気もした。うた女はいったい、心からそんなことを望んでくれているのだろうか。まつのには、どう考えても、うた女の思いつきで軽い考えから調子づいていったとしか思えなかった。[256]

上述の内容から見ると、たとえうた女はまつのを説得しているように見えるとしても、まつのが認識するうた女の本心ではそうではないと考えている。

なぜなら、まつのは以前からうた女と承昌との関係性について疑問を抱いているからである。

承昌はうた女にだけはよくしゃべった。うた女も夜は離れの部屋へゆき、ふたりきりの時間が長くなった。まつのは、かすかな嫉妬とも、不安ともつかぬ気分になった。[257]

するとまつのはまた不思議な気持ちになるのだった。承昌さんはうた女奥さまの子でも弟でもない。奥さまは、男にへばりつくのが好きなように思える。[258]

元々まつのは、うた女と承昌との関係について、うた女が主動的に「男にへばりつくが好き」なのだという考えがあった。しかし、ある夜つのが寺から出る原因となる場面が以下のとおりである。

部屋の明りが障子に影をうかせていた。息のつまるほど驚いた。影は立ちはだかっている承昌であった。その承昌の足の方でうた女はしがみつくように背をまるめ、うめ

[256]水上勉、前掲書、P.350－351
[257]水上勉、前掲書、P.340
[258]水上勉、前掲書、P.343

き声をしのんでいる気配である。と、立姿の承昌がうた女にひっぱられるようにしゃがんだ。そして承昌も声をころした。ふたつの影がかさなったかと思うと、灯が消えた。まつのは、見てはならぬものを見た思いと、胸へつき上げてくるはげしい動悸で、足を硬直させ、耳すましていた。と、暗い部屋から、いつか懐海の隠寮からきこえたのと同じようなうた女のすすり泣きがきこえて、承昌の方に声はなかった。まつのに、華蔵寺を出よう、という決心がついたのはこの夜からだった。[259]

まつのはうた女と承昌の関係を目撃し、寺から出ることを考えはじめたが、その後で当時の記憶を振り返る時に、二人の関係がなかったら寺から出なかったという発言からみれば、まつののうた女に対する評価も変わり続けている。

あの人さえ、うた女奥さまと、あのような関係にならなかったら、自分はいたかもしれない。懐海和尚の埋葬の夜から、もう承昌は奥さんとまじわていたのだ。懐海和尚が毎夜のようにうめきながらうた女の腹に口をつけ、泣くようにみえた姿がのこっていただけに、ふたりの淫らな生活をみてみぬふりしてゆくのはたとえようもない苦しみだった。[260]

その一方、うた女は惨めな人生に遭遇し、「考えてみると、うた女はんいうおひとは、かわいそうなおひとや[261]」、「ふたりの男に死に別れる不運も気の毒に思いかえされ[262]」るという評価もある。なぜなら、うた女の役割変化が亡夫画家の妻、住持の懐海の後妻及び寺の奥様、画家の宇田守峯と義子の承昌との関係があるため、「蛇みたい」または「男好き」だと思われるからである。

また、『白蛇抄』において、老女のさわがまつのにうた女のことについて蛇の性と魔性をもつ女として次のように語っている。

まつのさん、あんたも気ィつけんとあかんえ。あのひとの血筋は蛇の性なんや。いっぺん見込んだらはなさへん。蛇は蛙にらんだら喰うまではなさんやろ。おわかも蛇の化身やった。やさしいもえてもちべたいとこがあった。[263]

---

[259]水上勉、前掲書、P.358
[260]水上勉、前掲書、P.383
[261]水上勉、前掲書、P.381-382
[262]水上勉、前掲書、P.383
[263]水上勉、前掲書、P.391

上述を『蛇淫』と比較してみると、二作の共通点として、いずれも年長の女性がヒロインを「蛇」とみなしていることがわかる。その理由は、彼女たちが性に積極的であり、その魅力によって男性たちをひきつけるからである。性的魅力を発揮する女性は「男好き」で「淫乱」なのであり、それは執着、淫欲、妖気などをその特徴とする妖蛇のイメージに重ねられるのである。「老女」たちがヒロインのケイとうた女を厳しく妖蛇や淫乱と批判することで、どのような役割を果たすのか。

倉田容子によれば、近現代文学の中で「老女」をジェンダー、権力、性差に関わりがあると述べ、文学作品の老女像から新たな読みが見られる。

> エンジング(加齢)を、ジェンダーやセクシュアリティ、人種、階級、民族、国籍といった他の差異かのカテゴリーと同様、不断に相互に作用し合い、表象や言説と物質的身体との狭間でさまざまな現象や意味作用を生み出す歴史的・政治的・社会的カテゴリーとして扱う。[264]

そこで、民話や説話でよく登場する「山姥」というイメージを思い浮かべる。江黒清美は山姥のイメージが時代に合わせて姿を変換し再生し続ける象徴であり、妖怪として排除されると次のように指摘している。

> 古代の『古事記』から始まり、中世、近世、近代と「山姥」はその時代が要求するイメージに姿を変えながら、再生され続けてきたアイコンなのだろう。しかし、「山姥」が怒って荒れ狂う時は、空腹で食べ物を探している時と、理不尽な差別的感情に左右されている時であることを思うと、やはり妖怪とはいえ里から排除された老婆の姿が見えてくる。[265]

『蛇淫』の先行研究では、ヒロインのケイは「男を滅ぼす邪悪な意志」といった指摘がこれまでになされている。しかし、ケイが「一個の邪悪な意思」であるかどうかは疑問が残る。

---

[264]倉田容子 2010『語る老女語られる老女 ： 日本近現代文学にみる女の老い』學藝書林、P.14
[265]江黒清美 2012『「少女」と「老女」の聖域――尾崎翠・野溝七生子・森茉莉を読む』學藝書林、P.29-30

ケイは耳が不自由なこともあり、周囲とのコミュニケーション不全の状態におかれている。しかし、順の母親は彼女との対話を試みることもせず、「淫乱な蛇」、つまりはコミュニケーションの不可能な異類だと決めつけるのである。そして、この構図は『白蛇抄』にも引き継がれる。

> まつのは、この新聞を読んだ時も、のちに何どかとりだして読む時にも、 警察に人々や、承昌の友だちだという人や新聞記者たちの憶測にも、肝心で大事なことが何ひとつ語られておらず真相が見えなくなってしまっている気がして眼が冴えた。(中略)そして、うた女の性格に、さわが蛇のような魔性とよんだ奔放な、男好きの一面があって、淋しいことがきらいで、男がそばにいないと、人がかわったようにうち沈み、男がいると急にはしゃいで、世話を焼く、ねっとりとした不思議な個性のもち主であったことなどについて語る人はなかった。[266]

『蛇淫』と『白蛇抄』においては、蛇とされる女性は淫乱の象徴で、男性を誘惑し、破滅させるものであると描かれる。男性を誘惑し、破滅させる、という点で、彼女たちはヨーロッパ世紀末に流行した「宿命の女」の表象とも重なるが、女を「異類」と見なすことにより、その破滅もまた特殊な世界の物語として、我々の日常を脅かすものとはならない。それに、男性を誘惑するシーンからみると、『蛇淫』では一日中性交すると表すことに対して、『白蛇抄』では蛇妖のように周りの人々を魅惑し、全部同類となるよう生気を吸われると表現している。

> ここ三ヶ月ほど、この部屋で、女と寝、性交した。母親は、女が入り込んだと言ったが、むしろ彼が、女を引っ張り込んだのだった。二六時中、性交していた。[267]

> うた女が白蛇なら、和尚も承昌も蛇仲間だ。岸高い泥沼に住みなれてしまうと、わきにいる者は、みな白蛇のうた女に生気を吸われて同類になるのかもしれない。[268]

---

[266]水上勉、前掲書、P.432
[267]中上健次、前掲書、P.150
[268]水上勉、前掲書、P.358-359

しかし、結末のところで、『蛇淫』では、男はケイのために両親を殺害し、彼女と一緒に駆け落ちにする。それに対して、『白蛇抄』では懐海が亡くなった後、その跡継ぎの息子である承昌が義母のうた女を殺害してから自殺することにしてしまうという場面を以下のように表現している。

家に火をつけ、二人を火葬にして、車で行けるところまで行き、汽車に乗り、天王寺にでも出ようと思う。[269]

死亡したのは現住職と先住の妻で、惨らしい現場は、朱に染まり山奥の寺院でもあるので、この世の沙汰でない地獄の人間業苦を見せて息を呑ませた。宮津署が調査したところによると、死んでいた加波島うた女さん(45)は、先住加波島懐海の妻。懐海師が先年物故したあと、同寺にのこり、懐海師の実子ではあるが、うた女さんには義理の子にあたる承昌(28) を新住職に迎え、坊守りの座についたもの。(中略)状況から、うた女さんが寝込みをおそわれて逃げようとした形跡があきらかなので、逃げるうた女を切りつけて殺したのち、承昌がのどをかき切って自殺した無理心中とわかった。[270]

上述の両作で蛇女は「男性を破滅させるもの」として描かれている表現が見られる。『蛇淫』と『白蛇抄』では、蛇女は男性を誘惑する一方、『蛇淫』は二人の駆け落ちに逃げ、『白蛇抄』は無理心中になってしまう。

また、作中の男主人公からみると、『蛇性の婬』では豊雄は「家族を守る」という理由で真女児との婚約を破棄するというより、簡単にもう一人の女性の富子と婚約を結ぶことを選択する。『蛇淫』ではケイを蛇にすることで順が両親殺しの責任をケイに転嫁し、ケイと駆け落ちすることを選んでいる。『白蛇抄』では、義子の承昌が義母のうた女を殺害してから自殺する道を選ぶことになる。

それに、『蛇淫』と『白蛇抄』において、老女たちがヒロインのケイとうた女を執着、淫欲、妖気など妖蛇のイメージがあると語っている。

---

[269]中上健次、前掲書、P.168
[270]水上勉、前掲書、P.429

その一方、作中のヒロインたちはいずれも発話権を与えられず、選択肢もなく、運命を他人任せにするというよりケイの「耳が聞こえない」ためのコミュニケーション不全、及び「蛇のような魔性」のうた女とのコミュニケーション不可能な異類だと決めつけられている。

2.3『蛇』の白素貞

最初篇では登場人物の許仙が幼い頃に白蛇とのエピソードが原因で、それ以来、許仙が長いものを見るたびに恐怖に怯える状態になってしまうことを前置きにする。

許仙右腿有個疤，酒盅般大。有人問他："生過什麼瘡？"他搖搖頭，不肯將事情講出。其實，這也不是什麼可恥的事情，講出來，決不會失面子。不講，因為事情有點古怪。那時候，年紀剛過十一，在草叢間捉蟋蟀，捉到了，放入竹筒。喜悅似浪潮，飛步奔跑，田路橫著一條五尺來長的白蛇，縱身躍過，回到家，右腿發紅。起先還不覺得什麼；後來痛得難忍。郎中為他搽藥，浮腫逐漸消失。痊癒時，傷口結了一個疤，酒盅般大。從此，見到粗麻繩或長布帶之類的東西，就會嚇得魂不附體。[271]

筆者訳：許仙の右脚にある猪口のような大きさの傷跡が残る。ほかの人から「どんなおできができたか」と聞かれると、彼は頭を横に振り、決して真実を話さない。実はそれが恥ずかしいことでもなく、話して決して面目ないことでもない。話さないのはそのことがちょっと変わっているからである。当時、彼は 11 歳になったばかりの頃、草叢でキリギリスを捕まえようとした。捕まえたら竹筒の中に置き、たまらなく嬉しく急いで走っていた。田んぼ道に五尺ぐらいの蛇がいたので、その上に飛び乗った。家に戻った後右脚は赤くなり、最初は何でもなかったが、その後は我慢できないほど痛かくなった。医者は彼に薬を塗り、浮腫みはだんだん解消した。しかし、治った時に猪口のような大きさの傷跡が残った。それ以来厚い麻ロープや長い布帯を見るたびに魂が体から離れるほど恐怖に怯えている。

以上の引用文からみると、許仙は蛇や長いものを見る状態がまるで心理学の「パブロフの犬」という条件反射のようで、または PTSD（心的外傷後ストレス障害）による恐怖の記憶であるといえる。幼い頃の出来事で生涯に残った傷跡や障害は許仙の性格から将

[271]劉以鬯著/梅子編 2014《香港當代作家作品選集・劉以鬯卷》香港天地圖書有限公司、P.224

来に至るまでどのような影響を与えてくれいるのか。その出来事はその後の物語の内容との関わりがあると考えられる。そこで、クリステヴァの論点によれば、許仙が厚い麻ロープや長い布帯などを見ると「蛇」という幻覚につながり、「おぞましいもの」として「棄却」する恐怖症が見られる。

> 恐怖症は、棄却（アブジェクシオン）によって排除されたものが、恐れや不安をかきたてる幻覚となって、名づけえぬものとして出現することである。前=対象は棄却されたが、対象関係が不安定で対象が欠如したままであるときの、「欠如それ自体を表象することを担っている隠喩」として恐怖症をとらえるクリステヴァは、そこにみられるものは、それらの幻覚を形成する原初的な象徴化、一次的な記号生成の機制そのものであるとしている。恐怖症患者は、欲動を素材に隠喩をつくりあげているとされる。ここでの「アブジェクシオンのコード化」は、対象を欠いた欲動体制が無対象状態に代わって恐怖の幻覚的対象を出現させる、隠喩のメカニズムとしておこなわれている。[272]

第二篇では許仙と白素貞との邂逅が清明（旧暦の 4 月 5 日頃）、中国における清明節は祖先の墓を参り、草むしりをして墓を掃除する日である。祖先の墓を掃除した許仙が西湖を経過し、船に乗ろうとする時二人の女性に出会う場面までの描写は「白蛇伝」と大きな違いがなく、次の対話の描写からは改作の内容である。

> **兩個女人登船後進入船艙。四目相接。心似鹿撞。垂柳的指尖輕拂艙蓋，船在兩的漫漫中划去。於是，簡短的談話開始了。他說：“兩很大。”**
> **她說：“兩很大。”（中略）高圍牆裡的對酌，是第二天的事。第二天，落日的餘輝塗金黃於門牆。許仙的靴子仍染昨日之泥。“你來了？”花香自門內衝出。許仙進入大廳，坐在瓷櫈上。除了用山泉泡的龍井外，白素貞還親手斟了一杯酒。燭光投在酒液上，酒液有微笑的倒影。喝下這微笑，視線開始模糊。入金的火，遂有神奇的變與化。荒誕起自酒後，所有的一切都很甜。[273]

> 筆者訳：二人の女性が船に上がり船艙に入ってくる。目と目を合わせると、心がドキドキする。白素貞の細長い指先は軽く艙蓋を触り、船を雨の中にこっくりこっく

[272]西川直子 1999『クリステヴァ―ポリロゴス 現代思想の冒険者たち　第 30 巻』講談社、P.250
[273]劉以鬯著/梅子編、前掲書、P.225

り漕ぐ。そして、簡単で短い対話が始まる。彼が「雨が強い。」彼女が「雨が強いね。」（中略）高い塀の中での対酌はその次の日のことである。次の日、夕日の残光が門と塀を金色に染める。許仙の長い靴にまだ昨日の泥が残っている。「もう来たの？」花の香がぷんぷんとして来る。許仙は居間に入り、陶器の椅子に座っている。白素貞は許仙に岩清水で龍井茶を入れるほか、さらに、自らの手で酒を杯につぐ。燭光が酒に投影し、酒の中に微笑みの倒影が映る。この微笑みがあるお酒を飲んでから視線がぼんやりする。金色が入った灯火は奇妙な変化がある。酒を飲むと荒誕になり、すべての物事がうまくいく。

出会いの描写では一見許仙が不意に雨のことを独白するように言い出し、白素貞は相槌を打つと見える。しかし、次の段落から早速二人は「高い塀の中」という同じ場所で対酌する場面があり、それに「次の日のこと」と強調する。ここからみると、二人は出会ってから次の日まで一緒にいることが推測できるだろう。しかも、二人の間はまるで夫婦の日常的なやり取りのように、許仙が家に帰ると何もする様子はなく、椅子に座るだけで白素貞がお茶を持ってくる場面がある。また、酒への描写は物語の進展に不思議な要素が含まれる暗示を与えるのではないだろうか。

第三篇では中国語で「洞房花燭夜」という新婚の初夜を描き、あえて許仙と白素貞の動作や言葉はなく、すべては侍女の描写を通じて、部屋に満ちる喜びの雰囲気をはじめ、白素貞の考えの変化、二人が愛を育むため夜遅くまで起きていることまで描いている。

燭火跳躍。花燭是不能吹熄的。慾望在火頭尋找另一個定義。帳內的低語，即使貼耳門縫的丫鬟也聽不清楚。那是一種快樂的聲音。俏皮的丫鬟知道：一向喜歡西湖景致的白素貞也不願到西湖去捕捉天堂感了。從窗內透出的香味，未必來自古銅香爐。夜風，正在搖動簾子。牆外傳來打更人的鑼聲，他們還沒有睡。[274]

筆者訳：灯火がぱちぱちと燃え、新婚の洞房花燭は吹き消すことができないものである。欲望は真っ赤な炎にほかの定義を見つける。帷帳の中に微かな声で囁き、たとえドアに耳を押し当てる侍女としてもよく聞こえない。それはある種の喜びの声である。洒落ている侍女は、いつも西湖の風景が好きな白素貞が再び西湖を世の中の楽園と捉えようとせず、もう行きたくないことを知っている。窓から伝われてき

[274]劉以鬯著/梅子編、前掲書、P.226

た香りが必ずしも古銅の香爐からであるとは限らない。夜の風が吹き、カーテンが捲り上がる。外塀から夜間に時を知らせるため「打更」を担当する者から銅鑼を鳴らす音が聞こえ、彼らはまだ寝ていない。

灯火で男女の間の欲望が燃え立つ様態を表し、帷帳や囁く声は朦朧を感じながら、侍女の「ドアに耳を押し当てる」という行動で二人のことは他人に知られたくない。しかし、白素貞にとって、許仙と一緒にいることは西湖の風景さえ比べるものはない。また、「打更」の銅鑼を鳴らすことは二人が初婚の夜にどうしても眠りたくない状態を表す。古代では一夜を五更に分け、一更は二時間である。初更(19:00-21:00)、二更（21:00-23:00)、三更（23:00-01:00)、四更（01:00-03:00)、五更（03:00-05:00）という五等分に分けている。たとえば、中国語の慣用語では「三更半夜」という真夜中を表す言葉が現代まで使われている。この段落では何更になるかを言及せず、許仙と白素貞との感情の深さが見える。そして、第 4 篇では許仙があっという間に薬屋を経営し始まり、客が詰めかける。それに、白素貞が妊娠したことで許仙は大喜びする状態を描いているシーンがある。

許仙開藥鋪，生病的人就多了起來。鄰人們都說白素貞有旺夫運，許仙笑得抿不攏嘴。藥鋪生意興隆，值得高興。而最大的喜悅去來自白素貞的耳語，輕輕一句“我已有了”，許仙喜得縱身而起。 [275]

筆者訳： 許仙は薬屋を開き、病気の人々は増え、客が押し寄せてくる。隣人たちに白素貞をアゲマンと言われ、許仙の笑顔から嬉しくてたまらない様子がわかる。
店が商売繁盛であることは確かにめでたいことであるが、許仙にとって最大の喜びは白素貞の「赤ちゃんができた」という一言である。許仙は飛び上がって喜んでいる。

第 5 篇では許仙は庭に本物の蛇を見たとたん、怖さで意識を失って倒れた。許仙が目覚めた後、蛇を見たことで震えながら不安を感じる。白素貞は蛇をつかむ人を呼び、店員に庭の中の雑草をすべて抜かせるが蛇は見つからなかった。しかし、許仙は蛇のこと

[275]劉以鬯著/梅子編、前掲書、P.226

をずっと考えて、ある夢を見る。その夢の中で白素貞は許仙の命を助けるために仙界の崑崙山にある霊芝の草を盗むことがある。

他在發抖。一個可怕的想像佔領思慮機構。那條蛇雖然沒有傷害他，卻使他感到極大的不安。那條蛇不再出現。對於他，那條蛇卻是無所不在的。白素貞為了幫助他消除可怕的印象，吩咐夥計請捉蛇人來。(中略)白素貞吩咐夥計把院中的草木全部拔去。院中無蛇。蛇在許仙腦中。[276]

筆者訳：彼は震えている。ある怖い思いが彼の考えを支配する、その蛇は彼に傷づけることはなく（→い）とはいえ、彼は大きな不安に襲われる。彼にとって、その蛇はどこでも遍在することである。白素貞は彼の怖い考えを解消するために、店員に蛇をつかむ人を呼んでくることを言いつける。（中略)そして、白素貞は店員に庭の中にすべての草木をぬくことを命じるが、庭の中に蛇はなく、蛇は許仙の頭の中にある。

しかし、第 6 篇から許仙はどうしても心の中の怖さを乗り越えられず、被害妄想だけでなく、ますます妻の白素貞に疑心暗鬼になってしまう。

病癒後的許仙仍不能克服蟠據內心的恐懼，每一次踏院徑而過，總覺得隨時的襲擊會來自任何一方。白素貞的體貼引起他的懷疑。他不相信世間會有全美的女人。[277]

筆者訳：病気が治癒した後、許仙は内心に満ちた恐怖を克服できず、毎回庭を通るたびに、なんとなくいつでも、どこから襲われていることをるかと感じている。白素貞の思いやりは許仙の疑いを抱き、彼は世間に完璧な女性がいることを信じようともしない。上述の内容によると、白素貞のように夫のために何もかも尽くし、生活の面倒を見たり仕事を支持したりするほかに、夫の心の病や精神的病気に対しても支えくれるのだから申し分のない女性であるはずだ。ところが、許仙がそのような世の中に完璧な妻はいるはずがないと確信する。

さらに、第 7 篇では許仙は法海を自称する和尚に出会い、その人は許仙に白素貞は蛇妖であることを言われ、許仙は次第に白素貞の本体を疑っている。

[276]劉以鬯著/梅子編、前掲書、P.227
[277]劉以鬯著/梅子編、前掲書、P.228

於是有了這樣一個陰霾的日子，白素貞在家裏粽，許仙在街上被手持禪杖的和尚攔住去路。和尚自稱法海，有一對發光的眼睛。法海和尚說：“白素貞是妖精。”法海和尚說：“白素貞是一條蛇。”法海和尚說：“在深山苦煉一千年的蛇精，不願做神仙。”(中略)法海和尚說：“明天是端午節，給她一杯雄黃酒，她會現原形。”……法海和尚向他化緣。[278]

筆者訳：そして、ある煙霧立ちこめる日に、白素貞は家で粽を作り、許仙は手に禅杖を持つある和尚に行く手を阻まれる。その和尚は法海と自称し、目がキラキラしている。法海は「白素貞は妖精である」、「白素貞は蛇である」、「山奥に千年を修錬した蛇精は神仙になりたくない」など白素貞の本体は蛇であることを許仙に言い続ける。(中略)最後に、法海は「明日は端午の節句だから、白素貞に一杯の雄黄酒（ションホンジョウ）をあげたら、彼女は正体を現す。」と言う。…法海は許仙に布施を請う。

上述を見れば、疑心を抱き続ける許仙が簡単に他人の言葉に左右され、一緒に生活する妻よりも無関係の和尚の言葉を信じていることがわかる。

それに、その和尚は許仙に「白素貞は妖精である」、「白素貞は蛇である」、「山奥に千年を修錬した蛇精」などの言葉を次から次へと、許仙に蛇に対する恐怖心を植え付ける。こうして、許仙はその「法海」という和尚の言いなりになってしまい、妻の正体は蛇であることを決めつけ、妻と対抗しようとしている。また、仏教で「布施」というのは信者が僧に財物を施すことを意味し、普段「布施」という行為は信者の自由であるはずだが、その「法海」はまるで強制的に布施を請うと見える。

しかし、許仙がその「法海」の言葉に信じ込んで、白素貞に信じられない原因はなぜだろうか。その後、いよいよ物語の見せ場になる、許仙は無理矢理に妊娠している白素貞に雄黄酒を飲ませ、正体が妖精かどうかを暴こうとするが、結局臥榻にある腰帯を蛇と勘違いする場面である。

相對而坐時許仙斟了一滿杯，強要白素貞喝下。白素貞說：“為了孩子，我不能喝。”許仙說：“為了孩子，你必須喝。”白素貞不肯喝。許仙板著臉孔生氣。白素

[278]劉以鬯著/梅子編、前揭書、P.228

貞最怕許仙生氣，只好舉杯淺嚐。(中略)過了一個多時辰，搖搖擺擺經院子到後屋來，輕輕推開虛掩著的門扉，躡足走到床邊，床上有一條蛇，嚇得魂不附體，疾步朝房門走去，門外站著白素貞。“怎麼了？”“床上有條蛇。”白素貞拔下插在門框上的艾虎蒲劍，大踏步走進去，以為床上當真有蛇，床上只有一條剛才解下的腰帶！[279]

筆者訳：許仙は白素貞と対面に座り、酒を満杯になるまで注いで、強制的に白素貞に酒を飲ませる。白素貞は「子供のために、私は飲めない。」許仙は「子供がいるからこそ、君は飲まなければいけない。」白素貞はなかなか飲まないので、許仙は不機嫌に怒っている。白素貞は許仙が腹立つことを怖れ、しかたなく少しだけ飲んでいる。(中略)およそ二時間経ち、許仙はふらふらして庭を通り後ろの部屋に入って、そっと閉めておいた戸をあけ、こっそりとベッドの隣に歩きへ行くと、ベッドの上に蛇を見つけ、魂が体から離れるほど怖くてたまらない。許仙が急いで部屋を飛び出すと、白素貞は門の外に立っている。「何かあったの？」「ベッドの上に蛇があった。」白素貞は門の上に差す艾虎蒲剣を引っ張り出し、大股で部屋の中に入る。ベッドの上に蛇がいると思ったが、結局ベッドの上には先に外したベルトしかない。

この二人の語り「子供のために、私は飲めない」と「子供がいるからこそ、君は飲まなければいけない」から見ると、白素貞が子供のために酒を拒否するが、一方、許仙が「子供がいるからこそ、君は飲まなければいけない」という言葉はいかにも自己矛盾に見える。妊婦の飲酒が胎児に悪影響を与えることで禁止することが常識であるはずだ。それなのに、許仙が白素貞に「酒を飲まなければならない」と言った意味はどういう風に解釈すべきだろうか。

許仙がお酒で子供を堕胎させるか、白素貞を妊娠中絶させるか、いずれにしても、母親と胎児に危険性の高いことである。そこで、許仙は妻の白素貞とお腹の中の子供を愛していないことが読み取れる。許仙は赤の他人に白素貞が「蛇精」から変身する女ということを聞くと、妻に対する感情や子供に対する家族愛などを一切どうでも良いことで、ただ自己中心で自分の利益や安全しか考えない男性になってしまう。

[279]劉以鬯著/梅子編、前掲書、P.229

最後の第 9 篇は最も意味深い段落である。なぜなら、許仙は相変わらず妻の白素貞に疑心を持ち、もう一度法海の寺まで訪ねて行くからである。ところが、法海はすでに亡くなっていたことを初めて聞いた。許仙が路上に出会った人は一体誰だろうか。

また、その人は許仙に白素貞は蛇精であることを告げる理由や意図は何だろうか。

> **許仙走去金山寺，找法海和尚。知客僧說：“法海方丈已於上月圓寂。”許仙說：“前日還在街上遇見他。”知客僧說：“你遇到的，一定是另外一個和尚。”**[280]
>
> 筆者訳：許仙は金山寺に行き、法海和尚に訪ねたいとする。知客僧は「法海住職は先月に円寂した。」許仙は「先日街で住職に出会ったばかりである。」知客僧は許仙に「君が出会ったのはきっと別の和尚でした」と言った。

上述からみると、『蛇』の結末では許仙が「真実を求める」ために家を出ることに対して、ヒロインの白素貞の行く先が論じてなく、結末をきちんと描かず読者に想像させる余白を与える小説である。

許仙が再び家に戻れるのか、白素貞がその後子供を産むのか、二人の関係はもう一度やり直せるのかなどの問題が生じて来るだろう。

そこで、ほかの二作と比べると、『蛇淫』では、二人の逃走が運命の共同体になり、互いに離れられない存在になってしまう。『白蛇抄』では、無理心中にしろ自殺にしろ、二人が亡くなったため、二人の関係性は他人の言葉で評価されるしかない。

それにひきかえ、『蛇』では許仙が『蛇淫』のようにヒロインと一緒にいることや『白蛇抄』のようにヒロインを殺害することではなく、家から出ることでヒロインの白素貞に「自由」を与えるといえるだろう。

まとめてみると、『蛇淫』、『白蛇抄』、『蛇』において、ヒロインたちは全部異類ではなく、人類の女性であるとはいえ、いずれも「蛇の表象」が含まれることによって、妖蛇であると勝手に決めつけられる。

---

[280]劉以鬯著/梅子編、前掲書、P.230

『蛇淫』で順の両親殺し、『白蛇抄』で承昌の無理心中、『蛇』で許仙の「家出」からみれば、いずれも男主人公の決定にもかかわらず、ヒロインたちの「蛇性」によって男性が誘惑され、すべて女性たちのせいにする。それはいわゆる女性、母性、生殖力への恐怖にも繋がりがあると考えられる。

それに、三作では男性がいずれもヒロインたちとコミュニケーション不全及び対話の拒否の状態であるにもかかわらず、かえって非自発的な言動をすることを女性に責任転嫁しようとすることも見られる。男性がそのように女性を「異類」ないし「蛇性」であると思い込むことによって、作中のヒロインたちに全部の過ち、責任、罪までに転嫁できると言えるのではないだろうか。

第四章　女性作家が描く異類婚姻譚

本章では、これまでみてきた「蛇女」の表象を、1990 年代以降の女性作家たちがどのように描き出したのかを考察する。まず、日本の女性史における、女性像と女性の役割から論じていきたい。

『女性史を学ぶ人のために』[281]の構成では女性を古代、中世、近世、近代、現代という時期に分けて論じ、各時期を次のようにまとめている。

古代女性は男権支配の下で女性が公の場から排除され、生育能力と母親の役割を求めている。中世では仏教思想により、女性が自身の子授けから子々孫々に至る様々な祈願を願うことで寺院に寄進している。また、多数の女性が成仏とか往生を現実に連なる世界として捉え、「極楽浄土」を意識していたと考えられる。近世になると、家父長制度による男尊女卑の思想に基づき、女性が家の制度に束縛され、家庭内の役割を求められている。近代の明治維新で期待された女性像は良妻賢母としての役割である。最後は現代になると、敗戦後女性の性暴力被害について論じている。

明治初期、廃藩置県(1871 年)から憲法発布(1889 年)までの期間を文明開化期として、西洋近代思想に影響をうけ、男尊女卑の思想を批判し、女性解放運動を求め始める。「フェミニズム」は 19 世紀末から 20 世紀後半へかけて、世界的規模で起きた女性解放の思想と実践を呼ぶ歴史的用語である。[282]

第一波フェミニズムは 19 世紀末から 20 世紀初頭で、男女同権論や母性保護、女性参政権の獲得が中心である。第二波フェミニズムは 1960 年代で「ウーマン・リブ」(Women's Liberation)と呼ばれる運動はアメリカから始まり、急速に世界各地に波及した。現代フェミニズムの潮流では、リベラル・フェミニズム、ラディカル・フェミニズ

[281]石月静恵・藪田貫編 1999『女性史を学ぶ人のために』世界思想社
[282]木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編 2013『よくわかるジェンダー・スタディーズ人文社会科学から自然科学まで』ミネルヴァ書房、P.2

ム、マルクス主義フェミニズム、ポストモダン・フェミニズムなどに分けられている。

加野彩子は、日本のフェミニズム論争を「母性とセクシュアリティ」というキーワードを取り上げ、「フェミニズムとは明治維新以降の女の平等、解放、地位改善等をめざす言説」と定義し、明治末期になると雑誌の『青鞜』というのはフェミニズム集団であり、「新しい女」として自己主張する集団である[283]と述べている。牟田和恵は「西欧的・近代的イデオロギーの影響のもとに、女性は家内役割・母性役割に押し込められ、生きる場所の選択肢と可能性とを奪われてきたのだ。(中略)たとえば、「良妻賢母教育」は、官製で、上からの押しつけとして行われた側面もあるが、むしろ女性の地位を高めるためにも意図され、教育を受ける女性の側の熱意にもよって普及したのだ[284]」といわれる。

加藤秀一は、女性の役割問題について、女性は従属的役割へ向けて主体化することを期待される[285]と説いている。それに、内田樹は「性化された語法」で、男性作家が「女として書く」という例は(紀貫之以来、太宰治、宇能鴻一郎に至るまで)無数に存在するが、そのように自在に女性的エクリチュールを駆使できる作家たちが他人のテキストを読むときに「女として読む」ということができたのかどうか[286]という問題を問い出す。

また、水田宗子は女性作家の作品の多くが〈外国に住む〉という共通した経験があることを取り上げ、「社会や文化の束縛から自由になった想像力や思考は、女であること=〈内なる外国人〉の意識に導かれて、生の根源へと遡り、見知らぬ場所(異界)に行き着く。そこが女たちの物語の世界、女たちが探し当てたことなる故郷なのだ[287]」と「社会の中で女性が生きる方法を選び取る自由度が広がったことを表現する以上に、そうした女性のあり方を、社会の内側で生きる人間とは異なる生き物、〈異類〉として定義する試みなの

---

[283]江原由美子・金井淑子編 1997『ワードマップ　フェミニズム』、加野彩子「日本のフェミニズム論争史①母性とセクシュアリティ」、新曜社、P.196-197
[284]田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編 1997『ジェンダーと女性』、牟田和恵「家族・性と女性の両義性」、（シリーズ比較家族 8）早稲田大学出版部、P.105-106
[285]加藤秀一 1998『性現象論　差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房、P.204
[286]内田樹 2002『女は何を欲望するか？』径書房、P.64
[287]水田宗子 1993『物語と反物語の風景』田畑書店、P. 89

である[288]」と述べている。それに、水田宗子は女性作家の内面についての見解は次のようである。

> 「山姥」というのはメタファーであり、作家が幻想する存在ですが、物語の中では、里に棲む女を縛るジェンダー規範から逃れた、山という解放区に棲む、自由な女性の在り方、生き方の原型として、夢想されています。「里」や「野」、「山」もメタフォアであり、意味が付加されたトポスとして使われるメタフォアですが、また主人公は里の規範を生きる女性でもあるので、山姥の物語は夢物語でもあるのです。(中略)そういう存在として主人公に夢想され、山姥伝説の根底にその姿を見、女性規範を脱却した女性の原型として夢想する物語の世界なのです。[289]

さらに、佐伯順子は近代のジェンダーの状況で、男女平等の思想及び女子教育の普及や女性啓蒙運動の影響にもかかわらず、女性の社会的役割は制約され、女性の執筆活動は数少ない女性の適職と見なされる。そこで、最初の女性職業作家の樋口一葉を取り上げ、一葉が明治時代に女性への伝統的な行動規範、妻や母の役割を期待される女性ジェンダーから逸脱し、「書く女」として執筆により経済的に自立できることはかえって男性優位の社会構造を脅かし、女性作家の活躍は批判の対象となる[290]と論じている。

上述の論点をまとめてみると、これまでの女性像は主に男性作家または男性視点として描かれており、女性を偽装する男性作家まである。しかし、女性の役割は良妻賢母の従属性から新しい女として自己主張の言説と主体性を求められ始める。まず、フェミニズムの流れによる性化された語法、ジェンダー視点として、女性作家が描き出す物語の内容及び登場人物の表象などを比較したい。次に女性が束縛から脱出する方法として、異界に行き、異類として生き、山姥の語りなどを通じて解放できると言われる。 そこで、女性作家が描き出す蛇のイメージと役割、女性の表象といった問題について追究してみたい。

---

[288]水田宗子、前掲書、P.109
[289]水田宗子・小林富久子・長谷川啓,・岩淵宏子・北田幸恵 2017『現代女性文学を読む：山姥たちの語り フェミニズム／ジェンダー批評の現在』、水田宗子「現代女性文学・山姥の語り」アーツアンドクラフツ、P.44-45
[290]増田裕美子・佐伯順子 2011『日本文学の「女性性」』思文閣出版、P.78-85

日本では坂東真砂子『蛇鏡』(1994 年)、川上弘美『蛇を踏む』(1996 年)、本谷有希子『異類婚姻譚』(2016 年)、中国圏では李碧華《青蛇》(1993 年)などを取り上げ、異類婚姻譚の変奏ともいえる作品について分析する。

第１節《青蛇》における発話権を持つ語り手

1.1 作品概要

李碧華（リリアン・リー/リー・ピクワー）1959 年に生まれと推測され、実際の生年は不詳であり、本名は李白である。香港でキリストの名門中学校の真光女書院を卒業し、小学校の教師、記者、脚本家、作家という多彩な職歴がある。代表作品として、《川島芳子》、《霸王別姫》、《青蛇》、《胭脂扣》 、《生死橋》、《秦俑》、《餃子》などがあり、著作はおよそ 100 作品以上であり、英語訳の作品も出版している。

その中に、多くの作品が映画化され、『ルージュ/胭脂扣』(1987)、『川島芳子』(1990)、『さらば、わが愛/覇王別姫』(1993) などが挙げられ、そして今回取り上げる作品の『青蛇』が『青蛇転生(1993)』という映画名で香港で公開されたアクション・ファンタジー映画である。

このような多様な経歴と著作で李碧華は香港文壇において有名な才女として評価されるが、謎めく女性作家としてマスコミに姿を現さず、写真、年齢と生い立ちなど一切公開されていない。『青蛇』の結末では、李は文化大革命(1966 年)による社会変動を取り入れ、白素貞の子孫である「許士林」が紅衛兵の一員として、白蛇を鎮圧する塔を壊し、白素貞がやっと塔から出られる。李碧華は女性作家として、『青蛇』に語り手として発話権を与えることによってフェミニズムとの関連性があると考えられる。

《青蛇》は 1986 年初版、1993 年修訂のファンタジー小説であり、1993 年に監督の徐克と李碧華が共同で映画『青蛇転生』の脚本を制作した。《青蛇》の登場人物は、青蛇、白蛇、許仙、法海の四人である。しかし、本作の「白蛇伝」との大きな差異といえば、

もともとは白蛇（白娘子）の侍女としての役割しか与えられなかった青蛇を主役にし、全編で一人称の語り手として新しい視点から改めて物語を語るというところである。

この物語においては、白蛇は青蛇にとって、命の「恩蛇」、姉、運命共同体など多重な役割を担う存在である。許仙は、眉目秀麗な外見から白蛇が慕情を抱くようになる人物だが、祖先を祭ることで彼が純朴で敬虔な人に見える。また、、法海和尚は若者として設定されることにより、物語に伏線を敷くと言える。本作においては、それら四人の関係について、許仙と白蛇の間の異性愛、白蛇と青蛇のレズビアン及び許仙と法海のゲイという同性愛、青蛇と白蛇および許仙、法海の間に両性愛者などの複雑かつ難解な関係があることを描き出す。青蛇は主役として、ほかの三人の登場人物の白蛇、許仙、法海に対して、いずれも一旦は恋愛感情を抱くが、様々なことを経験してから、青蛇は白蛇との関係を修復し、末長く白蛇の傍にいることを決める。

1.2 先行研究

李碧華の《青蛇》はよく「白蛇伝」の内容と比較する一方、《青蛇》という題名から元々無名で無口である脇役がいきなりに主役になり、当時のフェミニズム思想に影響されている。まず、「青蛇」の登場による発話権や語りについて考察したい。これまでに《青蛇》に関する先行研究は原作の白蛇伝との比較、青蛇と白蛇との対比、作者の李碧華の香港出身によるアイデンティティ、登場人物における同性愛などの問題をめぐって論じている。そして、白蛇伝は多言語に翻訳されてきたため、よく知られている中国の伝説である。それにひきかえ、《青蛇》はほかの言語に翻訳されていないため、中国語圏以外の研究はほぼ見られていない。それから、いくつかの論点を取り上げてまとめたい。

朱崇科は《青蛇》の隠喩からみれば、香港の主体性と文化的アイデンティティが見られると次のように述べている。

《青蛇》中身份的反复和不确定性恰恰暗示了历史上香港主体性的模糊乃至缺失，当然这也同时论证了寻找的艰难。[291]

筆者訳：
《青蛇》ではアイデンティティの変化と不確実性がまさに歴史的香港のアイデンティティが曖昧または欠如するようで、それと同時にアイデンティティの確立の困難さを立証している。

陈艳丽は青蛇が人間に変身する時、四つの段階を経ると次のように示す。

「青蛇在由蛇到人的蜕变中经历了四大不可抹灭的阶段。一、形体的转变；二、人性的摸索；三、人性的探究；四、人性的升华。每个阶段的演变都是青蛇以自己的情感为代价。」[292]

筆者訳：
青蛇が蛇から人間に変身する過程で四つの不可欠な段階がある。一. 形体の変身、二. 人性の模索、三. 人性の探求、四. 人性の昇華。各段階への変化はすべて青蛇が自らの感情を代償として進化してきた。

李佩樺の《香港作家李碧華小説之研究》（香港作家李碧華の小説研究）では、李の翻案小説を三つに分け、≪青蛇≫は登場人物の心理描写を重んじると次のように述べている。

李碧華的故事新編可分為三種情形:一是以原始故事為背景，但只引用故事主角，創作全新之小說情節，此種改編多為短篇小說。二為小說略更動原典情節，並加深人物心態描寫。此種改編多為長篇小說，如《青蛇》、《霸王別姬》、《川島芳子》等；三為李碧華自身創作的短篇小說改寫為長篇小說。[293]

筆者訳：
李碧華の翻案小説は三つの種類がある。一つ目は、原典の背景と物語の主役をその

[291]朱崇科 2005〈雅俗混雜的香港虛構——淺解《青蛇》〉《世界華文文學論壇》第 1 期、P.61
[292]陈艳丽 2010「人之善恶论——论李碧华《青蛇》中的青蛇形象」《现代语文(文学研究版)》2010 年 03 期、P.122
[293]李佩樺 2005《香港作家李碧華小說之研究》中央大學中國文學研究所碩士論文、P.114

まま用いて、新たな小説プロットを創作し、この種類は短編小説が多い。二つ目は、原典のプロットを変更し、特に登場人物の心理描写が深くなることである。この種類は長編小説が多く、《青蛇》、《覇王別姫》、《川島芳子》などがある。三つ目は、李碧華自身の短篇小説を長編小説に書き換えることである。

そして、李碧華の翻案小説では「凸顯女性的個性與情感表現」(女性主人公の個性と感情表現を浮き彫りにすること）と、「對特定政治人物的批判」(特定の政治家への批判) という二つの特徴[294]が見られると指摘している。

鍾宜書の《李碧華長篇小說悲劇人物研究》(李碧華の長編小説における悲劇の登場人物研究）の「自主意識萌發的女性」(自立意識萌芽の女性）の節において、青蛇が自らの成長によって自立意識が芽生えると次に述べる。

《青蛇》的青蛇在「白蛇與許仙」的戀愛中，從一開始的猶豫遲疑，到衝擊後獲得啟發，最後隨著數百年的修練，終於看清自我的價值，但也因此對愛情失望。[295]

筆者訳：
《青蛇》では青蛇が「白蛇と許仙」の恋愛の間、戸惑いや躊躇いをはじめ、衝撃を受けてから啓発されてきた。最後は数百年の修練を積むことで、ようやく自我の価値を悟るからこそ、恋愛感情に失望する。

李胤霆の《從李碧華「故事新編」看女性角色之再造》(李碧華の「物語の書き換え」女性役の再構築) では四つの白蛇物語を取り上げながら、≪青蛇≫と比較している。
青蛇を語り手として、人格と欲望を賦与させることで登場人物たちの心の葛藤を細かく描写していると次のように述べている。

在白蛇故事演變的過程中，青蛇雖曾經擁有一顆反叛的心，然而卻極其短暫，最終她依然是白蛇永恆忠心的奴婢或姊妹，但李碧華攫住了青蛇被隱藏起來的私心，賦予小青複雜且鮮明的形象，發展出青蛇自己的人格、強烈的欲望，擁有與白蛇不盡相同的好惡，使青蛇不再依附白蛇而存在。透過小青講述各人行為與心態，無論是她自己、

[294]李佩樺 2005《香港作家李碧華小說之研究》中央大學中國文學研究所碩士論文、P.125-130
[295]鍾宜書 2014《李碧華長篇小說悲劇人物研究》彰化師範大學國文學系碩士論文、P.113

白素貞、許仙及法海，人前人後皆有不同舉止表現，目的是呈現更多人性在面對各種情感和欲望的矛盾與掙扎。[296]

筆者訳：
白蛇物語が進化する過程において、青蛇はかつて反逆心を抱いたが、それは極めて短く、最終的に青蛇は白蛇の永遠の忠実な下女と姉妹の役割を果たしている。しかし、李碧華は青蛇が隠されている私心を攫み、小青に複雑かつ鮮明なイメージを与え、青蛇の自らの人格、強烈な欲望を発展させ、白蛇と異なる好き嫌いがあり、青蛇はもう白蛇に依存する必要のない存在である。小青の語りを通じて、作中人物の行為と心境を表し、青蛇といい、白素貞、許仙、法海といい、どちらも人の前と人のいない場合によって異なる振る舞いと表現が見られ、その目的とは人性が様々な感情と欲望に応じる矛盾ともがきを表すためである。

劉慧は『東アジアにおける白蛇伝映画の研究―女性の表象をめぐって[297]』において、日本、中国、韓国、香港などの地域で「白蛇伝」に関する映画を取り上げ、女性表象の変化を考察する。中国映画史において、最初の「白蛇伝」の映画は『義妖白蛇伝』(1926)であり、1937 年に日中戦争のため、『荒塔沈冤』(1939)が制作された後、「白蛇伝」の映画は香港を中心に制作することになった。また、異なる文化と時代によって変貌する女性の表象からみると、日本では白娘は戦後の男性が希求する女性像として、夫に強い愛情を抱く執念深い印象がある。中国では戦後の華人コミュニ―ティにおける古典中国への郷愁を喚起するために、白娘は伝統的な道徳規範に基づく理想的な女性像が描かれている。『青蛇』と『白蛇伝説』から、既成の白娘のイメージを打ち破り、現代女性においてジェンダー意識と欲望を描くことで女性のイメージは文化、政治、社会の状況に影響され変貌し続けていると指摘している。

上述の論点をまとめると、《青蛇》の改作では、青蛇が主役になり、蛇から人間への変身によって成長し続け、自らの意識、人格及び欲望が形成されている。青蛇と白蛇が伝統的な無口で理想的な女性像から現代的なジェンダー意識と欲望がありながら発話権の

[296]李胤霆 2014《從李碧華「故事新編」看女性角色之再造》東吳大學中國文學系碩士論文、P.90-91
[297]劉慧 2018 東アジアにおける白蛇伝映画の研究―女性の表象をめぐって、筑波大学人文社会科学研究科博士論文、P.193-196

あるヒロインに変化している。そして、青蛇が進化することに伴い、登場人物との関係性の変化及びアイデンティティの確立が見られる。

1.3 蛇の表象と人物関係

最初は『青蛇』の登場人物である青蛇、白蛇、許仙、法海という四人についての描写から伝説の「白蛇伝」との相違点を明らかにしたい。はじめから青蛇が語り手として自己紹介しながら、物語の背景、白蛇との関係性を次のように説明している。

我今年一千三百多岁。住在西湖一道桥的底下。这桥叫“断桥”。从前它不叫断桥，叫段家桥。冬天。我吃饱了，十分慵懒，百无聊赖，只好倒头大睡。睡在身畔的是我姊姊。我们盘错纠缠着，不知人间何世。[298]

筆者訳：
私は今年で 1300 歳くらいである。西湖のある橋の底に棲んでいる。この橋の名前は「断橋」と呼ばれる。昔の名前は断橋ではなく、段家橋という。私は満腹で、ふらふらして意気込みに欠ける状態で、やむを得ず寝るしかない。私の隣に寝るのは私の姉であり、わたしたちの関係は盤根錯節であり、世の中のどの年代なのかさえわからない。

また、青蛇は 500 歳の頃、1000 歳の白蛇に出会い、白蛇に助けてもらうことで青蛇がそれ以来白蛇に随伴することを決めた。青蛇の視点から白蛇に対する描写や評価を次のように語っている。

我对她很信服。近乎讨好：“你比我漂亮，法力比我高强，又比我老——”素贞与我，情同姊妹。（中略）素贞见的世面比我广，点子比我多。
便决定追随她左右，好歹有个照应。

筆者訳：
私は彼女に信頼して服従するだけでなく、彼女のご機嫌を取る。「君は私より綺麗で、

[298]李碧華 2013《青蛇》北京新星出版社、P.3

法力も私より強く、それに私より年長で…」素真と私は姉妹のように仲がいい。（中略）素真は世の中のありさまを私より知り、アイデアも私より多い。だから私は彼女の傍に随行することを決め、いずれにせよ、お互いに世話することができる。

《青蛇》において、主人公の青蛇が語り手として、命の恩人である白蛇の白素貞に出会い、青蛇の視点から物語を語っている。次の描写は白素貞が「保和堂」という薬屋を経営し、実際に病人を診察する女医であることを述べている。

因素贞的能干，连带许仙也门楣焕彩。（中略）素贞渐渐地，成为杏花烟雨苏州观前街上一位贤慧女强人。每个人都喜欢她。她更忙碌了。 [299]

筆者訳：
白素貞は仕事ができる女であるから、許仙も面子がある。（中略）徐々に、白素貞は蘇州の観前街において気立てのいい強い女になる。白素貞は人々皆に愛され、彼女は前より忙しくなる。

そこで、前章で論及したラウ・イーチョン（劉以鬯）の『蛇』と李碧華の『青蛇』の二作において、蛇女の白素貞は二人とも「生殖能力」があり、『蛇』では妊娠中の白素貞と『青蛇』では子供を産む白素貞の描写が見られる。中国の蛇女のイメージは「母親」の役割を加えられる理由はなぜだろうか。邱海濤によると、中国では「子づくり」の観念は儒教の思想に深く影響され、数千年にわたって中国人の精神を形成してきた。『孟子』の中で「不孝有三，無後為大」という教えがある。不孝には三つある。祖先を祭らないこと、親に孝養を尽くさないこと、子（男子）をなさないことである。儒教ではこの三つのうち最後の「子をなさない」、つまり後継ぎの男子がないことがいちばんの不孝である。儒教は繁殖のための教えだ[300]と述べている。

次に、各作の語り手について、『蛇鏡』、『蛇を踏む』、『異類婚姻譚』は概ね傍観者の立場から語り、《青蛇》は主役である青蛇の立場から物語を語っている。

そこで、菅原克也は語り手の存在について、「小説において、物語の世界に生きる作中

[299]李碧華、前掲書、P.46-47
[300]邱海濤（著）・納村公子（訳）2000『中国五千年　性の文化史』集英社、P.11

人物の経験が語り手によって語られる。作中人物と語り手がどのような関係にあるかは、小説の語りを性格づける重要な要素となる」といい、「当事者の立場から語られた経験であるのか、傍観する立場から観察されたものであるのか、あるいは伝聞なのか。語りが帯びる性格はそれぞれの場合で異なることになる[301]」と指摘している。

要するに、語り手の存在により物語の個性が左右されるということである。しかし、青蛇が発話者としての役割を与えることにひきかえ、これまでの白蛇伝で下女役の青蛇と同じく「名前のない」存在であると次のような描写がある。

—我忘了告诉你，我是一条蛇。我是一条青色的蛇。并不可以改变自己的颜色，只得喜爱它。一千三百多年来，直到永远。[302]

筆者訳：
そうだ、お前たちに言うことを忘れていた。私は蛇である。私は一匹の青い色の蛇である。自分の色を変えることができないから、好きになるしかない。千三百年以来から、永遠に至るまでも変えられないことである。

いわば、青蛇の称呼は青色だからこそ呼ばれているが、蛇皮の色と同様に定着してしまう。たとえ青蛇は一気に脇役から主役になれるとしても、永遠に変えられないこともある。青蛇が第一人称の語り手として発話権を握るにかかわらず、ほかの登場人物と比べると、「無名」の存在であると言える。作品名の《青蛇》から元主役の白素貞がいつも「小青」と、あだ名のような呼び方をされることからみれば、青蛇の身分が相変わらず身分の低い下女であると見なされているのではないだろうか。後の三作において、主役のヒロインたちはすべて「名前のある」女性である。

それから、青蛇と白蛇が初めて許仙を見た時に、青蛇が許仙の第一印象を描き出し、許仙の外見に白蛇は惹かれ、その後の物語が発展する。それに、彼に対する第一印象として、許仙が先祖孝行をすることで純朴かつ敬虔な人だと誤解してしまうことである。

---

[301]菅原克也 2017『小説のしくみ ： 近代文学の「語り」と物語分析』東京大学出版会、P.87
[302]李碧華、前掲書、P.4

好个美少年，眉目清朗，纯朴、虔诚。身穿蓝衣，头戴皂色幞头，拎了纸马、蜡烛、经幡、钱垛等，来追荐祖宗。[303]

筆者訳：
なんという美少年がいるだろう。彼の顔かたちがはっきしてさわやかで、純朴かつ敬虔な人である。青い服を着て、黒い頭巾をかぶり、手の中に先祖を祭るために、紙馬という神仏の像を描いた色紙、蝋燭、タルチョーという仏教の経文が書かれた祈祷旗などを持っている。

さらに、法海の人物造形は「白蛇伝」の中によく知られる年を取った高僧ではなく、かえって 30 代の若い和尚になることを描き出す。法海の若さはのちほどの物語において青蛇が挑発して誘惑させようとする対象になる要因の一つである。青蛇は法海のイメージを次のように語っている。

他年岁不大，却眉目凛凛，精光慑人，不怒而威。眉间有若隐若现金刚珠，额珠半没肤中，有超然佛性。和尚身穿皂色葛布单衫，外被袈裟，手中持一根红漆禅杖，顿地一点，各环震颤，发出清音。

筆者訳：
彼は若いのに、凛々とした眉目とあかあかと怖らせ、怒らず威厳のある態度である。眉の間にある見えつ隠れつした金鋼珠があり、数珠は半分を肌の中に嵌め、超然とした仏性がある。和尚は黒い葛布の服の上に袈裟を着け、手に朱漆塗りの禅杖を持ちながら、杖で床を突くと四方に振動し、衝撃音を響き出す状態である。

上述の描写から見ると、いくつかの要点をまとめることができる。まず、青蛇は一気に脇役から主役になり、全編で一人称の語り手として新しい視点から改めて物語を語る。それに、白蛇は青蛇にとって、命の「恩蛇」、姉、運命共同体など多重役割を担う存在である。許仙は眉目秀麗の外見で白蛇が慕情を抱くようになり、祖先を祭ることで彼が純朴と敬虔な人に見える。なおかつ、若い法海和尚の設定は物語に伏線を敷くと言える。それら四人の関係について、許仙と白蛇の間の異性愛、白蛇と青蛇のレズビアン及

[303]李碧華、前掲書、P.22

び許仙と法海のゲイという同性愛、青蛇と白蛇および許仙、法海の間に両性愛者などの複雑かつ難解な関係があることを描き出す。

また、小説の中に青蛇と白蛇との間に、お互いに欠かせない存在であると同時に、感情のもつれを持ち続けている。そのため、青蛇が白蛇と許仙の関係を羨まがる思いから嫉妬の感情に巻き込まれ、許仙をめぐって争い、白蛇の元から奪われようとする。

しかし、青蛇が許仙に本性を現した後、白蛇のように許仙に未練がありどうしても傍にいて離れないことを選択せず、直ちに法海を誘惑することを試しに行く。

次に、青蛇と白蛇について、異類の蛇が法力を持つことで神格化するまたは蛇の執念による妖魔化するというより人間に変身することで「人性」を表し、人間化にされるといえる。青蛇は許仙が亡くなり、白蛇が塔の下に閉じ込められ、その子供が他人に養育される結末について、次のように感想をまとめている。

对于世情，我太明白—— 每个男人，都希望他生命中有两个女人：白蛇和青蛇。同期的，相间的，点缀他荒芜的命运。——只是，当他得到白蛇，她渐渐成了朱门旁惨白的余灰；那青蛇，却是树顶青翠欲滴爽脆刮辣的嫩叶子。到他得了青蛇，她反是百子柜中闷绿的山草药；而白蛇，抬尽了头方见天际皑皑飘飞柔情万缕新雪花。 每个女人，也希望她生命中有两个男人：许仙和法海。是的，法海是用尽千方百计博他偶一欢心的金漆神像，生世伫候他稍假词色，仰之弥高；许仙是依依挽手，细细画眉的美少年，给你讲最好听的话语来熨帖心灵。[304]

筆者訳：
世の中の感情について、私はよく分かってきた。すべての男性は人生の中に白蛇と青蛇という二人の女性がいることを望んでいる。同じ時間で、互いに間に合わせて彼の運命の寂しさを豊かにしてくれる。ただ、白蛇を手に入れた後、白蛇はだんだん金持ちの家の傍に青白い灰燼になり、青蛇はあっさりとした強い性格で緑滴る葉っぱのようである。青蛇を手に入れた後、かえって薬棚の中に蒼色の漢方薬になり、白蛇は頭を上げ尽くしてからこそ空の真っ白な雪がひらひら優しく舞いっている。すべての女性も同じく人生の中に許仙と法海という二人の男性がいることを望んでいる。確かに、法海とはあらゆる手段を尽くして笑顔にしたい金漆の仏像であり、少し優しくされることを待望し、仰げば弥高く。許仙とは離れたくなく手をつなぎ、丁寧に眉毛を描く少年が最高の甘い言葉を囁いて心を癒される。

[304]李碧華、前掲書、P.123-124

青蛇は他の登場人物との付き合いで世間知らずな人から世間擦れした人として成熟してきた。上述からみると、人々は運命の中に、白蛇と青蛇という二人の女性、もしくは許仙と法海という二人の男性の存在が望ましいというのは、実際の数字ではなく、人間の欲求を満たすことの難しさであると考えられるだろう。いわば、マズローの欲求 5 段階説のように、人々の欲求は低いものから順番に現れ、その欲求がある程度満たされると、次の欲求が現れることによって、欲求が満たされなくなることである。青蛇が世情に通じることで白蛇のことを待ち続けていることを選択した。

それに対して、白蛇が雷峰塔から解放されたきっかけになったのは白蛇の後代である許士林が文化大革命に参加し、紅衛兵として雷峰塔を壊したからだ。青蛇が白蛇との再会を次のように述べている。

塔倒了!（中略）我与素贞都得感谢它！—白蛇终于出世了！我一见她，急奔上前，她先是满目苍茫，不知人间何世。（中略）我俩相拥，穷凶恶极地，恨不得把对方嵌进自己的身体内。[305]

筆者訳：雷峰塔が倒れた。(中略)私と素貞は文化大革命の貢献に感謝すべきである。白蛇がやっと人間の世界に戻ってきた。私は彼女と再会した瞬間、慌てて走り出した。彼女の意識がぼんやりして、世変りで人間の世界を知らなかった。(中略)私たちはお互いに相手の身体に巻き付くように強く抱きしめる。

その後、白蛇が青蛇に誰が塔を壊したのかを尋ね、自分が産んだ息子の後代と分かると、早速会いに行きたいと言い出したが、青蛇に衝動を止められたと次のような場面がある。

小青，是谁把塔推倒的？
是那群小娃娃。（中略）是我儿！小青，让我去会他！
我拼命地阻拦。好不容易摒绝一切爱恨，又在翻尸捣骨干什麽？
姊姊，他不是你儿子，你想想，八百多年了，翻了那麽多次的轮回，他会记得？别自找麻烦啦。

[305]李碧華、前揭書、P.127

对，八百多年了。他们父子也‥‥‥她喃喃。

筆者訳：
小青、誰かが塔を倒したの？
そこの若者たちが倒した。(中略)それは我が子！小青、その子に会いたいが、行かせて！私が彼女を必死にとめようとした。ようやくすべての愛と恨みを取り除き、再び探り出すことにどんな意味があるのか。
姉さん、彼はあんたの息子であるはずがない。考えてみ、もう八百年過ぎた。
もう何百回の輪廻転生を繰り返し、彼が覚えられるわけがなく、自ら面倒を起こすことをやめて！
そうだ、もう八百年以上だ。彼らの親子たちはもう…彼女が呟きだした。

そこで、たとえ白蛇が八百年以上に塔に閉じ込められ、ようやく出たところ、人間の世界に未練があり、過去の思いでに浸ることが見られる。そのため、青蛇は全編の発話者として、白蛇が塔に閉じ込められた間、それらの出来事を罪のない嘘でごまかした。特に、白蛇が毎度さり気なく許仙のことを尋ねるたびに、青蛇は怒りのあげく、許仙を殺した真実を伝えず、逆に許仙が後悔の末、僧侶になるという嘘の作り話を次のように述べている。

素贞装作对过去不大关心，偶然伸个懒腰，问那问过一百七十三次的问题：后来相公怎麽样？哦！我哄她：你被镇塔底之后，法海散去。相公懊悔，情愿出家。就在塔旁被剃为僧，修行数年，一夕坐化去了。[306]

筆者訳：
白素貞は過去のことを関心を持たないふりをして、腰を伸ばしながら偶然のように何百回もその問題を言い出しだ。「その後、旦那はどうなったのか。」と聞かれた。またそのことが、私は彼女をあやすため、「君が塔に鎮圧された後、法海が出ていた。旦那様が後悔で出家することに望んでいた。塔の隣で剃髪して僧になり、修行する数年後、ある日足を組んで座ったままなくなった」と伝えた。

[306]李碧華、前掲書、P.129-130

上述では、青蛇は様々な出来事を通じて、本来の世間知らずな人から成熟したが、何百年も塔に鎮圧された白蛇の心の純粋さを保つため、白蛇を傷付けないように敢えてつく嘘をつくといえる。

まとめてみると、青蛇は主役として、ほかの三人の登場人物の白蛇、許仙、法海に対して、どちらも恋愛感情を抱き出したことがあるとはいえ、様々なことを経験してから、青蛇は白蛇との関係を修復し、末長く白蛇の傍にいることを決める。

さらに、前章で論及したラウ・イーチョン(劉以鬯)の『蛇』と李碧華の《青蛇》の二作において、蛇女の白素貞は二人とも「生殖能力」があり、『蛇』では妊娠中の白素貞と《青蛇》では子供を産む白素貞の描写が見られる。中国の蛇女のイメージは「母親」の役割が加えられることによって、物語の展開を変えることになる。

白蛇の子孫である許士林が文化大革命に参加し、紅衛兵の一員として、雷峰塔を壊したことで白蛇は解放されていることになる。つまり、青蛇の役割は「発話者」として物語に新たな展開を加えることだけで、結局白蛇を解放する人は白蛇の息子であることで、女性はまだ男性の束縛から離れられないと言える。

第 2 節『蛇鏡』における蛇鏡の象徴と影響

2.1 作品概要

坂東真砂子(1958-2014)は、高知県生まれ、奈良女子大学家政学部住居学科卒業した。イタリアに留学し、インテリアデザインを学ぶ。帰国後、児童文学者としてデビューし、後にホラー小説に転向する。1994 年に『蟲』で第 1 回日本ホラー小説大賞佳作に受賞し、1996 年に『桜雨』で第 3 回島清恋愛文学賞、人間の性と業を描いた『山妣』で第 116 回直木賞を受賞した。タヒチやイタリアなど海外に移住して執筆活動を続けていた。

2009年、故郷の高知県の樽ノ滝に「La Cascade」というイタリアンカフェをオープンした。2013年に舌癌が見つかり手術を受けたが、転移が判明し、2014年に55歳で高知県内の病院で亡くなった。

『蛇鏡』は以下のような物語である。

ヒロインの永尾玲が婚約者の広樹と共に姉の七回忌のため帰郷する。玲はかつて姉の綾が首を吊った蔵で、珍しい蛇の浮き彫りのある鏡を見つける。玲はその蛇鏡を姉の遺物として手に入れ、玲の気持ちが変化していく。玲が広樹との関係に心揺れ動きながら、八年前に片思いだった相手の田辺一成と再会する。一成はその頃、実家の傍にある遺跡で発掘調査に来る研究家であり、遺跡の付近や神社に水が真っ赤に染まって見えるなど、不可解な現象が続発することを発見する。玲が姉の自殺と蛇鏡をめぐる謎解きを解明したため、遺跡調査に来る一成が玲に蛇神に関する伝説や信仰を教えてくれる。それに、昔、二人が両想いだったとわかってから、二人の距離が縮まり、不倫関係に陥る。その後、玲が罪悪感を感じ、広樹に「別の男と寝た」と告白し、怒った広樹は玲を殴ってその場を立ち去る。そして、その蛇鏡は蛇神を冥界からこの世に引き出す力を持つことであり、女心を引き寄せる力でもある。その蛇鏡に魅入られ自殺すると、蛇神の妻となると伝えられている。それに、百人の蛇妻を呼び寄せると、蛇神が蘇るということを発見する。地元では蛇神を鎮める地元神社の祭りを「みぃさんの日」と呼ばれ、その日には巨大な蛇縄が作られ、神社に奉納されるということである。蛇鏡に執着を見せ始めた玲は、しばしば鏡の中に姉の顔や白い手が現れるのに気付くようになり、姉と同様の運命を辿りそうな気配を見せ始める。祭りの日、最後の百人目の妻に選ばれた玲は首に縄を巻きつけ間一髪のところで、広樹が助けに来るため、代わりに下半身不随の岩濠霧菜が死んでしまう。広樹が玲に二人の関係をやり直せると懇願するが、玲が昔の自分が死んでしまい、以前の生活はもう戻れない気がした。

交通事故に遭った一成と自殺未遂した玲と再会し、二人とも同じ日に死にかかり、生き返ったということがある。しかし、二人が抱きしめあう時から、一成の全身が熱くなり、蛇の形をした水濠が目に入り、急に喉が渇き、水を飲みたい衝動に駆られた。

そして、一成は指先の傷口が塞がりむず痒く、身体に力が漲ってくることを感じた。次に、一成の指先の皮膚が剥け、古い皮膚の下に新しく艶やかに輝く赤い鱗の肌ができ、声が「しゅううううっ」という蛇の吐く息があがることになる。

2.2 先行研究

坂東真砂子の『蛇鏡』は 1994 年の第 111 回直木賞の候補作である。選考委員の中で五木寛之は「小説の運命に果敢に挑戦しようという野心を感じた」とプラス評価しているが、ほかの委員たちからはその作品が受賞を認めない作品であると見られる。平岩弓枝は「怪奇をテーマにする作品は同じ筆法で何度も書いて行くと、どうしても二番煎じとみられがちである」と説いている。田辺聖子は「今回の作品は構成上、やや捻子の締め方が緩い、という気がするし、蛇のもつエロスがもっと出れば、と思った」と述べている。それに、藤沢周平は「古い怪異譚を現代に甦らせる試みはおもしろいけれども、文章に無駄が多くて、せっかくの興趣が殺がれてしまう」と評し、渡辺淳一は「今回の作品にかぎっていえば、いささかご都合主義が先行して荒すぎたようである」との評価がある。それに対して、川村湊は坂東真砂子の作品は「日本的怪談のパターン」を抜け出るものがないことに対して、現代社会にふさわしい新しい恐怖を描き出すこともなく、「古びたもの、とっくの前に廃れ、棄てられてしまったものを再び拾い上げ、再構築しよう」とし、そのような怪談における恐怖が逆に新鮮で生々しく感じられ、「『蛇鏡』や『蟲』は、古い「因果譚」と、蛇や虫という異類の動物に対しての人間の生理的な嫌悪感に根差したホラー小説」[307]であると指摘している。また、真銅正宏は、「坂東真砂子「蛇鏡」の蛇は、神話的な世界を強く喚起させ」、蛇の鏡とヒロインの姉が首を吊る縄、この二つの道具が蛇を連想させる道具として考えられ、「この小説は蛇という象徴体系によって見事に組み上げられた細工物」[308]と述べている。

---

[307]川村湊 1997「現代作家論シリ−ズ(第 9 回)坂東真砂子論−−「因果」の軛」『文学界』1997. 5 月号、P. 222-234

[308]真銅正宏 2016『触感の文学史— 感じる読書の悦しみかた』勉誠出版、P. 261-265

以上の評論からみると、『蛇鏡』に対する賛否両論の評価が含まれるが、その作品の中で拾った蛇鏡の象徴及び蛇鏡がヒロインにどのような影響を与えることについてさらに探求してみたい。

2.3 蛇の表象と人物関係

『蛇鏡』では、永尾玲は婚約者の広樹と姉の七回忌のために故郷の奈良へ帰り、姉の綾が首を吊った蔵の中で、玲はある珍しい蛇の浮き彫りの鏡を見つけると次のように述べている。

> **古代の鏡だとは思うが、それにしては珍しい模様だ。たいては中国の影響で龍が描かれているのに、ここでは蛇だ。それお花びらの形の環になっている。中国ではなく、どこか遠いところから渡ってきた品かもしれないな。**[309]

全編はホラー小説として、蛇神信仰をめぐる伝説による古代から蛇と人間の間に密接な関係があり、人々が生贄の動物を蛇神を捧げる。蛇神が蛇鏡を通じて女を妻として、百人の女性が妻になれば蛇神が蘇ることができると述べている。

> **蛇神は、蛇鏡を通して、冥界へと女を呼び寄せて妻とする。ひとり妻が増えるごとに、鏡の背後の蛇の鱗が一枚、赤く染まる。永遠を表す百の鱗がすべて赤く染まり、鏡の蛇が血の色に変わった時、この世に蛇神が蘇る。**[310]

それから、『蛇鏡』において、ヒロインの永尾玲と婚約者、姉及び浮気相手の間、それぞれの関係を分けて比べたい。永尾玲が元々婚約者の大宮広樹と亡くなった姉の七年忌に参加するため、一時帰省するつもりである。しかし、永尾玲が帰郷する間に姉のことを考えながら、自らの恋愛を改めて考え直し、婚約者に対する疑問を抱き、様々な問題も生じて来る。

---

[309]坂東真砂子 1994『蛇鏡』マガジンハウス、P.34
[310]坂東真砂子、前掲書、P.203

私は、広樹さんと結婚して幸せになれるんやろか……。これまで玲は、結婚すれば広樹との恋愛は完結すると信じていた。広樹という空を舞う凧の糸を、地上で握っていることができると思っていた。だが、はたしてそうだろうか。人が人を操ることなど、できるはずはない。彼が私を必要としない限り、今の一方通行の関係は踏襲される。私が彼を追いかけ、そんな私を彼が受け入れる、という関係。コンピュータのプログラムみたいなものだ。愛情の流れはいつも一回路。玲は皮肉な笑みを浮かべた。だから、広樹は常に余裕のある態度をとっていられる。鷹揚に愛を受け入れる博愛主義者。恋愛では、愛する者の立場は、愛される者の立場より弱い。私がいつも広樹に媚びるくらい、明るく無邪気に振舞っているのは、愛を求める側にいるからだ。[311]

上述から、ヒロインの玲が元々結婚を恋愛の終わり、幸せな行方だと思い込んでいた。それに、恋人の広樹との関係を凧糸と喩え、まるで運命の赤い糸のように、たとえ相手がどこへいっても、二人が結ばれている。しかし、玲が愛を求めることで、不安や疑いを感じられている。ヒロインがそのような愛されたい欲求から抜け出すため、アイデンティティークライシスに直面させられる。

また、玲が七歳年上の姉への過去の記憶を回想しながら、姉の綾は「箱入り娘」であり、「いい子」であり、誰にも迷惑をかけず、申し分のない存在であると言える。このような姉が家族や他人からの期待に応えようとするが、心の内面に実際はどのような思いを抱いているのか、孤独を感じるか妹を憎むのかを次のように推測している。

綾は「いい子」だった。両親と対立はすまい、誰にも迷惑はかけない。（中略）
姉は臆病だったのではない。家庭の中でひとり孤独だったのだ。継母と親しくなれず、父との間にも溝があった。そして妹の私は……やはり何の助けにもならなかった。七歳も年が下で、姉に甘えていただかだから。むしろ姉にとって私は、唯一の肉親であった父の愛情をも独占していた憎い存在だったのかもしれない。姉は孤独で、それを見せないでいるほどに強かったのだ。しかし、そんな姉がなぜ自殺という逃避手段を選んだのだろう。孤独から逃げ出さねばならないほど、姉は弱い人間ではなかったはずなのに……。[312]

[311]坂東真砂子、前掲書、P.68
[312]坂東真砂子、前掲書、P.89

いわば、姉は家族からの期待に応えようため、自らの感情を抑圧し続けていた。また、家族関係で再婚の父と継母との関係が希薄で、相談できる相手もなく、孤独と不安のあげく、自殺を選択してしまった。それに対して、玲の性格は姉の綾と正反対で、「子供の頃からお喋りで騒がしい子だ」、「沈黙に耐え切れない[313]」といわれた。

しかし、玲が選んだ婚約者の広樹は姉と同じく「他人の前でいつまでも黙っていられる人間[314]」であることに感心するが、「広樹と結婚して幸せになれるのか」という疑いを持つ。そして、婚約者に対する不満や不安を感じる玲が、八年前に片思いの田辺一成と再会し、蛇鏡をめぐって討論するうちに、二人の関係はどんどん深まり、それに、一成が「ほんというと、あの頃、僕、玲ちゃんに恋していたんだ[315]」という発言によって、玲も「私も田辺さんのこと、好きだったのよ[316]」との返事がある。二人の関係がとうとう浮気に走ってしまうことを次のように記述している。

> なんてことをしてしまったのだろう。広樹という婚約者がいるのに、一成とあんなことをしてしまうとは。しかも抱き合っている間中、広樹のことなぞ頭から消えていた。(中略)玲は、その激しさの中に自ら跳びこんでいたのだ。眩しいまでの真紅に輝く炎が、瞼の裏に見える気がした。それは、あの鏡の蛇の鱗の色だった。だがその炎が鎮まると、突然、広樹の存在を思い出して、後悔の念が湧き上がった。[317]

しかし、その後悔の思いの後、玲が「二つの人格に分裂」しているような感覚を、次に示す。

> 取り返しのつかないことをしてしまったのだと思った。たが一方で、先の交わりにまだ身体が火照っている。まるで二つの人格に分裂したようだ。罪の意識に苛まれている自分と、興奮の名残を満足気に味わっている自分とに……。そうなのだ。彼女が最も驚いたのは、罪の意識の希薄さだった。自分は一成と寝たかったのだ。そ

[313]坂東真砂子、前掲書、P.88
[314]坂東真砂子、前掲書、P.89
[315]坂東真砂子、前掲書、P.90
[316]坂東真砂子、前掲書、P.91
[317]坂東真砂子、前掲書、P.150-151

のことが彼女を愕然とさせていた。[318]

上述の内容によって、永尾玲は毎度人生に何か不可解な問題があるたびに、思ず自らの状況を亡くなった姉と比較しがちな様子から、実際に玲が姉の影に囚われると言えるだろう。『蛇鏡』において、ヒロインの永尾玲がある蛇の鏡を見つけて以来、物語がその蛇鏡をめぐって発展している。

以下の内容は永尾玲が広樹に愛される実感がなく、安心感がなく、かえって広樹のことが憎らしくなると描写する場面である。

そんな自分を感じるたびに、自尊心が傷つけられ、玲は腹立たしくなる。そして、彼女の精神的な葛藤に無頓着な広樹が憎らしくなる。憎らしくて、忌ま忌ましくて…もっと愛して、と叫びたくなる。膝小僧を抱えて座っていた玲の目が、窓辺の緋色の天鵞絨に止まった。彼女は、連子窓ににじり寄ると、布を開いて、鏡を取り出した。鏡の面に、丸いぼんやりした顔の輪郭が浮かんでいるだけだった。丸顔に大きな瞳。滲むように映る自分の顔を眺めながら、姉はこんな恋愛の苦しみを知っていたのだろうか、と思った。[319]

そして、もう一つ玲が鏡を磨きながら、亡くなった姉のことを考えている場面が次のようである。

玲は、自分の部屋に座って、鏡を磨いていた。（中略）ただ、鏡を手放すならなおさら、表面の曇りを少しでも取り除いておいてあげたい、と思った。姉もまた毎日のようにこの鏡を磨いていたのだ。玲は確信に近い気持ちを抱いた。真剣な眼差しで、弁柄の赤錆色に染まった指先に力をこめて、布できゅっきゅっと拭く姉の姿が頭に浮かぶ。[320]

『蛇鏡』において、ヒロインの永尾玲がある蛇の鏡を見つけた以来、物語がその蛇鏡をめぐって発展している。永尾玲が蛇鏡を磨くことを通して、姉に対する記憶を振り返りながら自身の状況と対比し続けていることが見られる。いわば、婚約がある玲が改めて

[318]坂東真砂子、前掲書、P. 151
[319]坂東真砂子、前掲書、P.48
[320]坂東真砂子、前掲書、P.53

自らの内面との戦い、二つの人格に分裂しているような感覚まである。この構図は『青蛇』と同じく、女性が伝統的な家父長制度による男性支配社会に閉じ込められてはなく、フェミニズムの思想に基づき、新しい女として主体性及びセクシュアリティを考え直している。

第 3 節『蛇を踏む』における蛇女との関係性

3.1 作品概要

川上弘美(1958-)は東京生まれ、5 歳から 7 歳までをアメリカ合衆国で過ごした。雙葉中学校・高等学校を卒業後、お茶の水女子大学理学部生物学科を専攻し、SF 研究会に所属している。1980 年に大学を卒業し、1982 年に雙葉中学校・高等学校で生物課の教員となり、1986 年までの 4 年間の教員生活を送った後退職した。結婚、出産を経て、主婦として 1994 年に『神様』でデビューし、1995 年に「婆」が第 113 回芥川龍之介賞候補作品となり、翌 1996 年に「蛇を踏む」で第 115 回芥川龍之介賞を受賞した。そのほかに、紫式部文学賞、伊藤整文学賞、女流文学賞、谷崎潤一郎賞などなど多く文学賞を受賞し、文学賞の選考委員も務めている。また、2013 年発表の 2012 年マン・アジア文学賞(Man Asian Literary Prize)において、センセイの鞄』の英訳(*The Briefcase*)が、トルコのノーベル賞作家 Orhan Pamuk(オルハン・パムク)の *Silent house*(*『静かな家』*)、パキスタン作家 Musharraf Ali Farooqi の *Between Clay and Dust*、マレーシア作家 Tan Twan Eng(陳團英)の *The Garden of Evening Mists*《夕霧花園》、インド Jeet Thayil の *Narcopolis* という四つの作品と共に最終候補に残ったが、受賞は逃し、*The Garden of Evening Mists*《夕霧花園》が受賞した。2015 年『水声』で第 66 回読売文学賞と 2016 年『大きな鳥にさらわれないよう』で第 44 回泉鏡花文学賞を受賞した。2019 年 5 月 20 日、令和で初となる春の褒章で紫綬褒章を受章した。紫綬褒章の受章者は計 21 人であ

り、女性 2 人だけで、もう一人の女性は歌手の石川さゆり（本名石川絹代）である。内閣府によれば、紫綬褒章の授与対象は「科学技術分野における発明・発見や、学術及びスポーツ・芸術文化分野における優れた業績を挙げた方」と述べている。

『蛇を踏む』は第 115 回(1996 年)に芥川龍之介賞を受賞した作品である。主人公のサナダヒワ子は藪で蛇を踏んだ。その蛇は五十歳の女に変身して、ヒワ子に食事を作り、ヒワ子の母さんと自称しながらヒワ子の家に住み始めた。そして、蛇はヒワ子を蛇の世界に入るように誘惑しつつある。それに、ヒワ子の周りには蛇と関わりのある人がたくさんいる。勤務先店主の奥さん、寺の住持と大黒さん、みんなが蛇の世界に入りたがっている。ヒワ子は周りの人々に影響されたが、ヒワ子はどうしても蛇の世界に入ることに抵抗があるため、その女と争いを続けながら互いに激しく首を絞めて部屋ごと流されてゆくようになったところで物語が終わった。

3.2 先行研究

川上弘美の『蛇を踏む』が 1996 年の第 115 回の芥川賞を受賞し、その中で選考委員は十二名のうち、女性選考委員はわずか二名しか含まれないことから、男性と女性の選考委員の選評[321]を分けてまとめていきたい。

日野啓三は「この作品は《蛇》と《人間》との神話的な戦いの物語であると同時に、自足的な《存在》と自覚的な《意識》との言語表現上の戦いの記録でもあって、この戦いも作者に永遠である」と作者の文章力が現代日本の若い女性たちの深層意識の見えない戦いを作り上げたと指摘している。丸谷才一は「この作者は、自然的世界において生きることと、それと対立する歴史的世界あるいは文化的世界において生きることとの関係について思つてゐるのだろう」、「ユーモアも質が高い。文章の足どりもしつかりしてゐる。乱れたところが一箇所もなかつた」と高く評価している。

[321]「第 115 回芥川賞決定発表」『文藝春秋』1996 年 9 月号、P.429-437

そして、黒井千次は「主人公の若い女性が抵抗し、蛇の世界を否定しよう」というところから蛇が人間を蛇の世界に誘うことが反変身的変身譚であると述べている。

田久保英夫は、「最初蛇が女に変わったり、また女に戻ったりする趣向に、昔からの登道成寺縁起や秋成の「蛇性の婬」、あるいは現代の作品さえ思い起こし、使い古されたような抵抗感を覚えた。しかし、この筆力は相当なもので、しだいにその抵抗を乗り越えさせ、色濃く関係や想念を展開し、私はときに立ちどまり、ときにひと息に読んだ」と述べている。さらに、池澤夏樹は、『蛇を踏む』は『今昔物語』以来の変身譚の系譜を踏まえてまとめた佳品といい、「いきなりの蛇の登場を読者に納得させるところはうまいし、ものすごい速さで流れてゆく部屋の中で蛇と互いに首を締め合っているという終わりも見事」であり、「この作の受賞には全面的に賛成」とまで言っている。

それに対して、三浦哲郎が「女と蛇という取り合わせは陳腐である」や宮本輝が「しょせん寓話しかない」、さらに石原慎太郎が「蛇がいったい何のメタファなのかさっぱりわからない」というマイナス的な評価も見られる。それから、女性の選考委員たちはどのように『蛇を踏む』を評価するなのかを見てみたい。大庭みな子は「これは蛇だ。蛇のようにとぐろを巻いてかま首をもたげている他人の気味悪さにぞくっとする」と評している。河野多恵子は、『蛇を踏む』が「いわゆる変身ものとは可成りちがう」と提起し、「この作品はそのような一つの例外もない絶対的な真実を、変身という裏返しの方法によって描いたものとして、興味深く読んだ。文章も自由に作者のものになっていて快い」と論じている。

松本和也が上述の芥川賞の選評に対し、「芥川賞の選考に際して、賛否こそ割れたものの、論点自体はある程度重なっていたことがわかる。（中略）「選評」ゆえに、「蛇を踏む」の具体的な様相（細部）については十分な議論がなされてはいない[322]」と述べている。

そこで、川上弘美が芥川賞 150 回の座談会[323]において、女性の受賞者が増えた理由と

[322]松本和也 2013『川上弘美を読む』水声社、P.56
[323]小川洋子・川上未映子・川上弘美・綿矢りさ「芥川賞 150 回記念大特集　作家の本音大き

して「時代はかわった」といい、芥川賞と直木賞は同じく初めて女性選考委員が入ったのは昭和 62 年(1987 年)のことで、「女性の選考委員が増え、因果関係は必ずしもまっすぐにつながるわけではないけれど、女性の受賞者も増え、いつしか「女流文学」という言葉もなくなっていきました」と述べている。川上未映子は「女性の選考委員が入ることで、賞の選考に新しい視点が増えた」と語っている。

芥川賞は 1935 年に成立以来、歴代の受賞者を性別による統計数字[324]からみると、2019 年まで合計の受章者が 171 名のうち、女性が 49 名である。それに、1987 年の第 97 回芥川賞の女性選考委員が増えた後、女性の受章者が 31 名があり、いわば 1987 年以前の 50 年間、女性の受賞者がわずか 18 名であると示している。

吉本隆明の『共同幻想論』では、「〈巫女〉は、共同幻想を自己の対なる幻想の対象となしうるもの」と定義し、「村落の共同幻想が巫女にとっては〈性〉的な対象」である。

また、「巫女における〈性〉行為の対象は、共同幻想の凝集された象徴物であり、それは神、ひと、狐、仏像などでありうる[325]」と述べている。それに、『遠野物語拾遺』の巫女譚を取り上げ、蛇を「この家の娘を嫁にほしい淵の主のお使い」というのは伝承された共同幻想であり、「共同幻想の象徴である〈蛇〉が〈娘〉と〈性〉的に結び付け[326]」て考えられていることである。『遠野物語拾遺』における巫女譚は「日本民族譚にあらわれた対幻想と共同幻想の特異な関係[327]」を象徴すると指摘している。

そして、カトリン・アマンは『蛇を踏む』で蛇の登場がヒワ子の日常生活を転換し、非日常の空間で蛇と暮らすようになる。そこで、『蛇を踏む』における現実と幻想などの二項対立が不明になり、無意識の具現化になると、次に示す。

> 『蛇を踏む』は、身体および外面と精神および内面、現実と幻想、私と共同などの様々な二項対立に解体される。蛇という中心的な記号さえ、一つの意味に限定して解

座談会」『文藝春秋』2014 年 3 月特別号、P.292

[324]芥川賞受賞作家の群像: https://prizesworld.com/akutagawa/jugun/gender.htm#female_161（2020 年 1 月 15 日更新）

[325]吉本隆明 1968『共同幻想論』河出書房新社、P.93

[326]吉本隆明、前掲書、P.96

[327]吉本隆明、前掲書、P.98

釈することはできない。蛇は、主人公の内面および無意識を具現化する分身として解釈できるし、様々な神話的な原型つまり集合的無意識の具現化としても考えられる。私的なものと共同的なもの、現実と幻想などの境界が不明になりつつある。[328]

上述の内容をまとめると、伝承の中で共同幻想の象徴としての蛇を女性と性的に結びつけ、現実と幻想の境界が不明であると指摘している。

『蛇を踏む』から「蛇と女」、「変身」などのキーワードが見られ、蛇と女との関わりは道成寺縁起、『今昔物語』や「蛇性の婬」など変身譚の作品を取り上げながら、『蛇を踏む』の中に若い女性が蛇の世界に入ることに対して、最後まで「お互いに首を激しく締めあう」ことで抵抗するような反応が見られる。特にこの作品でヒロインと蛇の関係性について考察したい。

3.3 蛇の表象と人物関係

『蛇を踏む』では蛇の登場がヒワ子の日常生活を変えはじめる。ある日、ヒワ子が仕事帰りに帰宅すると、ある人間に変身した蛇が母親の役割を演じながら、ヒワ子に晩御飯を用意する。ヒワ子はその蛇の影響で慌てて実家の母に電話することを次のように表現する。

> 「あなた何ですか」つづけて、聞いた。するりと聞くことができた。
> 「ああ。わたし、ヒワ子ちゃんのお母さんよ」（中略）
> 母は故郷の静岡に健在だった。父も健在である。弟が二人、地元の大学と高校に在学している。母の顔はテレビで母親役をやることの多いなんとかいう女優に似た日本人の平均的な顔である。女は西洋的な彫りの深い顔だった。睫毛がひどく長い。頬骨が高く、目や口のまわりの皺が皮膚の薄さを感じさせた。急に心配になって実家に電話をかけるために立ち上がった。番号がうまく思い出せなくて、二回かけそこねた。夢の中でうまく電話をかけることができないときに似ていた。「もしもし」三回目で母が出て、電話の向こうで「あらヒワ子ちゃん」などと言う。[329]

---

[328]アマン・カトリン 2000『歪む身体現代女性作家の変身譚』専修大学出版局、P.135
[329]川上弘美 1996『蛇を踏む』文藝春秋、P.14-15

上述をみると、なぜヒワ子がその蛇女から「私はヒワ子の母さんよ」と聞き、急に不安になり、実家の母親の声を聞きたかったのか。ヒワ子は実家の電話番号をうまく思い出せないことからみると、ヒワ子は実家にあまり連絡することなく、家族との関係は薄いと推測できる。それに、実母の容貌を「日本人の平均的な顔」としか表現できず、その見知らぬ女に対しては「西洋的な彫り、長い睫毛、皮膚の皺」などかなり細かく描写している。

佐藤泉は「抱きしめること、覆われることとが満ちた気持ちのなかで区別しがたなくなるような主客未分、自他未分の感覚。こうした感覚は、母子癒着という比喩で語られるのが通例である[330]」と指摘している。いわば、本当の母が静岡にいることを知っていても、蛇の言葉に影響され、つい実母に電話を掛けてみる。

しかも、その蛇から変身する女性はヒワ子の前で蛇の正体に戻り、蛇の様子で家に棲み込んでくると言っている次のように述べている。

> 「もう寝るわ」突然女が言って、食べたものを片づけもしないで、部屋に一つだけある柱にからまった。どういう仕掛けになっているのか、女の体は薄くなって柱にぴたりと貼りつき、するすると柱にからまりながら天井に登った。天井に登ってしまうとそこで落ちつき、いつの間にか蛇に戻った。天井に描かれた蛇のようなかたちになって、目を閉じた。それからはいくら話しかけても長い棒を持ってきてつついても、動かなかった。朝になっても蛇は同じところにじっとしていた。[331]

次に、『蛇を踏む』において、ヒワ子が実母や家族より蛇女が演じる母親役との間に「壁がない」と次のような場面がある。

> コスガさんの言うコノゴロノワカイヒトと話をするときにも壁はあって、たとえば私が教師をしていたときの生徒だとか同僚だとか、それを言うなら母にも父にも弟

[330]佐藤泉「古生物のかなしみ『蛇を踏む』」『総特集川上弘美読本』ユリイカ 9 月臨時増刊号、青土社、2003.9、P.121-122
[331]川上弘美、前掲書、P.17-18

に対しても、薄かったり厚かったりするが壁というものはあって、壁があるから話ができるともいえるのであった。蛇と私の間には壁がなかった。[332]

そこで、蛇から変身した女性がまさにヒワ子の母親役を果たしている。

星野久美子は作品発表の背景において、近代家族が大家族から核家族や単身世代などに変容することで『蛇を踏む』という作品が広く受け入れられ、家族は血縁で結ばれている関係と次に示す。

蛇が何なのかといえば、ヒワ子が切り捨ててきた自己の価値観になじまないもの、異界の住人であるといえよう。（中略）考え方も価値観も趣味も異質で、ともに語り合うべきものごとを何も持たないような何人もの人々が、血のつながりをのみ理由として生活を共にするのが家族というものだが、この蛇の変じた女も夕食を用意し、ヒワ子と≪団欒≫の時を持ちながら共有する話題の一片だに持たない。正に家族そのものである。[333]

そして、松本和也は蛇女が「あたかも長らく生活をともにしてきた母のように、ヒワ子の日常生活に溶け込んでいる」という状態になり、その理由とは「ヒワ子を蛇の世界に誘うため」であると考えられるが、「蛇の世界がどのようなものかについては、蛇/女やと他の登場人物を含めて、「蛇を踏む」の中に具体的な説明や描写はない[334]」と指摘している。

それに、物語の進展につれ、蛇女は何度もヒワ子を「蛇の世界に誘う」という以下の表現が見られる。

「ヒワ子ちゃん、蛇の世界はあたたかいわよ」うんうんと頷くと、女はつづける。「ヒワ子ちゃんも蛇の世界に入らない？」[335]

「ヒワ子ちゃん蛇はいいわよ、蛇の世界は暖かいわよ。」[336]

---

[332]川上弘美、前掲書、P.27
[333]星野久美子「蛇を踏む」、原善編 2005『川上弘美』鼎書房、P.31
[334]松本和也、前掲書、P.60-61
[335]川上弘美、前掲書、P.34
[336]川上弘美、前掲書、P.48

ヒワ子が「蛇の世界」に対して、心境や反応はどのように変換するのか。最初は「蛇の世界にはそれほど魅力を感じな[337]」いと思い、次第に「私の奥にある固いものがどうしても私を蛇に同化させてくれない[338]」に変わり、結末では「蛇の世界なんてないのよ[339]」と明確に考えを言葉にして伝えるようになるといえる。

しかし、ヒワ子と蛇女の関係性は母と娘という家族関係のほかに、同性愛や異類婚に疑似する論点もある。これまでの論述ではよく二人の関係性が家族関係として見なされることに対して、千石英世は「川上弘美の作品は、全て性愛をテーマとしている」[340]を提示しながら、「蛇を踏む」における蛇が女性同性愛世界の使者で、ヒワ子は同性愛世界を拒否すると次に述べている。

> 「蛇を踏む」のサナダヒワ子。かの女のもとを訪ねて、母を自称する蛇は、女性同性愛世界からの使者であるが、使者は「ヒワ子ちゃん」の性愛的性の発現を女性同性愛世界に実現させようと誘うのである。「蛇を踏む」は、そんな「ヒワ子ちゃん」の同性愛的世界への親炙と抵抗の熾烈なせめぎ合いを描く小説である。他の女性人物たちといえば、ジェンダーの上での性においては異性愛世界に所属しながら、性愛の性では同性愛世界に耽溺する人物であって、いわば二重世界を生きている女性たちである。サナダヒワ子氏は、それを受け入れることができない。[341]

また、大塚英志が『蛇を踏む』において、蛇のふるまいから明らかに「異類婚」の物語であると次に示す。

> 「私」のもとに現れた「蛇」もまたあれこれと「私」の身の回りの世話をするのだが、問題なのは、「蛇女房」の物語は本来は男の身の上にふりかかるべき物語であるのにも関わらず女である「私」の上に発動しているということだ。[342]

---

[337]川上弘美、前掲書、P.35
[338]川上弘美、前掲書、P.49
[339]川上弘美、前掲書、P.59
[340]千石英世 2004『異性文学論―愛があるのに』ミネルヴァ書房、P.231
[341]千石英世、前掲書、P.244
[342]大塚英志 2004『サブカルチャー文学論』朝日新聞社、P.314-315

『蛇を踏む』で登場人物の関係性について、松本和也は「〝変形譚〟として多様な解釈を誘うと同時に、現実世界の反映/模写であるという面もあわせもつ」と述べながら、「ヒワ子との関りをはじめとした、作品世界での関係も視野に収める必要がある」[343]と指摘している。それから、ヒワ子がようやく「蛇の世界なんてないのよ[344]」を言い出すと、蛇女の態度もどんどん変化し続けていると次に示す。

「こちらに来ればわかるのよ。来ないで何を言うの」[345]

「ヒワ子ちゃん、だってあたしはあなたのお母さんなのよ」[346]

「ヒワ子ちゃん、いいかげんに目をさましなさい」[347]

上述から、蛇女の「来ればわかる」では、ヒワ子の好奇心を刺激するためである。それから、「あたしはあなたのお母さん」ではヒワ子が母親に言いなりするべきだと考える。しかし、ヒワ子は蛇女の言葉に信じるところか、反発し続けている。蛇女が腹を立ち、「いいかげんに目を覚ましなさい」と言い出し、ヒワ子に首を絞めると次に示す。

女はぐいぐい首を絞める。気持ちいいだか苦しいんだか、女は相変わらずへんな顔だ。それならばと思って女の首を絞め返す。青く放電するものであたりは目も開けていられぬほど明るく輝き、その中でわたしと女は互いに同じくらいの力で首を激しく締めあう。部屋はものすごい速さで流されてゆく。[348]

ヒワ子と蛇女との状態から、押山美知子は「〈蛇〉と〈私〉の終わりなき争いは、まさに女の歴史そのもの[349]」であると述べている。佐藤泉は近代化運動で個の自立により母親に複雑な愛憎を形成し、「母子癒着」[350]と喩えることを指摘している。

---

[343]松本和也、前掲書、P.73-74
[344]川上弘美、前掲書、P.59
[345]川上弘美、前掲書、P.60
[346]川上弘美、前掲書、P.60
[347]川上弘美、前掲書、P.62
[348]川上弘美、前掲書、P.62
[349]押山美知子「蛇を踏む―女たちの果てしない戦い」、原善編 2005『川上弘美』鼎書房、P.29
[350]佐藤泉「古生物のかなしみ『蛇を踏む』」『総特集川上弘美読本』ユリイカ 9 月臨時増刊

また、大塚英志は異類婚を「異類との婚姻は破綻に終わるのが定石だが、男の物語と違い女の物語はこのように異類の男の殺害によって終止符を打たれる[351]」と解釈し、『蛇を踏む』の結末で蛇女を殺害することを「女の異類婚」の必然であると述べている。

> 『蛇を踏む』の最後で「蛇」と「私」は互いに首を絞めあう。彼女は何故、「蛇」を殺さなくてはならないのだろう。（中略）何故なら男たちは異類の女たちとの禁忌をただ破るだけだが、他方では昔話の世界に於て女たちは異類の夫をしばしば「成熟」のために殺害するのである。とすれば「私」と「蛇」が互いに向けあう殺意は「男の異類婚」から「女の異類婚」への物語の修正を意味してはいないか。[352]

結末の場面描写から、松本和也は蛇女の気持ちや二人の闘争の場面も「つねに反転可能性をひめた両義性を孕んでおり、しかもたやすく反転する」のゆえに、「この争闘には終わりがない」[353]と論じている。上述から、ヒワ子は家族との関係が薄いため、蛇から変身した女性がヒワ子の「代理の母親」の役割を果たすことによって、ヒワ子を蛇の世界に誘っている。また、ヒワ子が実母や家族より蛇女が演じる母親役との間に「壁がない」と感じながら、その間蛇女は何度もヒワ子を蛇の世界に誘い続けている。その後ヒワ子の心境も変化し、初めは蛇の世界に魅力がないと感じているから、蛇に同化しないという考えに変わり、最後は「蛇の世界なんてないのよ 」と明確に考えを言葉にして伝えるようになる。要するに、ヒワ子が直接的に拒否を表現し、自らの意見をありのままに発話できると言える。

号、青土社、2003.9、P.122
[351]大塚英志、前掲書、P.321
[352]大塚英志、前掲書、P.319-320
[353]松本和也、前掲書、P.66

第 4 節『異類婚姻譚』における夫婦関係

4.1 作品概要

本谷有希子(1979-)は石川県に生まれ、高校時代に演劇部に所属する。1998 年に上京し、ENBU ゼミナールの演劇コースに入学し、松尾スズキのクラスに在籍する。元々役者を目指して入学したが、クラスの卒業公演で初めて台本を書いたことがターニングポインとなり、劇作家、小説家、演出家などを兼ねる。2000 年、「劇団、本谷有希子」を旗揚げし、主宰している。2006 年に戯曲『遭難、』で第 10 回鶴屋南北戯曲賞を史上最年少で受賞し、2009 年『幸せ最高ありがとうマジで!』で第 53 回岸田國士戯曲賞を受賞した。文学作品の受賞において、2011 年第 33 回野間文芸新人賞（『ぬるい毒』)、2013 年『嵐のピクニック』で第 7 回大江健三郎賞、2014 年『自分を好きになる方法』で第 27 回三島由紀夫賞、2016 年『異類婚姻譚』で第 154 回芥川龍之介賞を受賞した。その中に、芥川賞、野間文芸新人賞、三島由紀夫賞の三賞は純文学の新人賞において「三冠」と呼ばれ、2016 年の芥川賞の受賞で純文学新人賞の三冠作家となる。

『異類婚姻譚』の表題作である「異類婚姻譚」は、以下のような物語である。

ヒロインのサンちゃんが専業主婦四年目のある日、旦那の顔とそっくりになっていることに気づく。同じマンションの 60 代後半のキタエさんに伝え、彼女から古い友人夫婦と 10 年ぶりに再会したら、もともと似ていなかった二人が双子みたいにそっくりになるが、さらに 10 年後にまた会うと、似ても似つかぬ他人に戻っていたというエピソードを語っている。その原因として、その妻が自分の身代わりに部屋に置いていた石が夫に似ていったのだという。

そして、ある日サンちゃんと旦那は定食屋から出て歩く途中で彼が道に痰を吐き、それを見た掃除中の中年女性が、絡んできて警察を呼ぶとまで言うため、サンちゃんがハンカチを取り出して何度も地面の痰を拭き取ろうとする。それから、キタエさんは愛猫サンショの粗相がますますひどくなり、とうとう手放し、山へ捨てに行くことを考えて

いるという。サンちゃんが山と聞いて、ふと新婚旅行先のアンデスの山でのことを思い出す。旦那がテレビでマチュピチュ遺跡の映像をたまたま見て、新婚旅行先を南米大陸にすると決める。しかし、サンちゃんが場所を調べると辿り着くにはかなりハードな旅であり、体力をつけておくべきだと考え、夜のウォーキングを始める。旦那があっという間に歩くことをやめ、いざとなったら、サンちゃんが代わりにビデオを撮ってきてという。ところが、行き先に着いてみると、ほかのツアー客が次から次へと不調になるのに、旦那だけが羽が生えたように歩き回っている。そして、ある日、弟のセンタが 10 年以上同棲している相手ハコネちゃんに、なぜ結婚しないのかと尋ねると、結婚って、相手のいいところも悪いところも飲みこんでいくんでしょなどと言い、蛇ボールの話にもふれる。二匹の蛇が相手のしっぽをどんどん食べていって、最後は頭と頭だけのボールみたいになり、そのあと互いに食べられてきれいになくなるというイメージである。

サンちゃんの旦那が再婚で、元妻の前にいろいろと格好をつけて疲れたから、サンちゃんの前ではありのままを見せたいとえらく真剣に打ち明ける。しかし、ある日、サンちゃんが午後 4 時前に帰宅すると、旦那が会社を早退してゲームに興じている。旦那は最近体がだるい、俺が死んだらどうするなどと聞き、それ以来旦那の具合はよくならなかった。サンちゃんが旦那のことをキタエさんと話した後、買い物をして帰宅すると、料理をしたことのなかった旦那が会社を早退していて、キッチンで揚げものを作っている。その後、旦那の奇行は続き、毎晩揚げものを食べさせられる。サンちゃんがキタエさん夫妻と猫捨てに付き合って山へ向かい、キタエの旦那のアライとサンちゃんが喋りながら猫をある大きな岩場を捨てることにする。そこで、アライはキタエが猫に準備してあげたリュックの中からいろいろなものを取り出し、そこには猫用のドライフード、缶詰、皿、愛用の毛布やおもちゃなどがある。戻ると、アライが目が真っ赤に腫れているキタエに猫がちゃんとした場所に逃してきたから大丈夫と伝える。その後キタエ夫婦はサンフランシスコに戻ることにしたという。

それから、サンちゃんは旦那に本音をぶちまけ、どんどん言葉が体から吐き出されるようになる。サンちゃんが旦那に私に似るのではなくて、あなたはもっと、いいものに

なりなさいというと、旦那の体が激しく震え出し、一輪の白い山芍薬になってしまう。

結局、サンちゃんがその山芍薬を山まで還しに行く。翌年、サンちゃんが山芍薬になった旦那に会いに行くと、白花が涙は出るほどきれいな姿でいきいきと咲かせていた。サンちゃんが心ゆくまで過ごし、立ち上がると、二輪の花がよく似ていることに気付き、どちらが旦那がわからなくなり、逃げるように岩場を離れ、山を下りた。

4.2 先行研究

次に、本谷有希子の『異類婚姻譚』は滝口悠生の『死んでいない者』と共に、2016 年の第 154 回芥川賞の受賞作に選ばれた。当時九人の選考委員の中に男女の割合を見ると、男性が五名、女性が四名である。以下は選評の内容[354]をまとめる。

村上龍は『異類婚姻譚』について、「技術がしっかりしていて、ディテールにも無理がなく、好感が持てる作品」であり、物語のラストは「考え抜かれた小説だ」と判断し、受賞作として推すと述べている。宮本輝は「夫婦の顔が似てくることへの気味悪さが、なんだかほっこりとした感情を呼び起こすのが不思議」であり、「本谷さんは小説家として一皮剝けた」と評価している。山田詠美は「これまでの作品のお騒がせドラマクィーンが引っ掻き回す印象とうって変わって、何とも言えないおかしみと薄気味悪さと静かな哀しみ」のようなものが魅力的にまとめ上げていると指摘している。

小川洋子は「旦那が醸し出す空気は気持悪いが、そういう夫を深く考えず丸飲みする妻は更に不気味だ」といい、「説話の形を借りることで、主人公の自意識が上手くコントロールされていた」と論じている。川上弘美は小説にとって、「何」を「どのように」書くのかが大きな問題である。「『異類婚姻譚』にも、あざやかな「何」と「どうやって」の協同があった。惜しむらくは、きれいに協同するあまり、作者にも予想できない「のび」のようなものがなかった」と説いている。

[354]「第 154 回芥川賞決定発表」『文藝春秋』2016 年 3 月号、P.356-365

そして、物語の最後の部分である「男性が山芍薬に変わる」ことについての評論が一番多いと次のように述べている。

高樹のぶ子は［美と不気味さ］が「譚」の成立要素であり、山芍薬に変身した男が心地良さそうにひっそりと花を咲かせる風景の美しさが日本説話の伝統から流れ来る地下水脈で、作者は意識しないまま汲み上げてしまったと考えている。しかし、「登場人物をすべてカタカナにしたところで、この支配から自由にはなれない。日本人が日本語で小説を書くとき、下手にあらがわず、素直に和名をつかった方が良い」と指摘している。

島田雅彦は「この脱力ぶりは新境地開拓かと期待したが、夫が芍薬に姿を変えてしまうオチに気持ちよく裏切られた。しかし、このように気に入らない相手をたおやかで人畜無害なものに変えてしまえる魔法が使い、読者の妄想のスイッチを入れる効果はあった」と説いている。堀江敏幸は「女房になりたい旦那。その旦那に似てしまう女房。合一の危機を回避するには、あいだの橋を破壊するしかない。砕けて生まれた一輪の山芍薬は、異類ではなく立派なホモサピエンスだ。そこが切ない」と提起している。

奥泉光は「奇を衒うことは、小説と云うものの基本である」といい、だが「最後、夫が芍薬の花に変身するところを頂点に、説話の持つ「異界」への感覚がどこまで描き出せているか」と考えている。また、春日武彦は「夫婦が次第に似て来るというありがちな現象と、日々の生活に微妙に紛れ込む違和感。その辺を出発点にして、伝承や昔話的な文脈と現在的な日常生活とを同居させる。偽物と本心、あるいは類似、同化、変身といったキーワードで組み立てられたいかがわしげな世界へ読者を連れて行ってくれる作品[355]」であると評価している。

さらに、永井里佳は「変身はその延長線上に位置する、夫婦それぞれが抱く現状への不全感の象徴と捉えることができる」[356]と論じている。

まとめてみると、最初は夫婦の顔が似ているところから、気味悪さや静かな哀しみの

---

[355]春日武彦・清水良典・沼野充義 2015「〈創作合評〉(第 477 回)」「異類婚姻譚」本谷有希子/「手のひらの海」朝比奈あすか/「前世は兎」吉村萬壱」(『群像』12 月号、P.274-275

[356]永井里佳 2017「本谷有希子「異類婚姻譚」試論 ： 階層・属性・結婚」日本文学協会近代部会『近代文学研究』第 30 号、P. 63

雰囲気が漂い、ラストでは最も興味深いところが女主人公であるサンちゃんの旦那が山芍薬に変身してしまうことである。夫が変身することで、伝承や昔話と現代的な日常が簡単に融和し、物語の伏線または延長線が推測される。また、夫婦関係において、対話の必要性とコミュニケーションの能力が極めて重要だと考えられ、夫が山芍薬に変化することも妻との対話を拒否すると考えられる。そのような意外な設定から、人間が植物の山芍薬に変じることで何かを暗喩または象徴するのかを探求してみたい。

4.3 蛇の表象と人物関係

『異類婚姻譚』では「ある日、自分の顔が旦那の顔とそっくりになっていることに気が付いた[357]」から物語の展開し、その顔がそっくりな夫婦の話を同じマンションに住む老女のキタエさんに伝えると、キタエさんも昔知り合いの夫婦が「双子みたいに、そっくりになってたのよ[358]」との出来事を教えてくれる。しかし、そのそっくりな夫婦が十年後の変化はもっと似ているのではなく、かえって「彼らが元の、似ても似つかぬ他人に戻っている[359]」と喋っている。

専業主婦のサンちゃんはある日、サンちゃんが弟の彼女のハコネちゃんに弟との結婚話を持ち出し、ハコネちゃんは結婚のイメージを蛇ボールと考えることを次のように表す。

> そうだ、おねえさん、蛇ボールの話、知ってますか？私、それ、何で読んだのかなあ。昔、誰かに教えてもらったんだっけかなあ。二匹の蛇がね、相手のしっぽをお互い、共食いしていくんです。どんどんどんどん、同じだけ食べていって、最後、頭と頭だけのボールみたいになって、そのあと、どっちも食べられてきれいにいなくなるんです。分かります？なんか結婚って、私の中でああいうイメージなのかもしれない。[360]

[357]本谷有希子 2016『異類婚姻譚』講談社、P.7
[358]本谷有希子、前掲書、P.12
[359]本谷有希子、前掲書、P.14
[360]本谷有希子、前掲書、P.51

それから、『異類婚姻譚』における、ヒロインのサンちゃんと旦那や近所の奥さんのキタヱさんとの関係性から探っていくことにする。

まず、初婚のサンちゃんと再婚の旦那との関係について、旦那の元妻と比較し、旦那が「本当の俺を見せたい」というセリフを、次に示す。

> **結婚前は、この趣味嗜好を必死で隠していたのだ、新婚まもなく、話があるからと座らされ、居住まいを正した旦那に私はこう言われた。「サンちゃん、俺は、テレビを一日三時間は観たい男だ。」私は初婚だが、旦那はすでに一度結婚に失敗している。前の奥さんの前ではだらしなさを隠し、いろいろと格好をつけてしまったせいで疲れてしまったらしい。それで、サンちゃんには本当の俺を見せたい。えらく真剣に打ち明けるので、私もうっかり喜んでしまった。**[361]

一見、二人の夫婦関係において、旦那がありのままの自分でいられるし、何も格好をつける必要もないし、しかも思い存分にテレビも見られるといったところからみれば、サンちゃんはかなり旦那に自由を与えるはずである。しかし、サンちゃんは男性たちとの関係性に対し、自分が植物の根、男性が土の養分に喩えることで、親しい関係を持つ男性によって自分が取り替えられることを、次に示す。

> **というのも、これまで私は誰かと親しい関係になるたび、自分が少しずつ取り替えられていくような気分を味わってきたからである。相手の思考や、相手の趣味、相手の言動がいつのまにか自分のそれに取って代わり、もともとそういう自分であったかのように振る舞っていることに気付くたび、いつも、ぞっとした。やめようとしても、やめられなかった。おそらく、振る舞っている、というような生易しいものではなかったのだろう。男たちは皆、土に染み込んだ養分のように、私の根を通して、深いところに入り込んできた。新しい誰かと付き合うたび、私は植え替えられ、以前の土の養分はすっかり消えた。**[362]

いわば、サンちゃんが男性との対応から夫婦関係に至るまで、いつも相手に応じて変化や調整し続けているといえる。

---

[361]本谷有希子、前掲書、P.20
[362]本谷有希子、前掲書、P.52-53

それから、ある日、サンちゃんの夫がいつもの癖で痰を道端に吐き捨てるところ、道を掃除いていた女性に目撃され、夫がその女性に呼び止められることがある。夫が謝っても許してくれなく、住所を教えろ、警察を呼ぶなどで激怒し続け、サンちゃんの助けを求める。そこで、サンちゃんが夫の行為を謝り、しかも地面にある痰を片付けようとする様子を、次に示す。

> 「待ってください。今すぐきれいにしますから。」私は慌ててハンカチをバッグから引っ張り出し、地面にしゃがみ込んだ。炎天下のアスファルトは、弱火にかけたフライパンの底のように熱い。電柱の脇に、痰が吐かれた形跡を見つけたので、私はその痰をそっとハンカチに包むようにして拭い、さらに地面をごしごしと何度も擦った。立ち上がってから、もう一度、「すみませんでした。」と深々と頭を下げて顔を上げると、女性は無表情で私のことを見ている。注がれている眼差しの種類が、さっきまでのものと明らかに違うことに戸惑った私は、すみませんでした、とさらにもう一度頭を下げた。[363]

サンちゃんはそこまで夫の行為の後始末をしたのに、夫は妻に感謝するどころか、逆に他人事のように「災難だったなあ」、「あんなババアに絡まれるなんて、サンちゃん、ほんと、ツイてなかったなあ[364]」と言うしかない。その事件はのちほどの夫婦関係に影響を与え、サンちゃんが夫婦関係に疑問を抱き、本音を言い出せるようになるといえるだろう。

> 私は旦那の背中に向かって話しかけた。（中略）無理して、人の形でいなくったっていいじゃないの。私は酔いと頭痛に任せて、本音をぶちまけた。今まで食べさせられた揚げものと同じだけ、どんどん言葉が体から吐き出されるようだった。[365]

やがてヒロインのサンちゃんが本音を言えるようになったとたんに、奇妙な言葉が次から次へと飛び出し、「あなたはもう、旦那の形をしなくていいから、好きな形になりな

[363]本谷有希子、前掲書、P.30-31
[364]本谷有希子、前掲書、P. 31
[365]本谷有希子、前掲書、P. 107

さいっ[366]」と叫んだ瞬間、なんと夫が一輪の山芍薬に変身することになる。

そこで、夫が「山芍薬に変身する」ことに対して、どのようなイメージや意味が含まれるのか。まず、〈創作合評〉[367]の内容を次のように取り上げる。

春日武彦は山芍薬のイメージはきれいで、怖くて魅力的だが、「夫が胸の底で山芍薬になりたかった」かどうかについての説明がなしで、ほかの植物ではなく、山芍薬「必然性を感じさせるような書き方にしてほしい」と指摘している。沼野充義も最後の場面で「山芍薬に変身するはちょっと怖い終わり方」と述べている。

そこで、永井里佳は二人の夫婦関係は夫との依存から同化へと進める一方、妻の本音を出すことと、夫の山芍薬への変化からみると、二人は不安を感じるが、コミュニケーション拒否することを次に示す。

> 彼が自己消滅をも辞さずに現在の「人間らしい生活」の維持を捨て去ったこと、意志疎通(ある程度)できる動物ではなく植物が選択されたことは、夫婦のコミュニケーション回路不在の象徴であることを指摘したいと思う。(中略)夫婦は各々が現状に対して不全感を持っているが、二人の間に対話や協力はなく、模倣や依存のみが在る。[368]

そこからみると、夫婦関係において、たとえ相手の要求や期待に沿うようになっても、その関係を維持し続けることができるわけではない。最も必要なのは意志疎通とコミュニケーションができることであると言える。しかし、この「コミュニケーション拒否する」構図は第二章と第三章にも見られる。第二章ではコミュニケーション不全で蛇女であるヒロインから逃避するまたは対抗することになる。第三章ではコミュニケーション不全と対話の拒否でヒロインに責任転嫁することである。

そして、ここでサンちゃんは夫を夫としての家族的な役割から解放し、山芍薬に変身することを尊重すると言える。そこで、たとえ同じく「コミュニケーションを拒否す

---

[366]本谷有希子、前掲書、P.108
[367]春日武彦・清水良典・沼野充義 2015「〈創作合評〉(第 477 回)」「異類婚姻譚」本谷有希子/「手のひらの海」朝比奈あすか/「前世は兎」吉村萬壱(『群像』12 月号、P.274
[368]永井里佳 2017「本谷有希子「異類婚姻譚」試論 ：階層・属性・結婚」日本文学協会近代部会『近代文学研究』第 30 号、P. 71

る」男性がいるにもかかわらず、今度のヒロインがもう男性に束縛されなくなる。

上述の四作から、共通点をまとめていきたい。まず、ヒロインたちが伝統的な女性像から逸脱し、女性の自覚と発話権が現れている。そして、女性の内面や心境を語ることにより、物語が必ずしも悲劇になるわけではない。

《青蛇》において、主役の青蛇が男主人公の許仙を殺すことで物語を逆転する。また、白蛇の息子が白蛇を雷峯塔から解放されている。

『蛇鏡』では永尾玲が婚約を破棄し、不倫相手の田辺一成が蛇の様態に変形していくことで物語が終わる。『蛇を踏む』においては、男性主人公の不在または欠如をものともせずに、ヒロインが成熟していく。男性がいなくても、女性は成長できるのである。

『異類婚姻譚』ではサンちゃんの夫婦関係から、女性が相手に応じて自分の好き嫌いを押し殺しても関係を維持できないことが描かれている。

さらに、四作では家族の多様性とセクシュアリティの多元性を示している。たとえば、《青蛇》では青蛇がほかにある三人と関係を持ち、恋愛感情は性別に限らず異性でも同性でも成立する。『蛇を踏む』ではヒロインと変形した蛇女と血縁関係がなくても家族より深い関係を構築している。

終章

終章では、本論文の内容をまとめ、結論を述べた上で、今後の課題について述べる。

序章では、研究背景と研究方法を述べ、日中の「異類」の定義を概観し、本論文の構成について記述した。

第一章では蛇をめぐる日中の言説を概観し、異類婚姻譚の類型と先行研究をまとめた。中国の昔話において、蛇は常に神聖なる存在だと考えられてきた。祖先神の伏犠と女媧という人面蛇身の夫婦神は、《山海経》や《楚辞》では人類の祖先と見なされている。《山海経》の海外北経には人面蛇身の「燭陰」という神も登場する。一方、日本の神話にも蛇が登場する。『古事記』や『日本書紀』では、八岐大蛇や肥長比売のエピソードが語られ、伊邪那岐命が伊邪那美命を地上に連れ戻すために黄泉の国に行った際、伊邪那岐命は腐った妻に蛇の姿の雷神がまとわりつく様を見て逃げ出す。三輪山伝説・賀茂神話、緒方三郎伝説やその類型といった、数多くの蛇との交婚譚や蛇を祖神とする話が数多く存在し、大地母神、豊饒神も蛇神と結びついていることがわかった。

蛇のイメージを考察するためには竜蛇信仰にも触れる必要があるが、インド、中国、台湾と日本に広まった竜蛇信仰では竜と蛇は同じく水神として見られ、再生と不老長生の象徴があると考えられてきた。龍は非実在で想像上の動物であるが、各文明と歴史の影響によって龍に対する思想や表現が異なっている。東洋では龍は大蛇崇拝と仏教思想の影響で龍神として神格化され、西洋では人間に被害を与えるのを防ぐため悪龍や毒龍を退治されてしまうことが見られる。東西におけるこの龍に対する概念の違いは、蛇のイメージの違いとも呼応するものであるようにも思われる。東アジアにおいては、蛇の存在は神と見なされ、信仰の対象として考えられることが多いが、キリスト教社会では聖書の中で蛇を悪の象徴として扱っている。本論は日中の作品を取り扱うものであるが、特に近現代文学においては、ヨーロッパにおける蛇のイメージが影響している場合も多いため、聖書の中の蛇の姿についても概観した。

異類婚姻譚の類型と先行研究をまとめると、多くの異類婚姻譚には人間への報恩譚との繋がりがあるが、結果的に異類は人間の世界に永住せず退去、追放、殺害という三つのパターンのいずれかを踏襲する場合が多いことが明らかになった。また、蛇との婚姻をめぐる物語の大半が悲劇に終わることも、注目すべき点である。異類が女性の場合には自ら退去し、または追放される形で話は終わるが、それに対して異類が男性の場合には、また来襲する危険があると考え、殺害して話は終わるという特質があるとの指摘や、男性中心の倫理観が異類婚姻譚に投影し、男性本位の考え方により、異類女房譚の女は善玉役と悪玉役に分類される点も重要だろう。

第二章では、日本と中国の蛇にまつわる異類婚姻譚から、後世の蛇物語に多大な影響を与えた馮夢竜「白娘子永鎮雷峰塔」(1624 年)と上田秋成「蛇性の婬」(1776 年)「を取り上げた。白蛇が女性に姿を変え、人類の男性とのロマンチックな恋物語を展開する「白蛇伝」の初めての小説化である「白娘子永鎮雷峰塔」と、その翻案といわれる「蛇性の婬」は、第三章以降で取り上げた現代の作品を考察する上でも重要な作品である。二作の関連性と共通点、相違点の検討と、これらの物語の中での異類と人間との関係性の分析を通して、女性たちが異類として描かれる意味や役割を改めて考察してみた。

この二作が全体の構成、登場人物の設定など多くの要素に類似性を持つことは、これまでも指摘されてきた。「白娘子永鎮雷峰塔」と「蛇性の婬」において、主人公の許宣と豊雄の共通点は、家父長制度における家族責任を背負わず、家業を継ぐ必要のない次男であるということである。先行研究で「利己的に女好き、臆病で無能、薄情かつ没義道」、「臆病で気が弱く、保守且つ時代遅れの価値観を持ちながら、自己防衛本能が強く、いよいよ家族を破壊することになる」「個人的魅力につながる面が、その片鱗さえ示されていない」と指摘される許宣の人物造形は、中国の伝統的な男性のイメージに反するものである。一方の豊雄は、「自己決定のできない人間」「無用者の位置に置かれ、家族の構造から疎外され、それに性格造形で母性的なものへの傾斜をみせる」「弱くて素直で世間知らずという特徴が見られ、周囲から孤立されながら幻想のような世界観を持つ男」と解釈されてきた。そのような男性が雨の日に船に乗った時、美しいヒロインと邂

逅し、しかもヒロインが結婚することを持ちかける。許宣と豊雄にとって、結婚のお金や支度まで準備してくれる美女が嫁になってくれることほど良い話はほかになく、簡単に受け入れる。そして、ヒロインの正体がわかると、自力で解決することもなく、ヒロインとのコミュニケーションをとろうともしない。

その主な原因は、許宣も豊雄も家族に援助されることが習慣になり、家族や社会からの期待もなく、男性としての責任を負う必要もないという人格であったからだと言えるが、豊雄と許宣の、ヒロインたちとのコミュニケーション不全によって、真女児は恐ろしい執念深い妖蛇に変身し、白娘子は愛情を追い求めつつ雷峯塔に鎮圧されることで、人間社会から排除される対象になる。

なお、白娘子と真女児が蛇の正体を暴かれた時に、二人が異なる対策をたてることは興味深い。豊雄が富子と結婚することで真女児との関係から逃げることに対して、許宣が道士、蛇とりの戴先生と禅師の法海を依頼し、白娘子と対抗することを選ぶのである。白娘子は許宣に対してすべてを捧げ、その正体が蛇であることが分かると、許宣との直接対話を通して自己主張をし、相手に訴えかける。「白蛇伝」には報恩譚や世話女房のイメージがあり、妖蛇に変身して人々を脅かすことは伝統文化における理想的な女性像に相応しくないと考えられてきた。「白娘子永鎮雷峰塔」では、対話を試みる白娘子に対して許宣が酷薄な態度を取り、法海に鎮圧されることで、愛情を追い求め、男性に献身的な女性像として描かれる白娘子が同情される対象にもなるのである。

一方の豊雄は、真女児が蛇であることを知ると彼女には何の確認もせず、ただ逃げ出して別の家に婿入りしようとする。白娘子と比較しても対話の機会と言葉を奪われた真女児は、人間性を失い、妖蛇となる。そして、夢見がちで現実に向き合う勇気のない豊雄の性質は、真女児が蛇という妖異であることによって、自分を単なる被害者とすることをためらわない。その結果、富子に取り憑くことでしか豊雄と対話できない真女児は、豊雄を取り戻すために何でもするという執着をもつことになり、自らを恐怖の対象としてしまうことが明らかになったと思う。

第三章では、1970 年代、80 年代に発表された日本と中国の現代文学作品から、蛇とされる女性と人間の男性との異類婚姻を扱った作品である中上健次『蛇淫』(1976 年)、水上勉『白蛇抄』（1982 年）、ラウ・イーチョン(劉以鬯)『蛇』（1978 年）を取り上げ、蛇女の表象と前章で論じた「蛇女」の表象や役割を比較しながら、人間の女性が蛇女として見なされる原因、及びそれぞれが作品に果たす役割、ヒロインと登場人物におけるコミュニケーション不全の問題などについて探求した。

『蛇淫』、『白蛇抄』、『蛇』において、ヒロインたちは全部異類ではなく、人類の女性であるにもかかわらず、いずれも「蛇の表象」が含まれることによって、妖蛇であると勝手に決めつけられる。『蛇淫』と『白蛇抄』では、蛇女は執着、淫欲、妖気などの象徴であり、子を産むこともない。1974 年の「市原両親殺害事件」という殺人事件を題材にし、上田秋成の『雨月物語』の「蛇性の婬」からタイトルをとった『蛇淫』は、親の出資でスナックを営む順が、恋人ケイとの放縦な生活を親に咎められ、ある日の喧嘩で両親を殺害してしまう物語である。先行研究では、女主人公のケイが真女児の転生でありながら、男を滅ぼす「邪悪な意志」として描写されることも指摘されているが、主人公の順は、親から恋人と別れるように言われた時、恋人と一緒に駆け落ちや心中することを考えず、「親殺し」という選択肢を選んでしまう。ここで、順の母親を苛立たせるケイの態度が、実はケイの右耳が聞こえないせいであることは重要だと思われる。

一見普通に登場人物たちが会話を交わしている『蛇淫』において、ケイの右耳が聞こえないことは、物語を動かすファクターなのである。聞こえない言葉を聞き取ろうと体をねじるケイの姿は、蛇のようでもある。コミュニケーションを阻害された女は、男にとっても、その母にとっても、蛇のように映るのだ。このようにみると、『蛇淫』は、「蛇性の婬」におけるコミュニケーション不全の引き起こした悲劇、という側面を踏襲しているようである。そして、最後の場面で「おれにとりついて、ここまできて、おれをみすてるのか」とケイの額を床の絨毯にこすりつける順は、ケイを蛇にすることによって、両親殺しの責任をケイに転嫁する。この構図も「蛇性の婬」と同様であることがわかった。

『白蛇抄』のヒロインうた女は、「男にへばりつくが好き」な女性だと描写される。夫と死別し、寺の後妻に入った彼女の姿を寺の手伝いにきた少女まつのの目から描くこの作品では、夫と義理の息子の承昌の世話をかいがいしくする「寺の奥様」が実は承昌や画家と関係を持つ「蛇の性」であり、無理心中を図った承昌によって殺害されるという無残な最期を遂げることになる。水上作品におけるこうした哀れで非道な結末が、作者における母への宿怨への代償であり、怨念の浄化措置として機能することは先行研究で指摘されていることだが、この物語を『蛇淫』と比較してみると、二作の共通点として、いずれも年長の女性がヒロインを「蛇」とみなしていることがわかる。その理由は、彼女たちが性に積極的であり、その魅力によって男性たちをひきつけるからである。性的魅力を発揮する女性は「男好き」で「淫乱」なのであり、それは執着、淫欲、妖気などをその特徴とする妖蛇のイメージに重ねられるのである。また、ヒロインのケイとうた女を厳しく妖蛇や淫乱と批判するのが「老女」たちであることも、この二作を読み解く際に重要であろう。

劉以鬯は『蛇』という作品に当時の香港の状況を投影していると指摘されている。許仙が不安と緊張の感覚を頭から拭い去ることができず、真摯な愛情を信じられないという状態は、その時代の香港人のトラウマをあらわすものであり、香港の作家として、政治的寓意とアイデンティティの問題を、登場人物の造形によって描き出したと言えるだろう。また、中国では「白娘子」のような蛇妖に母親の役割を加えることにより、「理想的な良妻賢母という女性像」が作られた。馮夢竜の「白娘子永鎮雷峰塔」の成立した宋代は父権と夫権時代の境に属し、女性が男性の支配に従うこと、男尊女卑の観念、男児待望の念願が当時の産育文化の特徴と見られる。この構造が『蛇』にも受け継がれていることも重要だと考えられる。『蛇』では最終的に許仙が家を出、ヒロインの白素貞がどうなるのかは明らかにされない。その点は「白蛇伝」よりもヒロインに自由を与える物語であるともいえるが、やはりこの物語においても、男性がそのように女性を「蛇性」であると思い込むことによって、作中のヒロインにすべての責任を転嫁することが可能である。

第四章では、これまでみてきた「蛇女」の表象を、1990 年代以降の女性作家たちがどのように描き出したのかを考察した。時代の変遷とともに、女性の役割は従属的な良妻賢母から解放され、新しい女としての自己主張や、主体的な言説の発信性を求められ始める。フェミニズムの流れによる性化された語法、ジェンダー研究の視点をも取り入れながら、女性作家が描き出す物語を検証し、蛇のイメージと役割、女性の表象といった問題を追究した。取りあげたのは、李碧華《青蛇》と、坂東真砂子『蛇鏡』、川上弘美『蛇を踏む』、本谷有希子『異類婚姻譚』である。この四作に共通するのは、ヒロインたちが伝統的な女性像から逸脱し、女性の自覚と発話権が現れる点と、物語が悲劇になるとは限らない点である。

《青蛇》においては、白蛇（白素貞）のお付きの青蛇が主役となり、全編の語り手となる。彼女はさまざまな経験を積み、男主人公の許仙を殺すことで物語を逆転する。

また、第三章で扱った『蛇』でも白素貞は妊娠したが、《青蛇》では実際に子供を産む白素貞の描写が見られる。中国の蛇女のイメージは「母親」の役割を加えられることによって、物語の展開を変えることになる。白蛇が産んだ子供の子孫が、結果的に白蛇を雷峯塔から解放するのである。

『蛇鏡』では、婚約者の愛情を求めるだけのヒロイン、永尾玲が、姉の自殺と関わりがありそうな蛇の鏡を見つけてから、その鏡に導かれるように新しい自分を発見していくことになる。この物語における「蛇性」は、ヒロインを「二つの人格に分裂」させるものと描かれるが、それは女性を自分の内面と向き合わせ、自らの主体性やセクシュアリティーについて考えさせる装置として働いているのである。

『蛇を踏む』においては、蛇の登場が主人公であるヒワ子の日常生活を変えはじめる。人間に変身した蛇は母親の役割を演じ、ヒワ子を蛇の世界に執拗に誘う。このヒロインと蛇女との関係については、家族、女性同性愛、異類婚、とさまざまな解釈がなされているが、この作品において重要なのは、男性主人公の不在または欠如をものともせずに、ヒロインが成熟していくさまである。この作品が明らかにするのは、男性がいなくても、女性は成長できる、ということではないだろうか。

『異類婚姻譚』では、主人公サンちゃんの夫婦関係から、女性が相手に応じて自分の好き嫌いを押し殺してでも関係を維持しようとしてきたことが描かれている。しかし、第二章と第三章にも見られた「コミュニケーション拒否」の構図は、この作品にも見られる。弟の彼女のハコネちゃんの語る、２匹の蛇が互いに相手食べ尽くしてしまう蛇ボールの話や、近所の住人とのトラブルの原因を作りながらそれを処理する主人公をひとごとのようにみつめる夫とのエピソードを経て、主人公は自分を偽ることをやめ、夫にもそれを伝える。ここでのヒロインは、男性に束縛されるのをやめる代わりに、夫も男性としての家族的な役割から解放し、山芍薬に変身することを尊重するのである。

なお、これらの四作は、家族の多様性とセクシュアリティの多元性を示すことにも成功しているといえるだろう。

本論ではいくつかの作品を取り上げて「蛇性の表象」をまとめたが、「蛇」に関わる作品はたくさんあるため、女性の「蛇性」の表象やイメージ、及び役割が十分に論じられたとはいえない。また、蛇が女性として登場する以外の作品、蛇婿や蛇男が現れている作品との比較研究も必要だろう。本論文では触れる余裕がなかったため、それらの作品に関して今後分析を展開していくことで、また新たな研究視点も生まれうると考えられる。これらの課題を今後の研究課題として、さらに研究を進めていきたい。

参考文献

【一次資料】

〈単行本―日本語〉

川上弘美 1996『蛇を踏む』文藝春秋

中上健次 1995『中上健次全集 2』集英社

中村幸彦・高田衛・中村博保(校注・訳)1995『新編日本古典文学全集 78・
　英草紙／西山物語／雨月物語／春雨物語』小学館

坂東真砂子 1994『蛇鏡』マガジンハウス

松枝茂夫・入矢義高・今西凱夫訳 1970『中国古典文学大系 25 巻
　宋・元・明通俗小説選』平凡社

水上勉 1995『新編水上勉全集　第六巻』中央公論社

本谷有希子 2016『異類婚姻譚』講談社

〈単行本―中国語〉

李碧華 2013《青蛇》北京新星出版社

劉以鬯著/梅子編 2014《香港當代作家作品選集・劉以鬯卷》
　香港:天地圖書有限公司

〈引用・参照辞書〉（出版年順）

三民書局編篆委員會 1985《大辭典》三民書局

宋文軍・姜晩成編 1987『現代日漢大詞典』北京商務印書館，東京小学館

堀井令以知 1989『語源大辞典』東京堂

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 2000
　『日本国語大辞典　第二版　第一巻』小学館

吉田金彦 2001『語源辞典　動物編』東京リスマチック

北京・商務印書館・小学館共同編集 2016『中日辞典　第 3 版』小学館

【二次資料】

〈単行本―日本語〉

秋成研究会編 2016『上田秋成研究事典』笠間書院

秋山洋子・江上幸子・田畑佐和子・前山加奈子訳 1998『中国の女性学―平等幻想に挑む―』勁草書房

浅田彰・秋山駿・谷川雁・四方田犬彦・渡部直己 1996『群像日本の作家 24 中上健次』小学館

アジア民族造形文化研究所編 1992『アジアの龍蛇―造形と象徴―』雄山閣

阿部真司 1981『蛇神伝承論序説』伝統と現代社

アマン・カトリン 2000『歪む身体現代女性作家の変身譚』専修大学出版局

石井進・石母田正・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一著 1972『中世政治社会思想上　日本思想大系 21』岩波書店

石井良助 1950『長子相續制　法律学体系第 2 部 法学理論篇』日本評論社

石月静恵・藪田貫編 1999『女性史を学ぶ人のために』世界思想社

伊藤慎吾 2016『妖怪・憑依・擬人化の文化史』笠間書院

井上泰至 2009『雨月物語の世界 ： 上田秋成の怪異の正体』 角川学芸出版

入矢義高・吉川幸次郎・神谷衡平訳 1958『中国古典文学全集第七巻 京本通俗小説/雨窓欹枕集/清平山堂話本/大宋宣和遺事』平凡社

植田一夫 1988『雨月物語の研究』桜楓社

内田樹 2002『女は何を欲望するか？』径書房

鵜月洋 1980『雨月物語評釈』角川書店

江原由美子・金井淑子編 1997『ワードマップ　フェミニズム』新曜社

大塚英志 2004『サブカルチャー文学論』朝日新聞社

大庭祐輔 2006『竜神信仰 ： 諏訪神のルーツをさぐる』論創社

大間知篤三 1967『民俗民芸双書 18　婚姻の民俗学』公明社

大輪靖宏 1976『上田秋成文学の研究』笠間書院

岡部隆志 1994『異類という物語『日本霊異記』かた現代を読む』新曜社

奥野卓司・秋篠宮文仁 2009『動物観と表象』岩波書店

加藤秀一 1998『性現象論　差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房

紙村徹編・解説 2006『神々の物語 ： 神話・伝説・昔話集』草風館

河合隼雄 1977『昔話の深層』福音館書店

木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江(編)2013『よくわかるジェンダー・
　スタディーズ人文社会科学から自然科学まで』ミネルヴァ書房
倉田容子 2010『語る老女語られる老女 ： 日本近現代文学にみる女の老い』
　學藝書林
後藤優 1981『人と動物の愛と結婚』原書房
小澤俊夫 1994『昔話のコスモロジー』講談社
小松和彦 1985『日本昔話研究集成①　昔話研究の課題』名著出版
小松和彦 1998『異界を覗く』洋泉社
小松和彦 2003『異界と日本人―絵物語の想像力』角川書店
小松和彦 2006『日本人の異界観』せりか書房
小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房
笹間良彦 1975『龍―神秘と伝説の全容』刀剣春秋新聞社
笹間良彦 1991『蛇物語―その神秘と伝説―』第一書房
澤田瑞穂 1975『中国の昔話』三弥井書店
澤田瑞穂 1978『中国動物譚』弘文堂
施翠峰 1977『台湾の昔話』三弥井書店
菅原克也 2017『小説のしくみ ： 近代文学の「語り」と物語分析』
　東京大学出版会
篠田知和基 1997『竜蛇神と機織姫　文明を織りなす昔話の女たち』人文書院
清水良典 2003「<異種>への懸想」『総特集　川上弘美読本』『ユリイカ』
志村有弘 2011『日本ミステリアス　妖怪・怪奇・妖人事典』勉誠出版
真銅正宏 2016『触感の文学史― 感じる読書の悦しみかた』勉誠出版
鈴木敏也著・芳賀矢一編 2003『秋成研究資料集成　第 3 巻雨月物語新釈』
　クレス出版
関敬吾 1950『日本昔話集成 I 動物昔話』角川書店
関口裕子 2018『日本古代女性史の研究』塙書房
千石英世 2004『異性文学論―愛があるのに』ミネルヴァ書房
高田衛 1980『雨月物語評解』有精堂
高田衛 1999『女と蛇―表徴の江戸文学誌』筑摩書房
高田厚一 2002『雨月物語の表現』和泉書院
竹田晃・黒田真美子編 2007『中国古典小説選 1 穆天子伝・漢武故事・
　神異経・山海経 他<漢・魏>』明治書院

谷川健一 1975『神・人間・動物―伝承を生きる世界』平凡社
谷川健一 1998『日本民俗文化資料集成　第二十巻』三一書房
田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編 1997『ジェンダーと女性』
張競 2002『天翔るシンボルたち ： 幻想動物の文化誌』
堤邦彦 2006『女人蛇体　偏愛の江戸怪談史』
徳田和夫編 2018『東の妖怪・西のモンスター―想像力の文化比較』勉誠出版
中沢新一 2015『日本文学の大地』角川学芸出版
長島弘明 2000『秋成研究』東京大学出版会
中村禎里 2006『日本人の動物観―変身譚の歴史』ビイングネットプレス
西川直子 1999『クリステヴァ―ポリロゴス 現代思想の冒険者たち第 30 巻』講談社
服部邦夫 1989『昔話の変容』青弓社
日高敏隆 1990『動人物―動物のなかにいる人間』福村出版
ペイゲルス著/絹川久子・出村みや子訳 1993『アダムとエバと蛇「楽園神話」解釈の変遷』ヨルダン社
前田愛 1982『都市空間のなかの文学』筑摩書房
松浦史子 2012『漢魏六朝における『山海経』の受容とその展開 :神話の時空と文学・図像』汲古書院
松田敬之 2008『次男坊たちの江戸時代 公家社会の〈厄介者〉』吉川弘文館
松田稔 1995『『山海經』の基礎的研究』笠間書院
松田稔 2006『『山海經』の比較的研究』笠間書院
水田宗子 1993『物語と反物語の風景』田畑書店
水田宗子・小林富久子・長谷川啓・岩淵宏子・北田幸恵 2017『現代女性文学を読む：山姥たちの語り フェミニズム／ジェンダー批評の現在』アーツアンドクラフツ
宮下拓三 1989『漢文のある風景―中国古典誕生の地を訪ねて―』黎明書房
宮田登 2006『宮田登　日本を語る 11　女の民俗学』吉川弘文館
宮田登 2007『宮田登　日本を語る 13　妖怪と伝説』吉川弘文館
宮本延人 1985『台湾の原住民族 ： 回想・私の民族学調査』六興出版
メイエール・シャルル著/辻由美訳 1995『中国女性の歴史』白水社
森田喜郎 2003『上田秋成文芸の研究』和泉書院
森山重雄 1982『幻妖の文学　上田秋成』三一書房
矢田尚子 2018 『楚辞「離騒」を読む ： 悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐって』東北大学出版会

柳田国男 1940『妹の力』創元社
矢野公和 1987『雨月物語私論』岩波ブックサービスセンター
吉田幹夫 2015『日本古代恋愛文学史』笠間書院
吉野裕子 1979『ものと人間の文化史　32・蛇　日本の蛇信仰』
吉野裕子 1980『ものと人間の文化史　39・狐　陰陽五行と稲荷信仰』
吉野裕子 1994『十二支―易・五行と日本の民俗』人文書院
吉野裕子 1999『蛇―日本の蛇信仰』講談社
吉野裕子 2007『吉野裕子全集 5』人文書院
四方田犬彦 1996『貴種と転生・中上健次』新潮社
若桑みどり 2000『象徴としての女性像　ジェンダー史から見た家父長制度における女性表象』筑摩書房

〈中文著書〉

陳國鈞 1964《臺灣土著社會始祖傳說》幼獅文化
楚戈 2009《龍史》國家圖書館
馮夢龍 1956(著)/嚴敦易(校註)《警世通言》作家出版社
馮夢龍編・魏同賢校 1993《馮夢龍全集 警世通言》江蘇古籍出版社
胡台麗 2010《排灣文化的詮釋》聯經
潘江東 1981《白蛇故事研究(上)附資料彙編》學生書局
袁珂 1995《山海經校注》里仁書局

〈日本語論文・雑誌〉

阿部泰記 1995「『白蛇伝』の発展 ： 怪談から報恩譚へ」山口大学アジア歴史・文化研究会『アジアの歴史と文化』第 2 号、10 月、P. 1-19
池上貞子 2010「劉以鬯と也斯--香港文学の継承・発展をめぐって」『跡見学園女子大学文学部紀要』44 号、跡見学園女子大学、P. 15-26
井上泰至 2018「考証から紡がれる物語 ―『雨月物語』「蛇性の婬」論」佛教大学国語国文学会『京都語文』第 26 号、11 月、P. 30-43
禹鍾泰 1996『異類婚譚にみる人格統合の象徴化 ： 日本と韓国』、総合研究大学院大学博士論文(学術)

王貝 2016『中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察:狐、蛇、虎、犬、亀を中心に』、大阪大学博士論文（言語文化学）
門池真菜 2014「文学作品からみる蛇に対するイメージの変化―他宗教からの影響」『英米文學英語學論集』第 3 号、3 月、関西大学英米文学英語学会、P.65-100
金田文雄 1994「『蛇性の婬』における物語の場 ―記紀神話をめぐって―」『広島女学院大学日本文学』 広島女学院大学、7 月、P.21-33
川田耕 2014「白蛇伝にみる近代の胎動」『京都学園大学経済学部論集』第 23 巻 2 号、3 月、京都学園大学経済学部学会、P.35-57
川村湊 1997「現代作家論シリーズ(第 9 回)坂東真砂子論--「因果」の軛」『文学界』1997. 5 月号、P.222-234
川森博司 1993「異類婚姻譚の類型分析―日韓比較の視点から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集、P.385-406
紀和鏡 2016「中上健次という回転体」「[生誕 70 年記念特集]中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号
近藤忠義 1957「「白蛇傳」と「蛇性の婬」」『日本文学』第 6 巻第 5 号、日本文学協会、P.376-379
黒田賢治 1981「水上勉論―水上勉における母性回帰願望とその代償機能としての異性観」『日本文学誌要』第 24 号、2 月、法政大学、P.49-63
呉艶 2011「異類婚姻譚におけるジェンダーの中日比較研究」『同志社国文学』第 75 号、P.14-26
嶋田彩司 2002「典拠と批評 ―「蛇性の淫」と中上健次」『国文学研究』第 136 集、早稲田大学国文学会、P.29-38(2002-03-15)
谷口義介 2014「馮夢龍と黄圖珌のあいだ ： 白蛇傳・小説から戯曲へ」『学林』 第 58 号、3 月、立命館大学、P.78-103
旦部辰徳 2018「中上健次「蛇淫」論―「事実の肯定」をめぐって―」『あいだ/生成= Between/becoming』第 8 巻、あいだ哲学会(京都大学大学院人間・環境学研究科武田宙也研究室)、P.20-33
屠柳青 2016『中日古典文学における蛇イメージの比較研究－唐代小説と平安説話を中心に―』河南师范大学日语语言文学专业修士論文
永井里佳 2017「本谷有希子「異類婚姻譚」試論 ： 階層・属性・結婚」日本文学協会近代部会『近代文学研究』第 30 号、P.63-75
中上紀・市川真人 2016「中上紀が「中上健次」略年譜を解説する」「[生誕 70 年記念特集]中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号

中田妙葉 2008「『蛇性の婬』における人物形象の創作と中国白話小説の影響について」『東洋法学』第 51 巻第 2 号、3 月、東洋大学、P. 89-120
中村とも子・弓良久美子・間宮史子 2001「昔話の研究 異類婚姻譚に登場する動物(1)動物婿と動物嫁の場合」『子どもと昔話』第六号、古今社、P. 17-23
難波美和子 1993「異類婚姻譚の「異類の妻」と「異類の夫」」『文学研究論集』第 10 号、筑波大学比較・理論文学会、P. 117-129
野村正昭 1983「夢、幻のごとく踏み迷える世界を―伊藤俊也監督インタビュー」『キネマ旬報』第 873 号、キネマ旬報社、P. 56-59（1983-11-15）
樋口瑞希 2012「「蛇姓の婬」研究:「反転」という皮肉」、『群馬県立女子大学国文学研究』第 32 号、3 月、群馬県立女子大学国語国文学会、P. 69-81
松本信廣 1922「支那古姓とトーテミズム(下)」『史学』一巻、一・二號
水谷豊 2016「回想―『青春の殺人者』中上作品の主人公を演じて」「[生誕 70 年記念特集]中上健次 ふたたび、熊野へ」『kotoba コトバ』2016 年冬号
宮崎沙織 2012「『雨月物語』について:豊雄と真女子から読み解く「蛇性の婬」」『日本文学』第 108 巻、3 月、P. 145-157
山下愛美 2008「『蛇姓の婬』--豊雄の成長と〈死〉」『玉藻』第 43 号、3 月、フェリス女学院大学国文学会、P. 50-61
楊静芳 2014『中日昔話における異類婚姻譚の比較研究』、東京学芸大学博士論文（学術）
吉田幹生 2009「異類婚姻譚の展開 ： 異類との別れをめぐって」『日本文学』58 巻 6 号、日本文学協会、P. 12-19
楊柳岸 2015『水上勉の女性観についての考察―瀋陽の月を中心に―』大连外国语大学大学院日本語言語文学専攻修士論文
劉慧 2018『東アジアにおける白蛇伝映画の研究―女性の表象をめぐって』筑波大学人文社会科学研究科博士論文（人文科学）
柳政勲 2016『近代日本の怪談研究 ―明治期幽霊譚をジェンダー、戦争、植民地主義の視座から読み直す―』筑波大学博士論文（文学）

<中国語論文・雑誌>

陈树湘 2004「刘以鬯小说简论」《淮阴工学院学报》第 13 卷第 2 期、4 月
陈艳丽 2010「人之善恶论——论李碧华《青蛇》中的青蛇形象」《现代语文（文学研究版)》 2010 年 03 期
孔凌霄 2006『中日文学中的蛇女形象』对外经济贸易大学日语语言文学专业硕士论文
李佩樺 2005《香港作家李碧華小說之研究》中央大學中國文學研究所碩士論文
李胤霆 2014《從李碧華「故事新編」看女性角色之再造》東吳大學中國文學系碩士論文
刘雪梅 2012「刘以鬯小说《蛇》的“互文性”解读」《语文教学通讯》第 682 卷第 5 期、5 月
谭本龙 2016「论许仙形象的类型化嬗变」《贵州大学学报（社会科学版)》第 34 卷第 4 期、贵州工程应用技术学院人文学院
曾尹嬋 2009『宋傳奇異類婚戀故事研究』國立高雄師範大學國文學系碩士論文
张文琴 2018「《白蛇传》故事的演变及主要人物形象浅析」《戏剧之家》第 3 期
鍾宜書 2014《李碧華長篇小說悲劇人物研究》彰化師範大學國文學系碩士論文
朱崇科 2005〈雅俗混雜的香港虛構——淺解《青蛇》〉《世界華文文學論壇》第 1 期